

『貴方は行つて御覽になりましたか？』

『わしはまだ行かん。……わしのやうな罪の多いものとはとても救はれさうにもないぢやでな。』ちよいと笑つて、『黙りくさつてゐる男ぢやつたがな。』

『何處から来たかといふことはつひにわからんですか。』

『わからんな。……この近所のものではないといふことだけはわかるが、何うしてこんな山の中にまぐれ込んで来たか、私も始め度々きいて見たが、黙りくさつてつひぞ話しをらん。』

『ふん……』

また學生達は考へて、

『金縁の眼鏡をかけてゐるのは面白いな。坊主でもないんだな。』

『さうだな……一つ行つて見るんだな。』

こんなことを二人は言つた。

そこでかれ等は本籍を言ひ、ゐる室をきめて貰ひ、自炊の道具などを借りて来た。其處でも此處でもその生佛の感化は著るしかつた。かれ等のわり込んで同宿させて貰つた旅客は、中年の紳士で、何でも東京の方の客だつたが、その人も現に行つて見て、不思議の感に打たれたといふ話をかれ等にしてきかせた。

『僕も始めは笑つて行つて見た一人です。何處かの山師の坊主が食ふに困つてやつたこと位に思つて馬鹿にして行つて見たです。ところが、さうでない……。全く不思議です。人間もあそこまで行くと、あなるものかと思ひました……。説法をしてゐるのを聞いてゐると、その男が言つてゐるのでなくて、そのかけにある大きな力のある尊い物がゐて、そしてそれが人間に向つて、人間の罪惡、人間の惡德、または人間の醜い姿を一々指摘してゐるやうな氣がしました。それに、第一、かれは近い中に死ぬと言ふのです。それを見て居れと言ふのです。人間の罪惡を負つて、代つて自分が死ぬと言ふのです……。それなどが大勢の心を第一に支配したんですな……。』かう言つてその紳士は思ひ出すやうにして、『それに、言ふことがいかにも立派だ……。本當だ……。人間の考へてゐることを、またはやつてゐることを、ちやんと見透してゐる。一々本當の、思ひ當るやうなことばかりです。肺腑をつくやうなことばかりです。確かに不思議です。』

『何んな男ですか？』

『立派な男です。體格も大きい。眼光も爛々としてゐる。鬚がかう一面に……。』と手眞似をして、自分の顔を撫でるやうにして、『一面に生えて白く垂れてゐる。信じたものには、説法してゐる最中に後光が見えるなどと言つてゐますが……。』

『それは面白い。是非行つて見ませう。』

かう言つて學生達は山路につかれた脚半をそこで始めて脱いだ。

折れ曲つた山路の群集をわけて、その堂まで行つて説教を聞いて歸つて來た二人の學生は、最早面白とか、めづらしいとか言ふ心持ではゐられなくなつた。驚くべき不思議を見たといふ心と、ある大きなものに渴仰する念と、人間の罪惡に恐れ戦くやうな念とが一杯にその體中に漲り渡るのを覺えた。爛爛とした大きな血をそゝいだやうな眼、それがかれ等の眼前に歴々とちらついて見えた。その眼にはあらゆる世間の惡徳、または罪惡、または虚偽に對する憤怒が燃えて生きてはゐるはしなかつたか。または人間の根本の如何ともすることの出來ない運命に熱い反抗を見せてはゐなかつたか。『一方に金持が金を貯めて持つてゐる。持つてゐるといふことは罪惡である。それだけで既に死に値してゐる！』

かう言つた時に輝いたその眼光の中には、かれがさうした人間の惡徳に無限に苦められた醫やすべからざる憤怒が充たされてはゐなかつたか。また、『妻は夫を欺き、親は子を捨て、女は男を惑はし、同胞相姦し、友人相陥れるやうなこの世の中に……』と言つた時の眼のかゝやきの中には、あらゆるさうしたかれの内部の憤怒があらはれて來てはゐなかつたか。

『不思議だ……』

『本當に不思議だ。あの眼がちらついてしやうがない。あの聲が耳にのこつて忘れられない。』

『君も、さうか。不思議なこともあるものだな。』

『あれは一生忘れることの出來ない光景だ……』

『本當だな……』

かう言つて二人の學生は深く考へながら歩いた。

二人は昨日まで滞在してゐた小さな溪谷の温泉場を思ひ浮べた。かれ等には今はそこは人間界の底の底にあるやうに思はれた。さうした考へなければならぬことはふかく藏して置いて、むしろそれに觸れることの辛さのために傍に放つたらかして置いて、平氣で無意味に日を送つてゐる人達の醜さと慘めさとがありありと見えた。此處は何うしても同じ世界とは思はれないやうな氣がした。こゝから比べると、溪谷の温泉場の人達の顔は、何んなに貧弱であつたらうか。何んなに蒼褪めて勞れて見えたであらうか。また何んなに低級なあはれな生活をしてゐたであらうか。かう思ふと、自分達のゐる學舎の慘めな生活が一層慘めに、さながら、『餓え疲れた餓鬼』の縮圖のやうになつて見えた。

かれ等はまた昨日登つて來た峻しい路を思ひ浮べて見た。それはとても人間のやつて來られないやうな路であつた。晝も夜のやうな密林が深く續いた。日光も洩れて來なかつた。谷川は深く底の方で鳴つた。かれ等は何遍あとへ引返さうとしたか知れなかつた。時には胸を衝くやうな峻険に逢つて喘ぎ、時には深い谷の中に路を失つて絶望の聲をあげた。あるところでは、『もうとても駄目だ。とても行かれない……』

…路といふ路なんかありやしない。もう引きかへさう……』かう一人は言つた。一人の方も、とてもこれは駄目かと思つた。かれ等は行かうか引きかへさうかの二途に迷つて、暫く崖の下の岩に腰をかけて休んだ。

『でも、折角こゝまで来たんだ。もう少くとも三分の二は来た。此處で歸つて了つては、折角こゝまで艱難を経て努力してやつて来たことが冗になつて了ふ。いかにも残念だ……。それに、人の全く行けない温泉ではない。この險を冒して行き得る人もいくらかあるんだ……。行かうぢやないか。』

かう一人が言ふと、

『行かう！』

かう他の一人も應じた。そしてかれ等は再び路を谷と谷との間にもとめて、そしてやつて来たことを思ひ出した。そしてその勞苦が、普通でなかつた勞苦が、かうした不思議な温泉場や、そこにゐる熱狂した人達や、長蛇のやうに山の堂に連続して詣で、行く群集や、爛々とした大きな眼のかゝりや、鐘を撞いたやうな高い淨い聲の下にかれ等を伴れて来たことを思ひ起した。かれ等はいよいよ不思議な氣がした。かれ等の身は縁があつて、その低い低い世界からかうした高い淨土に引きあげられたやうな氣がした。

『本當にさうだ……。あの生佛さまの仰有る通りだ……。そのために、私達はこれまで苦んで来たのだ。今日から改めよう……。必ず思ひ改める。』

こんなことを言つてゐる人達はそこにも此處にもゐた。誰一人として、その生佛の功德を説かないものはなかつた。人達は女も男も用事を放つたらかして、朝から山の上に登つて行つた。

二人の學生は益々その特色ある温泉場のさまに心を惹かれた。或時にはその大きな船に似た家屋が、すつかり深い霧の中に埋められて、丸で大海の中にでもゐるやうな心持になることもあれば、凄じい雷聲が山の一角から起つて、天地が今にも覆るかと思はれるやうな恐怖に全身を襲はれることもあつた。そこではすべてが澄んで、張りつめて、疲れてだらけてはゐられないやうな氣がした。

澄んだ空氣の中に、白いくつきりした色を見せて、怒號して空に向つて迷つてゐる噴泉は、をりをりかれ等にある暗示を與へた。その全涌にも、矢張山の上のその僧の憤怒に似た形が感じられた。

ある日、そこからさう大して遠くないB岳の噴火坑を探りに行つた時には、かれ等は巖舎で教はつた種々の岩石やら高山植物やらを彼方此方にさがして、火口壁のあたりを其處此處と歩いた。そこは温泉場よりも、その温泉場の上にある堂のある山よりも、更に高く碧い空に聳えてゐるので、その堂とその堂に向つて歩いて来る人の群とがそこから小さく黒く見えた。

勞れて岩石に腰を下した二人は、黙つてその堂を見下した。

『不思議な気がするねえ。あの堂に、あゝした人間がゐると思ふと。』
かう一人の方が言つた。

『本當だ……』

『あゝした人間も、矢張、僕等と同じなんだからな。同じ血も流れてゐれば同じ心や同じ感情も持つてゐるんだからな。僕等にだつて、場合に由れば、あゝした心の形になることはないと言へないからな。』

『それはさうだ……』

『何の意味もなしに、實際的方面の何の要求もなしに、あゝして説法してゐるのだから不思議ぢやないか。そこがまた人を引きつける力が出て来る處ぢやないか。實際、死の近づいて來てゐるのを自分で豫感してそしてあゝして説法をしてゐるのかも知れないからな。』

『實際世間の困難や不如意を餘りに多く嘗めると、あゝした気分になるかも知れないからな。……何うしたつて、さうした鬱積した氣から起つた説法でなくつては、あゝまで人を引きつける譯はないからな。』

『曾てこの山だつてあの僧のやうに凄じい怒號をやつたことがあるんだからね。』

『天然だつて、人間だつて、同じことだ。一つも違ひやしない。』

かう言つて深く思ひ當つたやうに一人の方は考へに沈んだ。

一人はふと思ひ附いたやうに、

『さう言へば、あの生佛は、これまでも彼方此方で、多少の奇蹟をやつて來たといふ話だね。』

『そんな話をきいたかえ？』

『昨夜、おそく湯に行つてゐると、その話をしてゐる人があつたよ。湯の中はランプ一つしかついてゐないから、それを話してゐた男は何ういふ人だつたかちよつとわからなかつたけれど、何でも白鬚でも生えてゐる老人らしかつたよ。M縣では知つてゐるもののがかなりあるといふことだよ。何でも去年はPあたりの山村にゐたさうだ。そして矢張大勢の信仰者を率ゐてゐたさうだよ。』

『さうかね。それは初めて聞いた。』

『生れは何でもF縣の梁川あたりの山の中だつて言つてゐたよ。陸軍の中尉あたりまでなつて、戦争にも行つたことがある男ださうだ……。昔から不思議な、宗教めいたことばかり言つてゐるやうな男だつたつていふことだつた。二三年前には、仙臺で大道説法をやつて、信仰者が大變出來て、警察から取締られたことがあるさうだよ。新聞などにも随分書かれたものさうだ。しかし、決して悪いことはしないから、警察でも何うすることも出來ない。實際、生佛かも知れないんだけど、さういふものは取締上非常に厄介なので、縣では成るだけ自分の縣に置かないやうに、他縣へ行つて貰ふやうに、やうにとしたんださうだ……。石の巻あたりでも、随分信仰者が出來て騒ぎだつたつて言ふやうなことを話してゐたよ。』

『それは面白いな。』

『だから、事務所の老人の話では、丸で後も先もなさうなことを言つて、ひよつくりこの山に出現して、急に浴客の信仰を得たやうに言つてゐたけれども、さうぢやないらしいよ。かねぐゝ信仰してゐた信徒が、あれのあとを追つて、この山の上まで集つて来たといふ形も大いにあるんださうだ。』

『さうだらうな……それは面白いな。何故君はそれを今まで話さなかつたんだ？』

『だつて、昨夜は君は寝てゐたし、今朝はちよつとその話を忘れてゐたからね。』

『さうかな……』一人の方は考へて、

、『それぢや別に、僧侶つて言ふ譯でもないんだね。』

『僧籍にもゐたことはあるやうなことを言つてゐたよ。何でも佛教ばかりではなく、耶蘇教もやれば、哲學もやつたらしいことを言つてゐたよ。何でも社會主義者の僧侶の中にもその名があつたつて言ふことだ……』

『兎に角、知識は豊富に持つてゐる人に違ひない。外國と日本の今の事情にも決して暗くない。それは、この間、ちよつときいただけでもわかる。』

かれ等はそんな話をしながら噴火坑から下りて来た。

かれ等は折れ曲つた山道の難道を思ひ出した。またその荒れ果てた山上の堂をも思ひ出した。かれ等も

矢張毎日のやうに其處に出かけて行つた群の一人であつた。敗屋の中に、周圍に一杯に満ち渡つた群集、大きな冴えた金石のやうな聲、難有いと思はれるところに行くと、老若男女は皆な珠數を繰つて稱號を唱へて合掌した。ある時には、餘りに深く感動した群集が家の外から、周圍から皆ドシドシと狭い堂の中に押詰めて行つて、その僧の立つてゐる裾のあたりを取巻いて熱狂したさまなどをも二人は頭に浮べて見た。

ある晴れた日の午後であつた。テントの張つてあるところから大きな浴槽に通ふ廣場——正面に例の高い噴泉の白く釜涌してゐるのが見えて、熱湯が湯氣を立て、縦横に荒れてゐるところに、一人の白髪の老婆の珠數を持つたま、跪いて泣いてゐるのを中心にして、男や女や、荒れた唇や、蓬なした髪や、半裸體の銅色した肌や、粗い縞の浴衣やらが取廻いた。斜にさし込んだ日は、赤く其處に立つてゐる肥つた田舎者の顔を照した。

『生佛さまの臨終はもうお近づきになつた……もうあの難有い御說法も、あの難有い御聲もきくことが出来なくなる……あゝもう闇ぢや……あゝもう闇ぢや……元の闇の世界にまたなつて了ふぢや！』

かう半ば泣きじやくりながら、跪いた老婆は何遍となく繰返した。『あゝもう闇ぢや……』といふその言葉が、餘り度々繰返されるので、終には一種の調子を帯びて、それが『あゝだア、あゝだア、だア』

と聞えた。そしてそれを繰返す度に涙はほろほろと大地に落ちた。

その老婆は今までいつも山の上の堂の中に見出されたすぐれた渴仰者の一人であるといふことが、不思議な動搖と空気を四邊に齎らした。噂はそれからそれへと傳はつて行つた。

老婆が涙の間に絶え絶えに話すところに由ると、その生佛さまは、去年自分等の住んでゐる地方から忽ち姿を躲して了はれた。『もう世は末ぢや。末法の世ぢや……私の力では何うすることも出来ない。』かう仰しやつて、そして何處に行くといふことも仰しやらずに掻き消すごとく姿を躲して了はれた。そのため、村は闇になつた。世界は闇になつた。私達は再び元のやうに、父子相そこなひ、君臣相戦ひ、兄妹相姦し、利慾の下に人間同士が互にその肉を食ふやうな闇の世に戻つた。そのため私達は何んなに生佛さまの踪跡をさがして歩いたか知れなかつた。私達は子供が親をさがすやうに、家來が主人を慕ふやうにしてそこからそこへとさがして歩いた。この世間に居られるものならば、草を分けても捜し出さなければならぬと思つた。ところが生佛さまはいつかこの山の上に来て居られた。それと知つた時には、私達は何んなに喜んだことか知れなかつた。誰も彼も皆なその跡をお慕ひ申して、険しい山坂を踏えてこのS温泉場に登つて來た。しかし険しい山坂も何であらう。若い者の容易に登れない山路も何であらう。生佛さまに再び逢ひ奉らんがために、老いたものも、女も、幼いものも皆なそれを踏えてやつて來た。そして光明はまた再び其處にあつた。渴仰隨喜の涙は龍津瀨のやうに流れた。しかし、生佛さまは

幾日かの満願の時を待つて、遂にあの世にお歸りになるといふお言葉である。それでもまだ私達はその清淨な御聲を聞き、つよい正しい御眼の光を見奉つて、この汚れた心を淨くすることが出來た。しかしもう満願の時は近づいた。臨終に入らせられる時は近づいた。涅槃に入らせられても、生佛さまは常に私達と一緒にあると仰せられるけれど、それでももう再びあの御聲は聞くことが出來ない。あの御眼は見る事が出來ない……『それでかうして泣くのぢや、』と言ふことであつた。

それを聞くと、信仰者は、一齊に、『南無阿彌陀佛』と言つて皆な珠數を繰つて大地に泣き伏した。

老婆の歩いて行く跡には、稱號を唱へる聲と、珠數を繰る音と、大地にひれ伏す氣勢とが到るところに續いた。炊事場の近くに老婆の立留つた時には、米を炊いてゐるものは、その米を置き、水を汲まうとしたものはその柄杓を下に置いて、そして皆その周圍に走り集つた。

大きな家屋の隅の隅にその室を持つてゐた二人の學生の耳にもその噂はきこえて來た。二人が急いで出て見た時には、その群集に取巻かれた老婆は、午後の日を一面にその後に受けながら、靜かに坂を賣店などのある方へと下りて行くところであつた。時々、老婆の何とか言ふにつれて、群集は大きな聲を擧げた。

二人はあとをついて行つた。

何處の家からも人達が皆ぞろぞろ出て來た。群集の圍は次第に大きくなつて行つた。

時には歩き、時には留り、また時には調子のついた『あゝだア、だア、だア、だア』といふ聲がきこえた。自暴になつたやうに夢中に珠數の手を高く擧げてそれを揉んでゐる男の顔から汗がだらだら膏のやうに流れた。

『なんだ！ 山の上の男が今死ぬんだ？ それは見物だ。』

こんなことを言つて、急いで向うへ驅けて行くものなどもあつた。

種々な噂が二人の學生の耳に入つた。或は深い信仰に入つてゐるもの、或は半ばそれを信じて半ばそれを疑つてゐるもの、また不思議なこともあればあるものと思つて黙つて見てゐるもの、何は何でも兎に角面白い現象だと思つて見てゐるもの、さうしたいろいろの人達の心がその顔やら態度やらにあらはれて見えた。

『愚民共はしやうがないな！』

ふとかうした聲が二人のすぐ上の所で聞えた。二人の學生は振返つて見た。

かれ等にはかうした熱狂の中に、またはかうした湯仰隨喜の中に、さうした冷やかな言葉を放つものが際立つてその注意を惹いた。かれ等は群集をやりすごしてから、その男の方へ戻つて來た。

脊の低い、いやに皮肉な、眼のきよきよとしたその男は、

『矢張、田舎だ。あゝしてごまかされて賽錢の一つも投げるんだからな！』

一人の方の學生は近寄つて、

『貴方、行つて御覽になりましたか。』

『行つて見た……大山師さ。あつちこつちで散々持餘されて、食ふに困つて、こんな山の中に来たんですよ。』

『でも……』

『君等も矢張愚民黨かね。臨終をするなんて、大きなことを言つて、まさか立腹を切つて見せるわけにも行くまい……。手でさ、それは、奴の……。この前にもそんなことをやつたことがある……。今の科學全盛の世に、新しいメシヤがあつて堪るものか。君達は知らないか。あれで、あの大山師、女にかけては、中々えらい腕を持つてるんだぜ。』

『へえ、そんな話があるんですか。』

『奴の前生を知つてゐるものには、奴のおどかしなんか駄目さ。』

『それで一體何う言ふんですか。』

『今に死ぬつて言ふんだよ。死んで見せるつて言ふんだよ。』

かうはき出すやうに言つたと思ふと、そんなことは馬鹿々々しいといふやうにして、その男はさつさと向うに歩いて行つて了つた。

二人の學生は益々不思議な氣がした。何れが本當で、何れが虚妄か、かれ等にはちよつと判断がつかなかつた。しかし到るところで眼に映る衆人の渴仰隨喜の涙をかれ等は虚妄と思ふことは出来なかつた。また山の上の生佛もその男の言ふやうに大山師と言ふ風に考へて了ふことは出来なかつた。しかし、實際科學の全盛の今の世に、新しいメシヤを見たり、または釋迦の再生を見たりすることも不思議でないことはなかつた。かれ等は室に一度は歸つて來たが、いろ／＼なことを考へると、落附いてそこにはゐられなかつた。『おい兎に角、行つて見ようぢやないか、』と一人の方が誘ふと、『行つて見よう、行つて見よう、』と他の一人もすぐそれに應じた。

二人は急いで支度をしてそして出かけた。

山の上に達する路は、非常な雜選で、それを押し分けて進むのは容易なことではなかつた。涙と汗と珠数を揉む音と、何とも形容の出来ない『だ、だ、だ』といふ聲はあたりを充ちた。

群集がそこに一群、かしこに一群、何も彼も忘れたやうに、または人間の本性を失つたかのやうに、泣いたり喚めいたりしてゐる形は、かれ等に不思議な『繪』を展けて見せた。新しい涅槃圖の最初の一幅を見るやうな感じを起させた。

折れ曲つた路を山の上近く進んで行くにつれて、その雜選は愈々加はつた。人達は路上に伍して睨いた

り坐つたりしてゐるものもあれば、手を合せて夢中に祈念してゐるものもある。松の木の蔭に集つて黙坐してゐるものもある。慈父を失つたものゝやうに聲を擧げて慟哭してゐるものもある。さうかと思ふと、雜選した中を押分け押分け、何うしても今一度その堂に行つてその生佛の顔を拜まなければならぬといふやうに熱心に進んで登つて行くものもある。そしてそれ等の人達の顔の表情のかけには、てんでに持つた、或は親に對する罪、子に對する罪、世間に對する罪、男女に對する罪、主人に對する罪、不正と我慾とに對する罪、さうしたものが一つ一つ細かに絡みついてあらはれてゐるのを見た。

二人の學生は、まだその半ばにも至らない中に、さつき聞いた小さな男の皮肉と冷笑とを憫まずにはゐられないやうな心が心から起つて來た。これが本當の人間ではないか。かうした何もかくさないまた何も望まない心が本當の人間の心ではないか。かうしてあるものに熱中する形が本當の人間ではないか。それを――離れて冷かに見てゐる人間は、何のために生きてゐるのか。唯、人間を見たり觀察したりしてそれを冷かに批判するために生きてゐるのか。人間として生きるためではなくして人間として眺めるために生きてゐるのか。――二人の學生も、次第にあたりの渴仰の状態の中にその心の解けて行くのを感じた。

ふと氣が附くと、黒い凄じい雲が大きな鳥の翼をひろげたやうに、次第に頭上に近く押寄せて來るのをかれ等は發見した。

今まで明るく照つてゐた午後五時過の日影はすっかり曇つて、何處となく凄じい陰氣な風が蓬々として暗い谷から吹き上げて來た。樹下の群集の顔もいやに暗く怪しい色を着けて來た。

『變な天氣になつたね。』

『さうだね。』

『夕立でもやつて來やしないかな。』

『さうさな。』

二人の學生は、ある大きな松の樹の蔭に立つてそしてあたりを眺めた。

谷といふ谷、眼に見えるすべての谷からは、半ば白く半ば鼠色をした雲が渦まくやうに捲き上つて、それが此方の高い峯の上の大きな雲に噴烟のやうになつて雜り合つて行くのが手に取るやうに見えた。そして黒い雲の間からをり／＼洩れて來る黄い怪しい日影は、さながら地獄でも展けて見せるやうに、ぱつと一面に、群集の上を照して、そしてまたすぐ翳つて行つた。と、突然金石と金石との觸れ合はされたやうな雷聲が暗い谷から起つた。

『夕立だな、困つたな。』

かう一人の方が言ふと、

『兎に角堂まで行つて見ようぢやないか。此處まで來て、行つて見ないのも残念だ。……堂に行けば、

夕立が來ても、何處かに入れるからな。』

『この人ではな……雨やどりをするやうな餘地があるかしら？』

『でも、此處にまご／＼してゐるたつてしやうがない。』

『それもさうだな。』

で、かれ等は松や杉の樹の中を抜けたり、まご／＼すれば崖から落ちさうな草藪の中を通つたりして、とても路からでは、群集に遮られて近づくことの出来ない堂の方へと近寄つて行つた。しかしかれ等がまだ全く堂に達しない前に、段々大きくなつて行つた雷聲に伴なつて、銀箭のやうな雨がサツと凄じく落ちて來た。

新しい涅槃圖の中軸らしい光景は始まつた。縦横に鋭い角を引いて凄じく光る電光、つゞいてあたりも振動するやうな雷聲、雨の白く降り頻る中に、ぬれた髪、ぬれた衣服、さうしたものには頓着せず、手を挙げたり、喚いたり、泣いたり、叫んだりして、群集の堂に迫つて行くさまは、この世の光景とは思はれないやうな感じをかれ等に與へた。かれ等もあたりのさまに興奮したやうにして、雨の瀧津瀬のやうに降りそゞいで來る中をさぶ濡れになつて辛うじて堂の庇の下のところまで行つた。

『だア、だア、だア』といふ聲と、『なんまんだア、だア』といふ聲とが一つになつて、小さな堂は殆ど群集のために押潰されさうに見えた。雷聲や雨の瀧いで來るさまなどは誰も心に留めなかつた。

學生の一人は高窓に手をかけて、そして體を半分宙にして中を覗いた。

『見えるか。』

『見える、見える！』

もう一人の方もつゞいて同じやうにして窓から覗いた。

驚くべき光景がそこにあつた。かれ等は、その生佛が右の手を上にして堂の殆ど中央に立つてゐるのを見た。眼は微かに明いて上を向いてゐるのを見た。そしてその周圍には、さつきの老婆を始め、信仰者の群がひれ伏して手を舉げて珠數を一心になつて揉み上げてゐるのを見た。熱狂した屋の内外の群集が混亂と不整と喧囂とを無制限に發揮してゐるにも拘らず、その一角だけには、驚くべき嚴肅と沈黙と苦痛とが漲り渡つてゐるのを見た。二人の學生は一目見たゞけで胸が俄かに緊張されるのを感じた。恐らくさつきの小さい男がそれを見ても矢張その嚴肅の氣に撲たれずにはゐられまいとかれ等は思つた。しかし體を宙に浮かせてゐるかれ等は長い間それを見てゐられなかつた。

かれ等はもつと適當の場所がないかと思つた。そして彼方此方と搜した。しかし何處にもかれ等の入り込むやうな隙間はなかつた。と急に凄じい雷聲は彼方の山から此方の山へと轟きわたつた。

思はずかれ等は頭を下けた。

雨は愈々烈しさを増して、今は殆ど瀉ぐばかりに降つた。飛沫は白くなつて山の雲と雜り合つた。し

つきりなしに縦横に交叉する電光につれて、雷聲が其處からも起つた。何とも言はれない凄じい嚴肅な光景となつた。

堂の中からは、その高い透つた生佛の聲が落ちて來た。

『……爾等罪ありながら、罪ありとも知らざる者よ。……魂を蔑ろに自から己を汚しつゝ、しかも自己の汚れたるを覺らざる者よ。火と水の中にある者よ。火と水の中にありながら火と水の中にあることを知らざる者よ……爾等は皆な救はれざるべからず……苦薩は皆爾等と俱にあるべし。イエスキリストも世尊もマホメットも皆な爾等と俱にあるべし……爾等一度この天地の憤怒畏怖を抱かば……しかし畏るゝ勿れ、我あらずと雖も畏るゝ勿れ……我は即ち爾等と常に俱にあり。また、爾等地獄に落ちたるものも雖も、專念にその地獄より浮び上ることを念とせよ……然らば地獄の中にも新しき美しき花の咲き出づるを見ん。世間に對して怒ること勿れ、世間の迫害に畏るゝ勿れ……それよりも爾等は先づ自己を畏れよ、自己の心を畏れよ。然れどもその心も……その心も……亦……』突然凄じい雷聲が起つたので、かれの聲はそれに掩はれて了つた。

堪らなくなつたやうに、二人の學生はまた再び體を宙にして高窓に凭りかゝつた。その時は生佛は最早さつきのやうな状態ではなかつた、巨岩の如き體はすつくと立つて、爛々とした眼はあたりにかゝりきわたつた。『心も……心もまた畏るゝ勿れ、心も亦虛妄……』かう言ひかけた時、天地も覆るかと思は

れる凄じい電光と雷聲とは一緒に來た。二人は思はず打伏しになつた。しかもその瞬間に生佛のかけてゐる金縁眼鏡がキラキラと美しく光つたのを二人は見たやうな氣がした。再びかれ等が頭を上げた時には、生佛の姿はもう其處に立つてゐなかつた。

2 と 3

x

愈々歸國するといふので、昨日、郊外の友達の家へ暇乞ひに行つたまゝ、そこへ泊つて來たかれは、昨夜の自分の行動を翻つて考へて見た。あゝした軽い心持、無節制な言葉、何事にも頓着しないやうな態度、あれが實際の自分だらうか、あゝしたのん氣な軽い心の持主で自分はあるだらうか。友達の細君は、『さうですか、其處へ寄つてゐらしたんですか、此の間御上京の時も……』かういつて笑つた。友達は友達で『初めにどんな事情があつたとしても、よく平氣で先方の家へ行かれるねえ……一體、君が行つてゐるうちは、どうしてゐるんだえ、その男は。』と、かれは得々として、『大方、急に態度も變へられないといつたやうな見得かなんか知らないが、大いに寛容の美德を發揮して呉れるよ、……しかし考へて見るとそれも仕方が無いさ。もと／＼彼の女の兩親や、親類が寄つてたかつて、僕のやうなやくざ者に呉れては、娘が未始終、泣きを見るのは知れ切つて居る。それよりは、溫和で實直な結構人が安心でよい

といふので、無理往生に、今の處へ嫁かせたんだからな、さうして、僕とはどうしても切れないと、女がいつたのを、多寡を括つて聞き流しにしたんだからな。』かう、なんの不思議も不自然もないやうにかれは話した。

『ぢや、歸りがけに、またそこで道草ですか。』

かういつて友達の細君は笑つた。

聞かるゝまゝに、かれは軽い心持で、色々なことをしやべつた。『だつて、そんな不自然なことがよく出来るね。早く解決してしまひ給へな……さうした宙ぶらりんの境遇に居ては、お互ひに不愉快ぢやないか。』

かう友達にいはれて、『それは、僕だつて無論、キツバリと片附けて仕舞はなくちやならないと思つて居るし、先方も恐らく、さう考へて居るだらうよ。しかし、さうするには、僕が身を退くか、先方の男が風來者の癖に、われくの戀の禁苑に踏み込んだ罪を悔いて處決するか、さも無くば、女が僕か彼の男かどつちにしろ、親和力の強い方と化合して仕舞ふか。外に道は無いのだ。處が、これが悪因縁とでもいふもので、なんとも仕様がな。成行きに任せるんだね。』こんなことをかれはいつて、それから久し振りで吉原の女の話などを、面白可笑しくしやべつた。酒もかなり飲んだ。友達夫婦には、面白い男、無節制な男、琉球の男でもなければ、さうしたことは出来ないと思はれたに違ひなかつた。

最後に友達は、『要するに君とその女とは、現在の空氣をこはしたくないんだ。何處までも、罪の悲哀から來る快感といつたやうな氣分を味はつて居ないんだね……』といつた。

すると細君は、『でも、先方の御亭主つて方が妙ぢやありませんか、殿方はさうしたことを見て居られない筈ですがね。』

『當り前ならさう來るんですがね、そこがあの男の變つてゐるところでさア。』

『しかし、どうしても不自然な關係と謂はれることは免れないよ。』と友達はいつた。

『さうさ、因襲は即ち自然といふ命題が、例外なしに通用するものならばねえ。』

こんな軽い心持で彼れは居られなかつた事があつた。それはその女に子供が生れると、初めて聞いた當時である。

x

それを聞いた時には、かれは頭をガんと鐵の棒か何かで撲たれたやうな氣がした。かれはじつとしてゐられなかつた。用事も何も捨て、かれは外へ出た。海岸へ行つた。埠頭に繋いである汽船を見て、これからすぐにでも行かうかと思つた。かれの頭には火と水とが一緒にやつて來たやうだつた。自分のでなしに、亭主の子供……あの肉體の中に亭主の愛情の塊りの子供！かれは歩きながら頭の毛を掻き拂

つた。

何の彼のといつても、かれは一緒にさうして暮してゐるといふことが妬ましく腹立しかつた。あの男に對してかの女が愛情を持つてゐないことは確かである。その證據はいくらもある。無論今でも愛情の自分にあるのは手紙でも明かに知ることが出来る。しかし長い間の同棲のために、あの女は遂に征服されて了つたのではないか。

女の手紙はその前から少し調子が變であつた。悲觀した言葉ばかりが書いてあつた。大きな罪惡を犯したやうなことばかりが書いてあつた。不思議だと思つた。しかしそれと夢にも知らないかれは、その悲觀した形が嬉しかつた。自分に靡いて來る言葉だと思つた。『同棲に堪へられなくなつたんだ』と思つた。離れてはゐても、遠い海山を隔てゝゐても、此方の苦しんでゐるだけの煩悶悲哀は矢張女も受けてゐるのだと思つた。それが心強かつた。ところが次第にそれがわかつて來た。『つくづく人間があさましく厭になつて來ました。いつそ死にたいと思ふことが日に何度あるかわかりません。貴方さへるなければ、——貴方のことさへ考へなければ。あゝつくづく厭だ……人間が厭ですわ。』かうした言葉をつらねた手紙が二本も三本も來た。そして最後に、『どんなことがあつても私を捨てゝは下さいませぬ。切れるのはいやですから……切れる位なら死んで了ひますから……』かう言つて此方の返事を聞いてから、身重になつたことを知らせて來た。

——どんなに私は悲んだか知れません。私は私の體を八裂きにしても足りないと思ひました。愛情も何もなしに、かうした體になるといふことは——。又さうした因果な子が私の體に入つて來たといふことは——。なんて人間つて悲しいものでせう。醜いものでせう。淺ましいものでせう。しかし、何うか許して下さい。勘忍して下さい。ね、ね。貴方の愛情なしには、とても——私は生きてゐられないんですから……。許して下さいならなければ、私は死んで了ひますから——

それを讀んだ時には、頭はグワンとした。立つてゐた體が後に倒れさうになつた。姪婦！ かう思はずかれは叫んだ。かの女から來たものはどんな手紙でもかれは丁寧に保存して箱の底に藏つて置いたが、その時ばかりはかれは思はずそれをピリ／＼破つて棄てた。

『たうとう征服された！』かういふ思ひが、一杯にかれの頭を占領した。つゞいてつはりになつてゐるかの女の蒼白い顔と、やゝ人目にも附くやうになつた大きな腹とが映つた。否それよりも一層かれに辛かつたのは、かうした體になつた原因であつた。

原因の説明は簡單であつた。

かれはいきなり書棚に挟んでゐる日記を取つて、それを翻した。かれは指を折つた。今、七月と言ふ言葉が女の手紙にあつたので、逆のほつて其日の條をあけて見た。

それは冬の寒い頃だつた。勿論寒いと言つても、南國の暖いところなので、雪も降らず、水も凍らず、

線の葉がまだ彼方此方に残つてゐた。『月の始めに相違ない。』かう思つて、かれは猶ほそれを繰つた。そしてその時分は何うして暮してゐたかを記憶から呼び起した。

『——日、釣に行く』と書いてあつたり『——日、来る。共に酒飲みに行き』と書いてあつたりした。その時分のさまがあり／＼と思ひ出されて来た。その間には、女から手紙が来てゐたりした。かれはその手紙を多い手紙の中から捜し出した。別に變つたこともなかつた。さびしさと戀しさと書いてあるばかりであつた。ふとあることを思ひ出した。

『さうだ。さうだ。此時分だ。一夜中眠られなくつて、輾轉反側したことがあつた。さうだ。あの時に相違ない。』かう思つてまたかれは赫とした。

家にじつとしてゐられなかつた。何うしても一度行つて、實況を見て來なければならぬと思つた。かれは茶屋から茶屋へと行つて、酒を飲んだ。思ひ出してもゾツとするほどだ。その頃、かれは更に一層ヒドイ放蕩兒になつて、女も五人や六人には關係した。

かれの家は中流の産のある家ではあつたけれども、それでもそのまゝかの女のある遠い處へ出かけて行くことが出来なかつた。幾度か計畫してそして目的を達しなかつた。悲しいではないか、かれとかの女の間には、五日五夜乗らなければ越えることの出来ない遠い海と、猶それから二日二夜汽車に乗らなければならぬ陸とが隔てゝゐるのである。

かれは埠頭へとよく出かけて行つた。

いろ／＼な思ひ出がかれには漲つて押寄せた。『ぢや、嫁くには嫁きますが、Sさんとは切れませんか。』かう、女はその父母にも、その新たに夫になる人にも打明けて、皆もそれを承知の上で、この埠頭から今の亭主に嫁して行つた。父母や亭主になる男は、それを普通一遍に、『なアに、離れてゐればぢき忘れて了ふ。彼方にもその中には妻が出来る。』かう思つて、存外軽く解釋して、『それでも好い——』と言つて、そしてかの女をつれて行つたのであつた。

その普通一遍の眞理に、彼の女が段々征服されて行くのを思ふと、かれはじつとしてはゐられないやうな焦燥を感じた。

埠頭では、かれは長い間、ほんやりして海に見入つた。

その別れの最初の光景がいつもかれの頭に浮んだ。かれは泣いた。何遍も何遍も手を握つた。『決してきれないから。』かうかの女は平氣で親や親類の前で言つた。沖には汽船が碇泊してゐる。煙突からは黒い煤煙が颯つてゐる。舳やランチは絶えず碧い海の上を往來してゐる。やがてわかる時が来た。女は舳に乗移つた。段々それが遠く遠くなつて行つた。かれはその舳の汽船に着くまでその埠頭を去らなかつた。汽船に乗つてからも、女は甲板の上から白いハンケチを振つた。丸で活動寫眞のやうであつた。その夜、その汽船に出帆した。あくる朝行つて見ると、港は空しくがらんとして、灰色の雲が佗しく港

口を取巻いた山に靡いた。

そればかりではなかつた。かの女はそれから三月ほど経て、海を越えて、はる／＼かれに逢ひに來た。その時、かれは、『もう歸るのはやめたら好いだらう、』と言つた。しかし、女はそれに應じなかつた。

『ね、もう少しかうして置いて下さいね。時が解決して呉れますからね。』かう言つて歸つて行つた。

——その時も、この埠頭から汽船に乗つて行くかの女をかれは送つた。かれは時が、やがて解決して呉れるだらうと思つた時が、更に有効な解決をして呉れないのを考へずには居られなかつた。かれは蒼いさびしさうな顔をして、解やランチの往來する埠頭を靜かに歩いた。

×

女からの手紙は、引きりなしに來た。かの女は男の變つて行く心を恐れたのである。さうした報知を得て、『これはとてもだめだ、』と思つて、かれのあきらめて了ふのを恐れたのである。三通、四通、五通、——それもいつも長い手紙で、『許して下さい——』といふ言葉が到るところにあつた。

かれはその時分自暴自棄になつたやうにして、茶屋から茶屋へ、女から女へと飲んであばれて歩いてゐた。時にはその女の手紙が二日も三日も開封されずにかれの机の上に置かれてあつた。時にはその『許して下さい——』が大きくかれの醉眼に映つた。『馬鹿々々しい。愛情が俺にあると言ふのか？淫婦！』

かうかれは呶鳴つたりした。しかし、矢張かれに取つては、かの女はその生命であつた。何處に行つても、かれに體と心を満足させて呉れるやうな女はなかつた。美しい女は澤山にあつた。白い肌や豊かな頬や眞珠のやうな眼は到る處にあつた。しかしかれは何處にも女の體と心を發見することが出来なかつた。かれの醉はいつもかの女に向つて覺め、かれの懊惱はいつもかの女に向つて漲つて行つた。

H子——亭主——重い體——さういふ光景が絶えずかれの頭腦の中に廻轉した。

假令淫婦でも、重い體でも、許すべからざる屈辱を感じても、何でも彼でもかれにはかの女が必要であつた。

かれは散々いろ／＼な女とも戯れ、酒にも荒んだ揚句、ある日、泣きたいやうな心持で、*long*な顔をして、バナ、や巴杏斯の綠葉に向ひながら、女にあてた長い／＼手紙を書いた。

×

かの女の住んでゐる山寄りの小じんまりした住宅のさまが、いつも歴々とかれの眼に映つて來た。

小さな門、それを入ると格子戸、そこには靴ぬぎがあつて、右に瀬戸物の長い丸いステッキ入れが置いてある。その立關の二疊、亭主が朝早く會社に行く時には、かの女はそれを見送つて出る。綺麗に結つた庇髪が眼に見えるやうだ。立關の二疊から、奥が茶の間、そこに長火鉢が置いてある。その隣が六疊

の隣座敷、そこにかれ等二人は夜寝ることになつてゐる。その室の片隅に、筆筒が置いてあつて、その上に鏡臺がある。その鏡にかの女の顔が映る。……ある時はかれとかの女の並んだ顔が映つた。従つて亭主とかの女と並んだ顔も映るに相違ない。

客間の庭には、かの女の好きな花壇が出来てゐて、ダリヤだの、ヒヤシンスだの、アネモネだのがその季節毎に赤い白い紫の花やかな色をあたりに際立たせた。亭主は女を喜ばせるために、あちこちからさうした花の種を買つて来ては蒔いた。

O市の小會社の社員の家としては、小じんまりして居心地が好い。かれは午前の中によく亭主の出勤した後のその家のさまを幻影に描いた。

數百里を隔てた南國の島の中にかれはゐる。周圍には内地とは違つたつくりの家屋が澤山にある。バナナや巴杏の緑葉がある。海の遠鳴の音がきこえる。それにも拘らずかの女の住んでゐるO市の住宅がすぐ眼の前にある。かの女が下婢を相手にあちこち掃除してゐるのが見える。婢が井戸端で釣瓶を繰つてゐる。と思ふと、かの女は裁縫に坐つて、此方のことを考へてゐる。今、現に此方を思ひつゝある。

『作や、まだすまないの、勝手が——』かう言つてゐる聲がきこえる。

此方が、かうしてバナ、の窓の下で思つてゐることがすぐ向うに通じてゐる。確かに通じてゐる。丁度波動の原則で出来た無線電信のやうに……。

『貴様は淫婦だ。たうとう征服されたぢやないか。』

かうかれが言ふと、

『さうぢやありません。そんなことを言ふなら、私は死にます。貴方と切れる位なら死にます。』

かう言つてすぐ返事が来る。

従つてかれが自暴自棄のやうに辛く過した月日は、かの女にも辛く悲しかつたに相違なかつた。引きつづいて来た手紙はそれを證據立てた。

かれはまたかれとかの女との間に横はつてゐる五日五夜の海と二日二夜の陸とを考へた。それは決して遠くはなかつた。すぐその近所か何かのやうにかれには思はれた。荒い海、凄じい波、大洋の中にほつたり浮んでゐる島、帆船の林立した港口、日が照つたり夜が來たりする汽車、それもかれは決して長いとは思はなかつた。時間もなかつた。また空間もなかつた。その遠い距離も、すぐ其處にあるやうにかれには思へた。

x

その女の重い體から生れた女の兒をかれがまのあたり見たのは、その女の兒がよち／＼とひとり歩きをすることが出来る頃のことであつた。

それは今度寄つて来た前の旅行の時だ。その時は東京まではやつて来なかつた。大阪まで行つてそこから引返した。

かう思ふと、その〇市の小ぢんまりした山寄の住宅に對する記憶がいろ／＼と思ひ出されて来た。かの女が〇市に行つてからそれで四度目、今度で五度目だ。

かれは大きな停車場で下りて、そこで車を頼んだ。その家は停車場からかなりにある。いつも二十五錢取られる。賑やかな町の家並、人の大勢集る大きな橋、そこを上下する帆影、名高い公園の裏山につづいてならんでゐる丘の松林、さうしたものを目にしながら、かれはいつも楽しいやうな苦しいやうな悲しいやうな思ひに満されて行つた。無論、かの女も亭主も、前に既にかれの手紙でかれが何時の汽車でやつて来るかを知つてゐるのであつた。

町は段々さびしくなつて来た。丘の松林も近くなり出した。もう間もなくその家のある一廓が来るのであつた。場末になつた町には、小さな八百屋があつたり、小間物店があつたりした。

次第に道は高くなつて行つた。午前日は明るく照りつゝあつた。かれはいつもきまつて、小さな炭屋の角のところまで来て車を留めた。

『此處で好いんですか？』
『好いんだ、好いんだ。』

下りては見たが、土産物の漆器やバナ、が重いので、かれは車夫にそれを持たせてあとからついて来させた。

それは細い巷路をづうと入つて行つたやうなところで、その中には、それと同じつくりの家屋が二三軒あつた。

かれは不思議な氣がした。兎に角その家には新しい状態があるのであつた。この前来た時とは違つて、幼い兒の啼聲や、物干竿につらねた襦袢がある筈であつた。それがかれの胸にある反響を與へた。あゝして手紙には熱烈なことが書いてあるが——愛情が依然として此方にあるやうに書いてあるが、實際は何うであるかわからなかつた。かれはその状態を細かに解剖して觀察してやらうといふ氣になつた。

かれはわざと靜かに歩いた。

やがてその小じんまりした門がその前に来た。

かれは暫し立ち留つて、あたりの氣勢を聞いた。

何の物音もしない。あたりはひつそりしてゐる。周囲を見廻しても、物干に襦袢のかゝつてゐる様子もなければ、子供の啼聲らしい聲も母親のそれをあやすやうな聲もきこえない。それでもかれは猶暫く立つて聞耳を立てゝゐた。

と、不意に、後の家の戸があいて、そこから誰か出て来る氣勢がしたので、あやしまれてはと思つて、か

それは其のまゝ門の戸をあけた。鈴がチリリンと高く鳴った。

案内を乞うて格子戸の外に立つてみると、障子があいてかの女の顔があらはれた。『まア——』かう言つたが、その顔はサツと赧くなつた。

かれもきまりがわるいやうな気がした。

しかし、それもほんの僅かの間で、『もうお出でになるかと思つて待つてゐました、』とか、『疲れたでせうね、』とか言つて、かの女はかれを奥に通した。

その日は日曜ではなかつたから、主人はゐないだらうとは思つたが、しかしことに由ると、自分の來るのを知つて、會社を休んで、長火鉢のある茶の間にかくれて、こつそりかれとかの女の應對するさまを聞いてゐるかも知れなかつた。かれは何となく落附かない風で、じろくゝ女の方を見たり、土産物を無造作に其處に出したりした。

かの女もきまりのわるさうにして、座敷を出たり入つたりした。

『子供は？』

かう訊かうと思つたが、さううちつけに訊くのがあたりの氣分を破壊するやうな心持がしてよした。平凡な普通の挨拶が繰返された。

果して！『果してかの女は征服された！』かういふ風に彼は思つて、不愉快な心が湧き上つて來た。

かれは屹立て耳をして茶の間の方の氣勢を聞いた。

竟に、

『M君は？』

『會社よ。』

『僕の來るのを知つてゐるんでせう？』

『え。』

かの女は笑つて見せた。

その笑ひから心がひらけた。征服されたと思つたのは、此方の邪推であつたことが次第に飲み込めて來た。

しかしそれでも未だお互ひに何から話して好いかわからないといふ風で、手持無沙汰で相對して坐つた。子を持つてから、かの女の姿は著しく變つた。もう元のやうな豊かな頬や白い肌を見ることが出来なかつた。その癖、待受けてゐたと見えて、髪を綺麗に束髪に結び、着物も派手な似合ふものを選んで着てゐたけれど……。

『私も變つたでせう？』

『征服されたからね。』

『そんなことはないわ。』

かの女は早口に言つて、男の複雑した心を逸早く讀まうとするやうな眼色をした。

『子供は？』

『今ゐないの。』

『何うしたの？』

『……………』

かの女は最初の印象を恐れて、今朝から婢に負はせて、何處かに遊びにやつたらしかつた。

暫く経つた後では、かの女は、『でも、私の子だから好いでせう。貴方の好きな私の子だから憎くはないでせう。』

静かな午後の日影は、二人の他に誰もゐない室にさし入つた。

しかしかうした自由は、自分が遠く離れてゐるためではないか。一年に一度、二年に一度やつて來る自分であるがためではないか。『だつて、しやうがない。初めから、さういふつもりで此處に來たのだから……………。それは初めからわかりきつてゐることなのだから……………。だから、今更そんなことを言はないで、貴方は成るだけ知らない顔をしてゐらつしやいよ。長い間ではないんだから……………』かう女はその亭主に言つてゐるかも知れない。又亭主の方でも、困つたことは困つたことだが、會社の方の事情もあるし、

騒ぎ立て、世間にはつとして、それが新聞に出て、今の職業を失ふやうになつてはそれこそ大變である。長い間ではなし、度々來るのではなし、どうせ行末は女は完全に自分のものになつて了ふのだから、現に、自分の子供さへ出來たのだから……………かう思つて、自から忍んでゐるに相違ない。

かう思ふと、何方が勝つてゐるのか、負けてゐるのか、また本當に、何方に女の愛情があるのか、それが疑はれずには居られなかつた。

非常に不自然なことをしてゐるといふことも考へられた。女にあやつられてゐる二つの人形であるといふ氣もした。女が平氣でさういふことをやつて居るばかりではなく、此方から寄詰めて、『何うにかしなくては仕方がない、』といふ意志を見せると、それがかの女には何うしても斷乎として決定がつかぬらしく、『貴方と切れる位なら死ぬ、』と言つて赫したり、『だつて、Mだつて、このまゝ捨てるのは可哀相とは思はない？ あゝしておとなしくしてゐるんですもの、』と言つて涙をこぼしたりした。

たまに來るのだから、さう言ふのだらうと言ふと、かの女は、『そんなことはない。貴方にはまだ私の心がわからないんですかね。あんなに手紙をやつてもそれでも私の心はわからないんですかねえ、』と言つて辛さうにして泣いた。

二つの腕を合せながら、

『何うしてかういふことになつたでせうね。運ですな、矢張。前世の約束とか何とか言はなけれやわ

けがわからなくなるわねえ。子供の出来た時には、本當に泣いて泣いて泣き暮らしたわ。人間がいやアに淺間しくなつて了つてね。……だから始めて生れた時には、そんなに嬉しいとも思はなかつたわ。だけれども段々愛情が出て来て、本當の親でありながら十分に愛することが出来ないと思ふと、何とも言ひやうもないほどに身が辛くなつて、乳を飲ませながら、思はず涙が出て、ほたく赤坊の頬に落ちるんですもの……。本當に辛いと思つたわ。それでもまだ貴方と切れやうとは思はないんだから……。妾が罪人ね。一番妾がわるいのねえ。」

かう染々と言はれて見ると、さうした淺い邪推などは雲か霧のやうに消えて行つて、不思議な因縁と運命とが矢張かれ等の間に絡み附いて來るのであつた。

女は成る丈亭主のことをかれに話さぬやうに、話さぬやうにとつとめてゐたが、それでも自分のかれに對する誠意を疑はれた時には、かなり深いところまでいろ／＼なことを話した。『さうね。あゝいふ人ですからね。さう口に出したり態度に見せたりしませんけれど、矢張いやで／＼仕方がないらしいのね。見てると、氣の毒だが、何處かイラ／＼してるわ。私に對しても、言葉が丁寧になつて來るわ。そして怒るとは反對に、却つて私の機嫌を取るわ。』

『でも、お前だつて、僕がやつて來ると、嬉しい一方にイヤな氣がするだらう。僕もこの家の門近く歩いて來ると、さういふ氣がするから……。』

『それはするわ。だけどイヤな氣といふのとも違ふわ。さうね、辛いやうな、顔が赧くなるやうな……。』
『矢張、一夫一妻だね、つきつめると、どうしてもさうなるんだね。』

かうその時かれは言つた。

x

亭主の顔！

穩かな、落附いた、いかにも小會社の下級の社員らしい色の白いにく／＼した顔、どんな時にも怒つたり眉を揚げたりすることはないだらうと思はれるやうな顔、その顔が、國にゐても、東京に來てゐても、又汽車で旅行してゐても、をり／＼掠めるやうにしてかれの眼前を通つた。

しかしそれは女の顔のやうに長い間かれの頭に絡み着いてゐるやうなことはなかつた。かれはそれを思ひ出すと、不愉快なものに逢つたやうに、又は思ひ出すべからざるものを思ひ出したかのやうに、すぐそれを脇に振り放つた。でなければ、あらゆる方面からその顔の持主を心で罵倒した。『俺なら、あゝした鼻を黙つて見てやしない……。すぐのしをつけて先きの奴に呉れてやつて了ふ、』など、身勝手な思ひ方をした。『俺なら、屹度、別に女を拵へる。世間の口が煩いからと言つて、それに捉へられてゐるやしない。そんなぐづぢやない。』こんなことを思つた。

けれど時には、それより先きに一步入つて、男女の間に横はる深い心理といふことを考へることなどもあつた。かうした状態になつてゐるは、さう容易くのを附けてその妻を逐出すやうなさつぱりした單純な心にはなれないかも知れなかつた。何故なら、勝負が二人の男の間に横はつてゐるから、力の争ひだから、又は生命の争ひだから。……と世間にある出歯庵丁騒ぎや、ピストルや、外國の小説でよく出會す決闘や、さういふことが種々と思ひ出されて來た。

さう言へば、自分も女もまたはかの亭主も、共に危険な境に身を置いてゐるのであつた。どんなはずみで、さうしたことが三人の間に起らないとは限らなかつた。現に、かれ一人として考へて見ても、思ひ餘つて、さうした考が胸に上つて來たこともある。初めてその住宅を訪れた時などは、殊にさうした深い嫉妬が燃えた。女が少しでも自分を邪魔にするやうな態度が見えたら、捨てゝは置かないと自分は思つた。それと同じ考があつた男にも起らないとも限らない。あゝしておとなしく無氣力に見えてゐても何ともわからない。或は却つてあゝいふ男が思ひ詰めてさういふことをするものだ……。

かうは思ふが、それは極く突詰めて考へた時で、ぢきかれはそれを打消した。『さういふことが澤山にあつて堪るものか。世の中にもさうした状態にある人は澤山にある。けれどもさう突詰めて行くものはその一割もない。一割どころか、一千人に一人、萬人に一人だ。死ぬよりは、隠忍して、女を所持してゐる方が好いからな。』かう思つて、かれはその亭主のために大きく笑つた。

昨日も郊外の友達の細君が、

『一體、貴方がゐらつしやると、そのMさんて方は、どんな顔をなさるんです？ 丁度酔でも飲まされたやうな顔をなさるでせうね。』

かう言つて笑つたが、實際何とも形容することの出来ないものであつた。初めて逢つた時、二度目に逢つた時、中でも最初逢つた時の顔！ 表面では當り前の落附いた顔をして話してゐながら、態度はその心の亂れてゐるのを名残なく裏切つてゐた。かれはそはくとして落附いて坐つてゐなかつた。自分の妻に向つても、他人のやうな丁寧な口を利いた。琉球の話を何彼としてゐる間にも、その耳は上の空に、心は全く二人の態度に奪はれてゐた。それから比べると、此間行つた時の態度などは落附いたものだつた。

x

亭主は時々子供を婢に負はせて外に出してやり、自分も友達の家に行くと言つて出かけた。かれはその間にゆつくり話をする事が出来た。

その間を亭主はいかに過してゐるであらうとかれは想像した。實際友達か同僚の家に行つてゐるらしかつた。一時間か二時間、平凡な日常の世間話をして歸つて來るらしかつた。しかし、流石に、それを知

つてゐては平氣でもゐられないであらう。暗い谷底の中に落ちたやうな氣がして、話も上の空にやつてゐるだらう。それに、さう毎日同僚と友達との處に行くわけにも行かずに、ほつ／＼野原を歩いてゐることもあるだらう。

運わるく今度は行つた二日目から、社員半數の夏休暇になつて、主人は大抵は家にゐて暮した。

『ちよつと出て来るから。』

かういつて、その亭主は、長押の新しいバナマ帽を取つて、蒼白い顔をしてそして出かけた。

それと反對に、夜はかれが苦しんだ。

子供が時々啼いた。

それを、女は、『好し、好し……夢でも見たんだらう。』かう言つて、引寄せて乳を含ませる氣勢がした。

かれは輾轉反側して寝られないやうな夜を幾夜かすごした。

かれはその苦痛を離れたいがために、いつそ別に宿を取らうかと思つた。そしてそれをかの女に話した。しかしかの女はそれを承知しなかつた。かの女も亭主もそんなことをしてその事の他に洩れることを恐れたらしかつた。

小さな家の中に深くかくされた祕密にして置きたいらしかつた。

それにも拘らず、かれはそこに一週間ほど滞在した。

主人の同僚や友達などがやつて來ると、かの女は、『これは私の従兄で御座います、』といつて、平氣で紹介した。亭主は矢張それに調子を合せてゐた。

ある夜は市の中央にある賑やかな橋の袂まで、三人して揃つて散歩に出かけた。別に變つたこともなかつた。女も平氣で歩いた。〇市は暑い處だが、南の國の故郷にもまして暑いと思はれるほどだが、その夜は山から來る風が涼しく、水には灯の影が美しく映つて、ぞろ／＼通る女の浴衣も派手に顔も白く見えた。活動寫眞の前には、電氣が明るくエキゾチックな繪看板を照してゐた。

『國にゐた時分のことを思ひ出すわね。』

こんなことを言つたりした。

かの女はまだその頃は若かつた。豊かな頬をしてゐた。かの女は父母に伴はれて、他郷から來て、二年其處に住んだ。かれはその時分を思ひ出しながら歩いた。南國の故郷の夏とは似てもつかないけれども、それでも二人の戀にはいつも夏的情調と氣分とが伴つてゐた。その頃かの女は派手な浴衣を着てゐることが多かつた。腋あきからはいつも白い肉置が覗かれた。

町をすつと中ほどまで行つて、そこから引返して、氷屋に寄つたり何かしてそのまま三人は並んで話しながら家の方へ歸つて來た。

明日はかれはもう立つつもりでゐた。

或はそのために、どうせもう明日きりないんだからと言ふために、亭主はその寛容を示したのかも知れなかつた。否實際さうであつたに相違なかつた。何故と言ふに、かれの歸期が近づくと共に、かの女の顔の曇つて行くに引きかへて、亭主の顔と態度とは次第に生々とした色を着けて來た。時々は楽しさうにして笑つた。『また歸りにはゆつくりお寄りなさい。』など、お世辭も大抵にするが好いと思ふやうなことをもその亭主は言つた。

x

『歸りには是非ね。』

『でも困るだらう?』

『困りやしないわ。あゝしておとなしくしてゐて呉れるから、何でもないぢやないの?』かう言つてかの女は笑つて、『だつてそれに不思議はないわ。初めから、さういふ約束なんだから。』

『でもね……』

『素通りなんかしちやいやだわ。それこそ恨むから。……さう、幾日かゝるの? 試験が? 一月半? さう、それぢや歸る時分には、もう涼しくなつてゐるわ。今度は何處か温泉のあるところにも行きたいねえ。』

『そんなことは出来ないねえ。』

『さうね……』

かう言つたが考へて、『今度試験が受ければ、東京で開業するの? それとも國?』

『何方になるかわからない。』

『東京に屹度好い人が待つてゐるかも知れないのねえ。』

『かも知れない。』

かう軽くかれが言ふと、

『試験に及第して、いよく開業でもすると、何うしても、さうなるかも知れないのねえ……悲しいわねえ。貴方がなくつて、一生あの人ばかりと暮らして行かなければならないと思ふと、とてもゐられさうな氣がしないわ。その時はどうしたら好いんでせう。その時は、この子ばかりが頼りね。』抱いてゐた女の兒の頬を強く吸つた。かの女はもう涙ぐんでゐた。

『大丈夫だよ。』

『お、っ……』

涙を拭いて、『勝手ばかりをしてゐて、こんなことを言つては濟まないわ。だけど、戯談にも、貴方に好い奥さんをお持ちなさいつては言へないんだもの。』

『わかるよ、よくわかるよ。』

『さう、よくわかつて？』

かう言つて、かの女は嬉しさうに、その心も體もすっかり此方に偏つて來るやうな表情をした。ある期間を経てから、

『では、歸りには屹度寄るのねえ。』

『寄らずには歸れないから、大丈夫だよ。』

『嬉しい……』

かう言つて、かの女は處女時代のやうに胸を撫で、見せた。

x

かの女は汽車まで送つて行くと言つた。

實は一緒に歩いて、話しても話し盡くせない話をして來たかつたけれど、少しばかり荷物があるので、さうも出來ずに車を二臺頼んだ。

亭主は『私もお送りするんだけど、留守をするものがないから、』と言つて莞爾して送つて出た。かれは來た時の醉を飲んだやうな顔から段々その平生のこゝした穩かな顔になつて行く徑路を考

へずには居られなかつた。と、不愉快なイヤな氣が胸を突いて起つて來るのを感じた。何方が本當に戀の勝利者だかわからないといふ疑惑が再び首を擡げて來るのであつた。しかしさういふことばかりは考へてゐられないかれの身の上であつた。試験はもう近づきつゝある。東京に行つてから一日二日はその準備もしなければならぬ。それに、この試験、齒科醫の試験を受けやうと思立つたのは、實はかの女の慫慂に由つてである。かの女は手紙でかれの身の上を心配してよこした。いつまでぶら／＼遊んでるでも仕方がない。生活の方のことも考へて下さい。かうかの女が言つて來たので、初めは齒科醫など、馬鹿々々しく思つたことをかれはやはり始めたのである。また不便な南國の故郷では、さうしたことでり他に學ぶ道はなかつたのである。

『大變お世話になりました。』

かう言つて、サツサと出て、かれは車に乗つた。

あとの車にはかの女が乗つた。

ところが、途中で二臺も三臺もつゝいた牛車に出會して、かれの乗つた車のまご／＼してゐる間に、女の車は逸早く先きに出て行つた。従つてかれは女の姿を眼の前に見ることが出來た。かれはふと、あの想像に捉へられた。『誰が見てもかう車を並べて行く形は、夫婦としか見えまい。』かう思ふとかれは嬉しかつた。

大きな停車場は混雑してゐた。丁度師團長か何か乗るので、それを見送りに来た軍人で一杯になつてゐた。肩章を下けたもの、參謀の總を下けたのなどが頻りに劍を鳴してあちこち歩いた。師團長の近親らしい女の群は綺麗に着飾つて、二等室の一隅に集つてゐた。

二人は小さくなつて其處に腰をかけた。時間はまだ二十分ほど餘裕があつたけれども、大勢乗客の往來する足音やら驛夫の荷物を運ぶ車の音やらに碍けられて、かれ等は落附いて話す氣分にはなれなかつた。言ひたいことは澤山にありながら、二人は唯黙つてゐた。

女は今朝は庇髪に結つてゐた。子持の細君にしては不似合な位な大きな白いリボンをかけてゐる。顔は綺麗におつくりがしてあるので、唯の眼にもまだなり立ての細君としか見えなかつた。

二三日前、かの女は丸髻に結つた。それは庇髪よりも似合つて見えた。亭主も『その方が好いね、奥様らしくつて……』など言つた。しかしかれにはその奥様らしい丸髻よりも、南國の故郷の思ひ出を思ひ出す庇髪の方が好きであつた。それと知つて、かの女は今朝は庇髪にしたのであつた。

人の見てゐないのを狙つて、かれは袖の下からキウと堅く手を握りしめた。女も握り返した。やがて改札の時が来た。

赤帽が先きに荷物を運んで置いた呉れたので、二人並んで夫婦のやうにして群集と一緒にぞろ／＼と橋をわたつて、向う側に行つた。

汽車は轟と音を立て、入つて来た。

二等室の一隅の窓の前に立つたかの女は、いくらか眼を赤くして、をり／＼人に知れないやうにソツと涙を拭いてゐた。

『ぢや歸りにね……それから着いたら、すぐ手紙を下さいね。』

『あ……』

かう言つてかれも顔を窓の外に出した。汽笛は鳴つた。汽車は動き出した。

しよんほり此方を見送つて立つてゐる女の顔は、やがて小さくなつて遂に見えなくなつた。

始めは女が可哀相のやうな氣がしたが——あゝして亭主と一緒に暮してゐるのがいぢらしいやうな氣がしたが、少し行くと、亭主のニコ／＼した嬉しさうな顔がすぐそれを打消して了つた。『思ふまい思ふまい。』かう思つて、かれは身をぐつたりとクツションに寄せかけた。と、つゞいて初めて女の後を追つて、この〇市にやつて来た時のことが鮮かに浮んで来た。

それは慘澹たる旅行であつた。今思ひ出しても、自分で自分がいたましく哀れに思はれた。女が嫁いて行つてから、丸半年といふもの、かれは殆ど毎日埠頭に行つた。そしていかにしてこの海山をこえて行かうかと考へた。その頃は今よりもつと突詰めてはゐたし、女はさう言つて別れて行つて手紙は一日おきのやうに寄越したけれども、それでも本當のことが分らないので、何うしても一度逢つて話をしなければ

ならないと思つた。かうして遠く離れてゐては、女の父母やその亭主が、『なアに、離れてゐれば、そんなことを言つたつて、ぢき解決しますよ、』と思つたことがそのまゝ事實になつて了ふやうな気がして、片時も落附いてはゐられなかつた。『かうしてゐる中にも女は征服されて了ふ。』かうかれは突詰めて考へた。

で、ある日、遂に思ひ餘つて、それと言つては、とても家で出して呉れさうにもないので、こつそり支度して、ちよつとそこまで行くやうな風をして出かけた。

幸ひに汽船の出帆までは、誰にもそれと疑はれなかつた。それにしても、何れほど心配したであらうか。甲板の上で、来る舳來る舳を見守つて、誰か後を逐つて來はしないかと思つた。汽船の碇を捲く音もまどろしかつた。何故あんなにぐづくしてゐるのだらうと思つた。やがて汽船は動き出した。

かれは始めてほつとした。

凄じい海荒れ、甲板の上を洗ふ波、わる臭い船室の空氣、さうしたのもかの女を思ふと氣に留らなかつた。翌る日は大島を船の右舷に見て通つた。屋久島を近く海上に發見した時には、かの女のゐる陸地の近くなつて來たのを喜んだ。

しかし船路は果て、も、陸路はまだ大變であつた。かの女のゐる陸地ではあるが、そこまで行くには、まだ二日二夜もかゝらなければならなかつた。それに、かれは早く手の廻る追跡を恐れて、K市ではわざと汚ない知らない旅舎に泊つた。そこからかれは女に宛て、手紙を出した。

それに、その時分は汽車が出來てゐなかつた。かれは田舎のガタ馬車に乗つたり、車に乗つたり、又は徒歩をつゝけたりしてかの女に向つて行つた。何といふ難儀な慘ましい悲しい旅だつたらう。ことに、國境に横はつた大きな峠、登り四里、下り四里もあるやうな峠、そこでは足に大きな豆が出來て、歩くのには一方ならぬ難儀をした。丁度秋だつた。晴れた秋の空だつた。山はくつきりと美しく晴れ、空には悲しいさびしい白い雲が流れるやうに靡いた。かれの手帳は女を思ふ歌で滿された。時にはひとり林中を歩いて、思ひ餘つて、女の名を呼んだりした。

ある夜は汚い薄暗い旅舎で寝た。前には萬山の中に川が流れて、水の音が夜もすがら枕に響いた。かれの襦袢は汗に塗れ、衣は街道の埃に塗れ、鬚は深く生えて、湯殿にある鏡には憔悴し果てたかれの顔が映つた。

或るところでは、あてにした川舟が増水のために出ないので、降頻る雨の中を辛うじて蝙蝠傘に浸いで、雲霧の深く往來する山路を五里も六里も歩いた。はねは用捨なく衣の上までも上つた。普通ならば、風景が好いので、旅客が立留らずには行かないやうなところをも、かれは佗しい心を抱いて歩いた。

しかしさうしたみじめな旅行もやがて盡きた。かれは漸く晴れ渡つた夕日の影を帯びながら、萬山の中を流れ落ちた濁つた川水と共に、ひろく展開された平野へと出て行つた。そこにはもう汽車があつた。それに乗りさへすればひとりでかの女の住んでゐるO市に達することの出来る汽車があつた。かれは

汽笛を耳にし、眼に小さな停車場を見た時には、最早目的を半ば達したやうな歡喜を感じた。

時間が遅かつたので、直通の汽車はもうなかつたけれど、それでもかれは嬉しいと思つた。兎に角其處まで来た。明日はその汽車で〇市に向ふことが出来る。久しくあくがれたかの女に逢ふことが出来る。かう思つてかれは、旅舎の二階の窓から其處にある小さな停車場と二三輛の客車と長く連つたレールとを眺めた。

その旅舎が今かれの眼に見えた。丁度長い繪卷の中の一つの印象的なシインのやうに……。そこには人の好いお婆さんがゐるたつけ、今も達者であるかしらなどと思つた。と、つゞいて赤い襷をかけた色の白い娘がほつとその中に浮び出して来た。……と、いろ／＼な追憶が際限なく集つて来る。初めて行つた〇市の市街、放浪者のやうな恰好をしてその家の周囲をぐる／＼歩いてゐた自分の姿、垣根に咲いてゐた紅白の木槿の花、つゞいてかの女の驚いた顔――

『まア――』

かう言つて驚いてかの女は出て来た。

ふとかれはその時分と今とを比べて考へて見た。もうその時から五六年を経過してゐる。無論もうあの頃のやうにセンチメンタルではない。また情熱的でもない。しかし有効に解決して呉れると思つた『時』が今だにそれを解決して呉れない。そして未だに自分とかの女の間には、どうすることも出来ない

い不思議な不自然な關係が持續してゐる……。彼はぐつたりと崩折れたやうにクツションの上に倒れた。汽車は駛つてゐた。

x

郊外の友達の家で、軽い心持で、平氣でいろ／＼なことをしやべつたことをかれは思ひ出した。

かれ等は――かれ等の多くは、そんなことは少しも知らない。さうした苦惱は煩悶は悲惨は夢にも知らない。そして唯面白い話の材料にしてゐる。『かうした面白い男女關係もあるんですよ』と言つて笑つてかれ等は吹聴してゐる。

そればかりではない、かうした自分をのん氣だからと言つてゐる。貴方でなくつては、とてもその眞似は出来ないと言つてゐる。そしてそれをかれの性質に歸してゐる。またある者はその解釋以上にかれの南國の故郷の風俗を捉へて来て、さういふ土地柄だからだと言つてゐる。

實際さうだらうか。

否、否、否――

かれは此前行つた時、自分と亭主と女との位置を考へて、共に不幸な人達だと言つて、夜一夜涙を流したことがあつた。實際、あの亭主も不幸だ。假令稀にはあるけれども、あゝした顔をしなければな

らないといふことは……あゝした態度をしなければならぬといふことは……一人野原をさまよはなければならぬといふことは……

かの女も不幸だ。時にはかれもあの亭主もかの女のために翻弄されてゐると思ふこともあるけれど、又は一人の女で二つの男の心を自由にしてゐるのを誇りのやうにしてゐるのではないかと思ふこともあるけれども、それは一時の邪推で、又は突詰めた考で、決してさうではない。かの女の眼から流れる涙を見ては、決してさうとは思はれない。女はそのためこ懐妊した子を呪ひ、又はその生れた子に完全に母親としての愛情をそぐことが出来ないではないか。

かれだつて矢張さうだ。不幸だ。かの女があるがために、何うすることも出来ない。世間の多くの女は、すべて精神的にも肉體的にもかれに反撥して来る。かの女を除いては他の女のことを何うしても考へることが出来ない。假令他の女と夫婦になつたとて、『私の行くところには何處にでもついて入らつしやい。よう御座んすか。』とあの埠頭で言つた言葉をかの女が取消さない中は、矢張かの女は自分と妻となる他の女との間にその位置を要求するに相違ないのである。かれは何うすることも出来なかつた。『仕方がない、先づこのまゝにして置かう。そして成行を見よう。』かう思つて過して來た月日も、今ではもう五六年にもなつた。

ある人は、『そんな不道德なことをいつまでやつてゐる、』と言つてかれを責めた。しかし實際不道德だ

らうが、また不自然だらうが、かういふ事實がある以上、人間にはさういふことが出来るといふことが肯定されてゐるのではないか。かう思ふと、多妻多夫と、一夫多妻と、それから一夫一妻とさうした昔からの難問題が容易に解決することが出来ずに、いつもかれの頭に横はつた。

一夫一妻、さういふことをかれも痛切に考へたことがないではなかつた。時にはその辛さに堪へかねて、自分の方から手を切らうとしたこともあつた。亭主もまたそれを考へたことがあるに相違ない。女もまたそれを考へたことがあるに相違ない。しかし竟に遂にどうにもならなかつた。

かれは東京に來て、昔の多くの友達に逢つた。かれ等は皆それ／＼衣食の途に就いて、一人づゝ立派な細君を持つてゐる。中には子供が二人も三人も出來たものもある。かくれた事實は知らないが、兎に角表面は立派な一夫一妻の生活を實行してゐる。かれ等は何の願慮するところもなく、又何の悶ゆるところもなく、晴々した顔をして、相携へ相笑つて街頭を散歩してゐる。従つて心も體も互に平均を得てのん氣さうである。無論、自分がたまさかに味ふやうな戀の熱烈なる快感を得ることは出来ないに相違ないが、またその反對に、さびしい悲しいつらい懊惱苦痛を持つては居ないのである。かれは其處まで考へて行つていつも溜息を洩した。

時には、『どうとも勝手になれ』と思つて、金のあるにまかせて、さながら放蕩兒がやるやうに、吉原にも行けば、赤坂にも行つて、いろ／＼な女を相手にして酒に耽つた。試験をすましてからは、殊にそ

れが烈しかつた。かれはのん氣な、何の苦もない男のやうにして彼方此方へ行つた。自分の苦しい戀のことなども平氣で種々な女に話して、笑の種にした。しかしさうした行爲がかれに何等かの光明を與へたであらうか。また解決を與へたであらうか。大勢の女とかれとの間には、矢張依然としてかの女がその位置を要求してゐた。

x

かれは何かのお伽噺で、『沼の主』といふものを讀んだことがあつた。

それは何でも封建時代のこと、あるお城の姫が、幼い時、保母に負はれて毎日沼のほとりに遊びに行つた。其處には美しいこの世では見られぬやうな花が澤山に咲いてゐた。それを見て、姫は是非欲しいと言つてむづかつた。あれはとても採れない花だからと言つてなだめても泣いて泣いて言ふことをきかなかつた。仕方がないので、『では、この姫が大きくなつたらお前に上げるから、どうかその花を探らして呉れ。』かう保母は沼に向つて言つた。と、不思議にもその花が段々此方へと近寄つて來た。手がとどくあたりにもその花が見えて來た。保母も姫も喜んでその花を探つて遊んだ。

ところが、姫が美しい女になつてから、奇異なことが非常に多かつた。姫と保母の夢には毎夜のやうに『沼の主』が見えた。そしてその約束を繰返した。たゞとうとう姫は池に身を投げた。

これはかりではない。さうしたお伽噺は澤山にかれの心に思ひ出された。『ではね、屹度ですよ、私の行つたところにはきつとついてお出でなさい。』かう言つたかの女の言葉は、矢張そのお伽噺の不可思議の約束のやうなものではないかとかれは思つた。

その言葉をかの女が取消さない中はどうしても一生この不自然な愛情を中心にした運命は續いて行くに相違ないやうな氣がした。——かれの下宿した家の二階の窓には、梧桐が栽ゑてあつて、その向うに碧い空が見え、屋根を越した隣の二階屋では、鬚の生えた陶器畫工の男が、終日せつせと仕事をしてゐるのが見えた。かの女からの手紙は五日に一度、遅くも一週間に一度は屹度やつて來た。現に、今もその新しい手紙がその机の上に載せられてあつた。

かれは鬚の生えた顔に二つの手を當て、じつと深く考へに沈んだ。手紙に眼を注ぐでもなく、秋近い碧空に見入るのでもなかつた。かれの頭は唯ほんやりしてゐた。ふとそこにその亭主の顔がほつかり浮んだ。かれはすぐそれを打消した。

續いてかの女の顔が浮んだ。につこりと笑つた顔である。喜ばしさと嬉しさに満ちた顔である。また男の心を捉へずには置かないといふ顔である。……と、それが消えて、お伽噺の城の美しい姫が浮んだ。かれはぢつとしてゐた。

かうしたことは、南國の故郷にゐてもよくあつた。その時も矢張かれはかうした態度をしてゐた。机

には矢張かの女の手紙が置いてあつた。東京での下宿屋の二階であると、南國のバナ、や巴杏斯の緑葉で彩られた窓であるとを問はなかつた。かれは猶ぢつとして一ところを見詰めてゐた。

試験の成績はやがてわかつた。

x

見事に失敗した。もう少し勉強しなければ矢張駄目であつた。しかしかれは決して失望しなかつた。かれはそこから當然に起つて来る來年の試験の上京を頭に描いた。また往きに歸りにO市に寄ることが出来ることを頭の中で繰返した。

成績がわかつてからは、最早東京に長く滞在してゐる必要はなかつた。またかの女に逢ふべき日が近づいた。

郊外の友の家に暇乞に行つた時には、友達は夫婦して、いろ／＼御馳走して呉れたが、かれの戀に對しては、一面盛んにひやかしながら、一面それを否定した。丁度其處に來合せた美しいハイカラの娘を紹介して、『どうだ、あれでも貰はないか。あれなら、喜んで君の妻になるが……』と勧めた。

それは美しい豊頬な娘であつた。單に容色の點から言へば、或はこの娘の方がかの女に勝つてゐるかも知れなかつた。『さうしませう。さうしませう。私等のやうな戀を何時までやつたつて仕方が無い。實際

罪ですからな。』かうかれはのんきさうに言つたが、しかしかれは決してさうしやうとは思はなかつた。

かれはいつものやうに、勝手なのん氣なことをしやべつて、友達夫妻を笑はせた。吉原の馴染のこともしやべれば、赤坂の女のことをも話して聞かせた。一つ覺えた小唄ものなどを拙い節で唄つて、『一つこれをお土産にかの女に聞かせてやるんだ。赤坂のは、それは好い女でしたよ。僕になんか惜しいやうな女だ。肥つてゐてね、眼に愛嬌があつてね。どうだ、俺と一緒に琉球に行かないかつて言ふと行くつて言ふんだから面白いね。五百圓あれや好いんださうだ。』

『ぢや、それにすれば好い。』

こんなことを言つて、友達夫妻は笑つた。

細君は細君で、

『矢張、あなたは、肥つた方がお好きね。O市のも矢張さう?』

『もとは肥つてゐて、その肌が好かつたんだけど、此頃は子供なんか生んで痩せちまひましてね。』

『それも向うの旦那さんのせるだと思ふと、變な氣がするでせうね?』

『それはしますな。』

平氣でかれは笑つた。

友達夫妻も笑つた。

で、そこに一夜泊つて、あくる日の午後には、かれは大通りの大きなデパートメントストアの雑沓の中にその姿を現はした。かれはあちこちに眼を配りながら、二階から三階へと静かに歩いた。

かれの眼には種々なものが映つた。縮緬、上布、半襟、寶石入の指環などがチラ／＼した。かれは彼方の棚、此方の棚に立留つては長い間見廻した。半襟や腰巻などの一杯置いてあるところにも立つて、大勢の女達と一緒にそれをひつくりかへして見た。

『兎に角、襟を一枚。』

かう思つて、あれかこれかと引くり返して見たが、さて選ぶ段になると、或るものは派手すぎ、あるものはぢみ過ぎて、容易にその判断がつかなかつた。どうせやるなら、かの女の氣に入るものが欲しかつた。最後にかれは草花の白くボツ／＼と縫ひをした襟を選んで買った。

それからかれは反物を一反買った。それは餘り安くなかつたけれど、かの女の喜ぶ顔を思へば、この位何でもないと思つた。それから女の兒にやる玩具を二つ三つ買った。

これで出ようと思つたが、今度は亭主のことが氣にかゝつた。かの女と女の兒にだけ持つて行つてやつて、かれに何一つもやらないのは、餘りに勝手すぎると思つた。かれは下りた二階をまた昇つて行つた。決して買つてやりたくはなかつたけれども、かれは亭主のために縫ひつぶしの流行の財布を一つ買った。

そしてそこから出て來た。

かれは自分の財布の中の金と、宿に置いて來た銀行の小切手とを心の中で數へて見た。『もう一晩お名残に遊んでやれ！』かう急にかれは思ひ立つて、橋の袂から右に曲つて、濠端を通つてゐる電車に乗つた。

その夜は豪遊の氣分の中に、三味線の音の中に、美しい色彩の中に埋められるやうにして賑やかに過ぎた。そしてかれはあくる朝自分の疲れた姿を狭い四疊半の一間に發見した。『さう、もう國に歸るの？ ぢや、私伴れて行つて頂戴——』肥つた妓はこんなことを言つてかれにしなだれかゝつた。

そのため、かれは豫定の日限を一日延さなければならなかつた。かの女が待つてゐるであらうと思つたけれど、手紙ではもう間に合はない。さりとて電報を打つほどのこともない。『まア好いや、放つて置け！』かう思つて、宿に歸つて、近所の銀行で金を受取つたり、下宿の勘定をしたりした。『もうお歸りなさるんですつてね。お名残が惜しいわ。』など、言つて、女中がそこにやつて來た。

『さうですか。今夜の急行で、それは忙しい。……ぢや、又、來年は是非入らしつて下さいまし。いつもお粗末ばかりして、來年はお理合はせをしますから。』中年の上さんは出て來て挨拶した。

『さうですか。市へお寄りになるんですか。』など、も言つた。

わかれてまた南國の故郷に歸ると思ふと、かれはさびしい氣がした。友達といふほどの友達もゐない

が、町の明るい灯や賑やかな人通りや生々した気分が忘れかねた。しかしその前に〇市がある。かの女がある。かう思ふと、さうした別れのさびしさもいくらかは薄らいだ。かれは何うすることも出来ないで、またもその女の許に行くのであつた。やがて車が来て、かれは停車場へと急いだ。

鸚 鵡

一

呼吸苦しさと熱さとので、熟睡してゐながらも汗をぐつしよりにかいてゐた私は、硝子窓が弛んでひとりに閉ぢた響で眼が覺めた。咽喉がひつつくやうに乾き切つてゐた。

ベッドの傍の椅子に、女が腰をかけて、眼を下に落して頻りに編物の手を動かしてゐるのを見て、

『もう何時かね？』

かう私が訊くと、始めて客の眼の覺めたのに氣が付いたやうに、頭を上げて、ぱつちりした眼に愛嬌を見せて、

『今、十一時打つたばかりですばい。するぶんようお休みになつてましたの……。なや知らんが、きつさうに呻つてお出ででしたばい。』

『さうかな。』

さう言はれて見ると、成程、何か恐ろしい夢か何か見てゐたやうであつた。大勢の群集に追懸けられて慌て、自分は遁けてゐるやうな光景が微かにまだ見えてゐるやうであつた。眼がさめても、昨夜の酔はまだ残つてゐるらしく意識がほんやりとしてゐるが、汗になつた體が動かす度にわるく冷々して、しつとりしてゐる額から滲み出して来る汗が耳の方へ流れて行くのや、腋の下から脊中へかけていやにべたべたとくすぐつたいやうな氣がするのが、一種たまらない不快を私に感じさせた。私は着てゐた汗臭い浴衣の袖で顔を拭きながら、

『暑い、暑い……かう暑くなつては堪らん……』

かう獨言のやうに言ふと、

『堪らんばい……』かう女も莞爾して調子を合せた。

暫くしてから、

『おい、水を一杯呉れんか。』

と、私は叫んだ。

女はだまつて、編物を椅子の上に置いて、スリッパの音を軽く立て、何方かと言へばすらりとした後姿を見せてドアの外へと出て行つた。私は夢の續きではないかしらと思つた。遠い熱帯國に来て、さうした女と一夜をこのベッドのうへに過したといふことが私に不思議な思ひを起させた。自分の存在

してゐる位置が疑ひ怪まれるやうな氣がした。

ドアが再び開いた。

女は赤い盆の上に、水の一杯満されたコップを載せて持つて入つて來た。

私は半ば起き返つて、そのコップを取つて、一息にぐつと飲み干した。湯冷しか何かのやうな水だ。

『温水だな。』かう言つて見たが、爲方がないので、またごろりと元のやうに頭を枕に當てた。

『もう起きて顔を洗ひまつせ。』

私の手からコップを受取ると共に、女はかう言ひ置いて、再びドアから出て行つて了つた。私は黙つて捲りあげられた白い蚊帳をぢつと見詰めてゐた。意識が漸くあざやかになつて來た。昨夜から今朝の夜明けにかけて飲んだり騒いだりしたことがまざまざと頭に浮んで來た。

『馬鹿けた騒ぎをしたもんだなア。……それにしても、奴等、もう歸つたらう……。朝の仕事があるから……。』かう思ふと、SとKが裸になつて、ドンチャン騒ぎをやつたことや、女達がテンデに三味線を持つて來て、碌々弾けもしないのに、ガチャ／＼と端唄や何かを弾いたり唄つたりした事や、事務長が大きな聲で甚句を唄つた事や、酒の量のないTが逸早く女と別室にしけこんだのを皆なしてからかひ半分に覗きに行つたことや、その他種々な事がごた／＼と一緒に思ひ出されて來た。『馬鹿な騒ぎをやつたもんだなア。』もう一度かう口に出して言つて見て、私はぢつと天井を見詰めた。

暫くしてから私は起きあがつた。そしてベッドの上にあぐらをかいて、傍にあつたスリイカッスルに火をつけて、それを口に啣へては見たが、熱を含んだガサ／＼した舌は、爛れてでもゐるやうに痛く刺戟されて感じられた。見ると、天井の高い眞四角な青い壁には、好加減大きな姿見とまづい低級な石版繪とがかけられてあつて、箆笥の恰好をした箱の上には、青い瀬戸の鉢に名のわからない熱帯の植物が栽ゑられて置かれてある。そしてそれがせめてものこの室の装飾で、他には何にも眼を惹くやうなものはないのを私は見た。戸外からは土人の物を賣る不思議な呼聲や、敷いたばかりの砂利をならすための蒸氣車のギリ／＼軋る音などがいかにも暑さうに響いて來た。

一二つの白いピロオの間に飴色した束髪櫛が一つ落ちてゐるのに眼をとめた私は、何だか夢の中かそれともロオマンスの中にでも身を置いてゐるやうな氣がした。私はぢつとしてその櫛を見詰めた。

ベッドの隅に半ば吸ひかけて置いたシガレットは、徒らに灰になつてこぼれて落ちてゐた。そこから薄い紫の煙がすうと細長く眞直ぐに立つてゐた。

『水を取つたから早く顔を洗ひまつせ。』
バルコンに通ずる入口から、入つて來た女は、かう言つてほんやりしてゐる私を不思議さうに立つて

見てゐた。

やがて私はベッドから下りて、女が差出したブラシとタオルとを黙つて受取つたが、そのまゝスリツバを突かけたなりに、バルコンの方へと出て行つた。眩しく灼くやうに直射した熱帯の朝の光線は眞向から照り附けて、とてもそこにぢつとして低徊して見てはゐられなかつた。で、私は急いで顔と脊の汗を流して、遁れるやうにして、元の室に入つて來たが、今度は眞中に据ゑてある椅子にその身を凭らせた。女は頻りにベッドを取り片附けなどしてゐた。

と、急に自分だけ取残されたやうな、または自分一人女に擒にされたやうなさびしさが脈々として浮んで來て、かうしてゐても爲方がないやうな氣がし出した。いつそこのまゝ歸らうかしらとも思つて見た。しかし碇泊中には船に用事のない身であるといふこと、ケビンが蒸し返しされるやうに暑いといふこと、殊に、今時分ひよつくり船に歸つて行くと、何んなに奴等にひやかされるか知れないといふこと、中でも最後のそれが一番氣になつて、憔悴した顔を見るのがきまりが悪いやうな氣がして、思ひ切つて船に歸つて行く氣にはなれなかつた。『何んなもんか。一日ゐて見ようか。』かう決心はして見ても、此處にゐたつて別に面白いこともありさうにも思はれなかつた。無智な女達と、殺風景な牢のやうな暑い室と……。その中に黙つてぐづ／＼してゐたつて爲方がなかつた。つゞいて、『いつそ馬車でも雇つて、一人で町を見物してやらうか。』とも思つて見た。しかし帽子を持つて來なかつたといふことと、

土語の不通であるといふことと、刺すやうに日の照り反す黄ろい土などのことを思ふと、それもとても實行は出来さうには思はれなかつた。

『おながが空いたでせう？ 何かあがるの？』

かう女は莞爾しながら言つた。

『いや何も食ひたくない……』

別にさういふつもりではなかつたが、不機嫌さうな私を見ると、女は強ひて勸めもせず、また其處を立去らうともせず、さうかと言つて編物を取上げるでもなく、バルコンの方のドアの處に行つて後姿を此方に見せてそして黙つて立つてゐた。

容色こそそんなによくはなかつたが、かうしたところに流込んでゐる女の群の一人としては、思つたほど莫連でも蓮葉でもなく、何處かおとなしい不仕合せな女といふやうなところがあるのを私は前から見通さなかつた。それに一夜一緒にゐたといふことが、女に對する一種の情緒を微かに私の胸に呼起した。

『おい。おい！』

『何アに！』

女は此方を向いて笑つて見せた。

『ウキスキーを持つて来ないか。』

『ウキスキー？』

女は、(まア、あんなに昨夜酔つたのに……)といふ表情をちよつと顔にあらはして見せたが、しかし別にそれをとめるでもなく、素直に黙頭いて向うに出て行つた。

私としても別に酒が欲しいのでもなかつたけれども、かうしてたゞちつとしてゐたつてしやうがないといふこと、言はゞまア女に擒になつて取残されたといふことの心のいらいらした氣を紛らすには、酒より他爲方がないと思つたからであつた。ふと私は、(誰か船の奴を呼んでやれ)と思つた。さうだ、それが好い、そしてもう一度遊ばうと思つた。この思ひ付きは私を力づけた。また私のいら／＼する心を和けた。私はあたりを見廻した。室の卓の隅にインキとペンが置いてあるのを急いで此方へ持つて来て、矢張それもその傍にあつた紙を卓の上にひろげながら、今の時間に手の空いてゐるさうな奴をあれかこれかとさがして見た。Sも駄目、Aも駄目、Tも恐らく来られまい。Nは手は空いてゐるか知れないが、あいつはいやに傲慢ぶつてゐるから面白くない……。で、結局Tへ宛て、私は手紙を書いた。

(この手紙を受取つたらすぐ来い)といふ文句を書き終つて、横封筒に入れて、船の名と宛名とを書きかけてゐるところへ、女はタンサンとウキスキーとを運んで来た。

「誰か船に使をやつて呉れないか。大急ぎで……」

「え……」

「誰かゐるだらう？」

「居りませ、屹度……。おてるさんに頼んで見たら……」

かう言つて女は素直にその手紙を持つてまた出て行つた。

私は大きなコップに少しばかりウキスキーを注いで、甜めるやうにして一口當て、見たが、舌は忽ちそれを反撥して、なにかにがい薬でも飲んでゐるやうな氣がした。何故か神経が動搖して、そこに、眼の前に白いベッドが依然として横はつてゐるのがいやな厭惡の情を起させた。まざんと皮肉に赤裸々に種々なことを見せつけられたやうにも思はれ、ば、人間のあさましさが、または女の醜い仕業が一つ一つはつきりと頭に蘇つて來るやうに思はれた。せめて晝間だけは何處かに片附けて置けば好いの……と思つた。長い年月の間、同じ蚊帳の下で、眼色と膚色の變つた種々の人種と女とのやつてゐることなどの想像がいやに私を刺戟した。異様の繪を見てゝもゐるやうに……。

女は入つて來た。

「今おてるさんに頼んで來ました。」

「さうかえ？ 難有う。あの女が船に行つて來るのかえ？」

「いゝえボーイをやるやうに……」

女は傍に寄つて來て酌をしやうとした。

コップを出しながら「やつぱり酒はまづいね——」

「なにか食べんとですか。」

「何もいらんけどもね……」

かう言つて少しついで貰つて、

「おまさは何うしたえ？」

「休んでをります。」

内氣な女は此方の問ひに答へる他、口數を多くきかなかつた。それが却つて情緒を私に誘つたけれども、しかもその情緒は明るい繪ではなくつて、さびしい憂鬱な色彩をした繪であつた。何うしてこんな女がかうした遠い異郷に流れて來てゐるのかと思つた。

廊下に荒々しい草履の音がきこえると思つてゐると、やがてドアのカアテンを押しよけるやうにして、其處におてるの丸ほちやな色の白い顔があらはれた。私を見てちよつと軽く挨拶したが、すぐお春に向

つて、

『ボーイにさう吩咐けたばつてん。今忙しいかの、道が遠いかの言うて、言ふことをきかんどすよ。あいつはいつも私を馬鹿にしとるですわい……。』

息をはずませ怒を含んだやうな口調で、訴へるやうに……。

『私が言つて見よ。』

二人が揃つて廊下に出ると、其處にボーイがゐると見えて、お春が何か土語で言つてゐるのが、手に取るやうにきこえた。私は立つてカアテンのところから首を出して見た。そこには、口髯を生やした泥人形のやうな一人の黒奴が、片手にその手紙を持つて何か頻りに早口に饒舌つた、おてるに口汚なく罵られるのを、何か言ひわけをしてゐるやうに、妙な手真似、身真似をしながら……。

おてるは猶ほ甲高い調子で、頻りにそれに喰つてかゝつた。それをお春は、

『いく言ふたら、よかごすばい、おてるさん！』

と言つてなだめた。黒奴のボーイは、ぶつ／＼言ひながら、不服さうな顔をして出て行つた。

『わたしらの使をして、お金をやらんもんばつてん、ぐづ／＼言ふどすばい……。』

こんなことを言ひながらお春は室に戻つて來た。
私は言つた。

『それはさうさ。いくらボーイだつて、この暑いのに、唯ぢや厭だらう。ワン、ルツビイもやれば好いぢやないか。』

『だめですよ。あいらは……。やると、癖になるばつてん……。』

かう言つてお春は頭を振つて見せた。私は自分の生れた國に居りながら、他國のかうした賤しい女に酷使される土人共を思つて、あはれな氣がした。暑い灼くやうな日光の中を、てく／＼とその黒奴が海岸に近く歩いて行くさまが私の眼に映つて見えた。と、そこに展開されてゐる明るいカルカッタの港、ごてごてと赤い青い繪具を塗りこくつたやうな感じのする港、その港の岸壁に遠くやつて來た二本マストの自分達の船の大きく晴れた強烈な日の光線の放つた空氣の中にくつきりとあらはれてゐるのが見えた。その船の煙突から薄いほやけたやうな煙の靡いてゐるのが見えた。

と、それにつゞいて、花の咲き初める頃ののどかな時節に日本を出て、殆ど一月近くは夜となく晝となく鮮かに群青に彩られたり黒味の勝つた紺碧に變色したりする渺茫とした大海を南へ南へと漕ぎわけて來たことが思ひ出された。追手を受けた、船に微風だにない暑苦しい夕は、水平線の雲の峰によく電光が鋭く閃いたり、または逆巻く怒濤が甲板まで溢れ上る時には、荒海の中天に冴え冴えと弦月がかゝつてゐることなどもあつたことが思ひ出された。時には油のやうに重たらしく靜まり返つた水面に、午後
の日光を浴びながら銀色した飛魚が幾つも幾つも飛び交はしてゐたこともあれば、遠くに霞んで見える

鳥影に堪へ難いなつかしい思ひを走らせたこともあつた。ある日は同じ日章旗を掲げた船がすれ違つて通つて行つたが、互ひに船路の安全を祝すための相圖のホイッスルの音は、縮緬のやうに小波の立つた水面に、何んなに言ひ切れないなつかしさと親しさを互ひの心に込み上げさせたか知れなかつた。しかし、それもほんの束の間であつた。乗組の人達が、互ひに帽子や手巾を振つてゐる間に、船は次第に離れて遠く遠くなつて行つて了つた。

船室には電氣のファンが備へつけられてあつても、徒らに室内の生温い空気を掻き亂すだけで、却つて不愉快なものであつたことや、暑苦しい眠られない夜はよく艦の方の欄干に身を寄せて、來し方の暗い海原を夢のやうに見詰めてゐたことや、かうした海上生活に位置を得るやうになつた自分の運命や、もがけばとて、あせればとて、一度踏み出した以上生命の緒と結び附けた船のエンジンは、きまつたスピイドでプロペラを廻しながら、一日一日に暑さの加はつて來る海を突進して來たことや、『明日の晩は久し振で生命の洗濯が出来るぞ、』と皆な喜んで、このカルカッタの港に近寄つて來たことや、さうしたことがいろいろと思ひ出されて來た。(遠くもやつて來たものだなア。)かう思ひながら、私は前に置いてあるウキスキーのコップに口を當てた。

四

初めは藥を飲むやうに思つたタンサンを割つたウキスキーも段々旨くなつて、漸く冗談口の一つもきくことが出来るやうになつて來た。

私は脊中に汗が滲み出して來たので、肌ぬぎになつた。

『暑いな。』

女は絶えず團扇で私の方を煽いで呉れた。

『暑うおすな……』

突然私は言つた。

『何うだい、もう好い加減に歸つたら？』

『何處へどすか。』

『國へさ、本國へさ。國が戀しくはないかね？』

『だつて、いくら歸りたいと言つたかて、歸ることがなけんのです。』

『何故だえ？』

『何故つて……何したかて駄目どすばつてん。』

『一體、此處に来てからもう何年になるんだえ？』

お春は低頭して浴衣の裾あたりの皺を伸してゐた。

『え？』

『もう七年。』

『七年？ おまさは？』

『あの人は十年。』

『すると、お前は十八の時に來たんだね。』

お春は黙つて點頭いて見せた。

『初めは何うして來たんだえ？』

『矢張騙されて、賣られて來たばつてん……』急にいろ／＼なことが女にも思出されて來たといふ風に、暫し悲しさうにしてゐるが、やがてそのこゝまで流れて來た話を意味のよくわからない長崎言葉で話し出した。

矢張新聞などに書いてある長崎天草地方の空氣や、外國に出稼に行つたものに對する憧憬や、人買ひの悪辣な手段や、甘言や、さうしたことは皆な事實であつた。それは決して他で思つたやうな怪奇なロマンスではなかつたのである。かの女も矢張人買ひに騙されて、村の祭禮に行つた夜に、その旅宿に伴れ

て行かれ、警官の目を忍んで、深夜に荷物か何ぞのやうにして船艙に乗せられ、それから日光を見ず、話も出來ず、暗い天井の低い一室にさうした大勢の女と一緒に押しこめられて、そしてもう泣いても叫んでも何うすることの出來ない異郷へと連れて來られたのだといふ。船の中では握飯につけ物で十數日餓を凌いで來たといふ。また便所にも行くことは許されないので、石炭の山の上で連日用を足したといふ。そして最初はかの女はシンガポウルで下され、そこに一月ほどゐて、それから此處にやつて來たといふ。『何うしてあゝいふ氣になつたか、私にもようわからんばつてん……ほんの娘氣でついその旨い口に乘せられたんだすな。』かうお春は昔を思ふやうにして言つた。

『船の中にある中は、きつうて、きつうて、こんななら、死んだ方がよかばいと思つたですよ。』

かう言つたお春の眼には、微かに涙が光つてゐるのが見えた。

『それで成功したものはあるかね？』

『あるもんですか。千人の中にも一人もなかばつてん……』

私はいろ／＼なことを考へずにはゐられなかつた。餘程巧妙に運命を開拓したもの、他には、かれ等はとても人買の言つたやうな贅澤な榮華は、容易に得られないのであつた。それどころか、七年も、十年も、乃至は一生もかうして、眼色膚色の變つた人種を相手にし、生れもつかない土語を口にし、最後は熱い黄いろな異郷の土に、土人の手で穴を掘られて埋められて行くのであつた。私は一昨日だつたか

船の人達と一緒に見物して歩いてゐる途中、はたきを幾つも並べて立てたやうな椰子の林の下に無數に縦横にころがつてゐる内地人の墓石のことを思ひ出した。今ではさうした女の無縁佛の型ばかりの墓標も百以上になつてゐるのである。

『何うして歸れないんだね？』

『歸りたいと言つたばつて、誰も連れて行つて呉れてがなかとです。——お金も少しもなかとですもん。』

『一生懸命に貯めたら好いぢやないか。』

『たまるもんですか。』

『親達は何うしてゐるの、まだ生きてゐるんだらう？』

『この間、お父さん、病氣だつて言うて來ましたよ。』

『見舞でも出したのかえ？』

『いゝえ。』

私は非常に悲痛な事實にでも觸れたやうにして頭を振つた。

お春は少し考へて、『今頃は死んだかも知れんとです。だいぶきついさうだつてことだから。』

『手紙くらの出さなくつちや不幸ぢやないか。親がそんなに大病だといふのに……。此處で出せなけ

れや僕が持つて、歸りに門司に入れてやるから……。一つ書いて出した方が好いぢやないか。』

お春は頭を強く振つて、

『いゝえ、かまはんといて下さい。どつさり親不孝したついでばつてん、何も便りせんとです。どう

せ歸られる體でなかとですもん。』

私は悲しい暗い氣がした。かうした不幸な者と一夜を過したこの身さへ淺ましい人間のやうな氣がして來た。お春も口ではさう強いことを言つてはゐるが、その心の底にはいろいろな追想やら、悲哀やらが力強く押寄せて來てゐるらしく、『一杯くだされ』と言つてその前にあるコップのウキスキーをグツと呷るやうにして飲んで、

『もう、そんな話よかばつてん。陰氣になるもん。』

『本當だ。もうよさう。さういふ話は。』かう私も思ひ返したやうに言つて、女の出したコップにタンサンと一緒にウキスキーを注がせて、そしてそれを一氣に飲み干した。

『使が遅いね。』

『もう歸る頃ですがの……』

しかし、私は考へまいとしても、考へずにはゐられなかつた。さうした不仕合せな女もあるのだ。自分に金さへ澤山あるなら、借金を拂つて伴れて國に歸つてやつたら、何んなにその父母は喜ぶだらう……

。死に瀕した父親も枕を擡げて嬉し涙に溢れるであらう……しかしさうしたことはとても出来ない。私はコップを置いては、また黙つて考へた。

急に足音がしたと思ふと、廊下の方のカーテンが開いて、肉附の好い莞爾としておまさがシミズ（寢巻）を着たまゝで入つて來た。さう綺麗でもない、色の黒い腕が半分以上もあらはに出た。

『あゝよう眠つた。』

不機嫌さうな顔を両手で摩りながら、どつかりベッドの上に腰を下した。

お春はさつきの密航の話を證據立てるためのやうにして、

『お前も石炭積になつた方だね。』

『私かえ、私は石炭の上より、もつとく辛かつたどすばい。』

おまさは何うしてそんな話を突然に、お春が持ち出したかを怪しみもせず事もなげにかう言つて平氣で笑つた。

私も餘りのんきな無頓着な女達の問答に思はず笑ひ出した。

『だつてさうだもん。』

おまさはお春とは違つて、いくらか莫連で「シガレットをお呉れや、」と言つて、私のスリイカツスルを一本取つて、そしてそれに火をつけて、すばく吸つた。

今度はおまさが言つた。

『あなた方は好いのう？』

『何うしてかい？』

『船ではたんと旨いもん食うて、あがると女を買つて、そして、日本にいゝチンタ（戀人）が待つてるですばい。』

『お前達だつて、チンタさんがいくらもあるだらう。』

『そんな人あつたら、こんな苦勞せんのです。』

『Hがるぢやないか。』

『あの人駄目、おかみさんあるから。』かう言つておまさは笑つて、『ほんとはの……おんども好いスイトハアト持つとるのですよ。早く來ませんやらうかの？』

『おんどにも早く來ませんやらうかの？』ノンセンスで愛嬌者のおてるは、おまさの口真似をして、わざと本當らしく指を折つて數へて見たりしたが、急に、

『おんどに、今年十一になる息子があるとす——。ほんたうですばい。生れるとすぐ來たですもん——。一度嫁に行つたことですけど、そこが厭で厭で、たうとうこんな處まで逃けて來たとす。そやばてん、あなたも娘さん大きくなつたら、厭だといふところへは、やるもんではないかとすばい。』

『それぢや、お前もう餘程お婆さんだな。』

『十三の時生んだで、まだそんなにお婆さんでないですよ。』

『十三？ えらく早いな。好い加減なことを言つてるんだらう。』

『そら、見せて上げまつせ……』おてるは眞剣に、自分の部屋から男の子の寫眞を持つて来て見せたりなどした。石炭積、荷物漬になつて来たとは言へ、かれ等にも皆それぞれかうした遠いところまで流れて来るについての前生の種々の物語や事情があるのであつた。私は廣い悲しい、またロマンチックな人生を思はずにはゐられなかつた。

こんなことをして、かれ是一時間ばかりも過ぎたであらうか、漸くボオイが歸つて来た。Tの返事によると、急に不意の爲事が出来て、忙しいから日中は行けない。晝寢でもして夕方まで待つてゐるといふことであつた。私は軽い失望を感じた。しかし思返して、この女共を相手にしてゐたら、半日位何うかかうか遊んでゐられるだらうと思つた。其處に此處のミスストレスが入つて来た。前齒の二本缺けた脊の低い五十ばかりに見える女である。かの女はこの前来た時に、私達の酒の席に出て、皺枯れた聲で唄を唄つたり三味線を弾いたりしたことがあるので、互ひに懇意になつてゐた。この地に渡つて来てもう三十三年にもなる女としては、さう人が悪るさうでもなく、女共にも割合に慕はれてゐるらしかつた。若い時長崎で藝者をしてゐたはなしなどをかの女はした。なんでもこつちに來てから、一時非常に莫大

の金を手に入れて、人も眼を睨るやうな全盛をしたことがあつたが、情人のためににすつかりなくなして了つたといふことであつた。かの女には今年十一になる女の子がゐて、可愛らしく洋服などを着て、女共を『姐さん、姐さん』などと呼んでゐた。

ミスストレスは皺の多い手で巻烟草を吸ひながら、カルカッタとラングウンの生活を比較して話してきかせたりしてゐるが、私が船の醫師であるのを知つてゐるので、段々話が其方の方に向いて行つて、此地で日本の醫者が土人に信用を得さへすれば、巨萬の財産を作ることは譯はないなど、話し始めた。さうした話を三十分ほどしてかの女は室を出て行つた。

五

廊下で何かごとごとと音がしてゐるが、立つて行つて見ると、お春はそこに吊してある籠から、青い一羽の鸚鵡を出して、それを馴々しく自分の肩に載せなどして、餘念なく豆をやつてゐるのを私は目にした。

鸚鵡は女の手から餌を啄みながら頻りに首を傾けたりあたりを見廻したりしてゐた。

『アリガトーアリガトー。』

不思議な聲を出して鸚鵡は言つた。

『面白いな。』

かう言つて私は傍に寄つて、『よく馴れてゐるね。』

『え。』お春はかう答へて、掌の上に鳥を載せた。青い羽色と、さうした女と熱帯の日影や空気とが私に一種不思議な、内地などでは想像の出来ない情調を誘つた。かれ等女の群は、他に樂みがないので、皆なかうして一羽づゝ鸚鵡を飼ひならして、二年位かゝつて、『お母さん』とか、『おはやう』とか、『おやすみ』とかいふ言葉を覚えさせて、そしてそれを相手にしてゐるのである。私はロチの旅行記を思ひ出さずにはゐられなかつた。

私は戯れに、

『よくなつてゐるな、それを僕に譲つて呉れないか。』

かう言ふと、お春は眞剣になつて、

『これだけは御免なさい。わたしの可愛い可愛い息子ですもん——離すのは、それは／＼つらいとで
すばい。』

そして下を向いて了つた。私はいよ／＼女が可哀相になつた。私は黙つてお春の肩に、腕に馴々しくとまつたり飛んだりする青い鳥を眺めた。

六

ベッドに来て、下にある古ぼけた文藝俱樂部や講談本などを引ずり出して、あちこちと拾ひ読みをしてゐる中に、ついうとうとした私は、

『お湯を使ひませ……』

といふお春の聲に呼び起された。はつとして時計を見ると、もう四時を過ぎてゐた。日は斜に、空気は濃かに、大分涼しくなつて來てゐた。私はそのまま、起きて湯殿に行つた。そこはひろいセメントを敷いたバルコニイの一隅に、眞四角に劃られた湯殿で、生温い、しかし澄み切つた溢れた湯は、寢覺めの皮膚に和らかな好い感覺を與へた。髪から體からすべて綺麗に洗つて、別にお春が持つて來て置いて行つた糊のこはごはについた浴衣に着更へると、私は別な人になつたかのやうに、何とも言はれない爽かさを覺えた。で、好い心持で湯殿を出て、階段を上つて來ると、室の前の上り段のところに、お春とおまさとおてるとが三人寄つて、蹲踞つて頻りに何か面白がつてゐるのを私は見た。側にはシミズを着た此家の娘と、黒い裸のボウイとが立つて頻りに笑つて見てゐた。

お春は私の方を振向いて、

『あなた、こゝへ來て見んの、鸚鵡が踊つとるですばい。』

鸚

鵡

立寄つて覗いて見ると、その女達の真中には、キョトキョトした鸚鵡が一羽置かれてあつて、おてるが手拍子を取つて、『ナチユカロ、ナチユカロ』と囃し立てると、青い色をしたその鳥は、頸を横に傾けながら、羽を擴けてぐるぐると二三度廻つた。土人の踊りの真似をするのであつた。女共は聲を立て、笑ひ興じた。

私はやがて其處を去つて、今一つの別のバルコニーに通ずるエランダの方へと歩いて行つた。私の胸には『詩』が漲るやうに押寄せて來た。私は古代ロオマの廢址のやうな支柱を前にし、下までは五六丈もあらうと思はれる土人の町の混雜した不思議なさまを眺めながら、悠々とした永遠に近い心に滿されながら、じつとそこに立盡した。

不思議な繪だ。エキゾチックな異國の情調だ。下には低い長屋のやうな小屋が幾棟となく並んで、錆色した細い半圓筒體の瓦で葺いてある屋根。壁の代りに色の褪せた笹の葉のやうなもので巧みに編んで圍んである小屋、その前の狭い汚ない路に板の臺を出して寝ころんでゐる土人の幾群、その群の中には、腰をかけて、その膝に大きな土器を載せて、素性の知れぬ食物を黒い手で摘んで食つてゐるものなどもあつた。かと思ふと、そこから一間ばかり離れて、大地にそのまゝ胡座をかいて、頻りに檳榔樹の實をしやぶつてゐるものなども見られた。灰色に汚れたサロンを腰の周圍に巻いた禪のまゝの黒光に光つた土人の鬚、檳榔樹の實に染まつた眞赤な齒と舌、それにギョロギョロと光る黒い眼、さうし

たものが到るところにごたくと巴渦を卷いてゐるのを私は見た。

小屋のすぐ後に小路を挟んだ二つの廣場、その一つの右の廣場には茶色の天幕が張つてあつて、それを支へるための柱に、あらゆる色を集めたデコレイションが施してあるのが見えた。そしてその下には三箇所ばかりに火が焚かれてあつて、大きな鍋がかゝつてゐるが、その周圍には二三人づゝの土人が暑いとも思はずに火と鍋とを代る代る掻き廻してゐる。そして匏屑で拵へたラツバを鳴らしてゐるやうな單調な得體のわからない音楽の響が、その後の黄ろい壁の四角の家から起つて來てゐた。それには太鼓や鉦に似た音も雜つてゐた。『はゝア、さつきから變な音がしてゐると思つたが、何か土人の部落に祝ひごとでもあるんだな、結婚の披露會か何かでもあるんだな。』かう氣が付くと、そのあたりの混雜した光景も成程と點頭かれて、一種不思議な心持が私の胸に漲つて來た。

やがてもう一つの左の方にある廣場に目を移した私は、そこでも土人が四五人で同じやうな式場らしいものを精々と拵へてゐるのが映つた。丸太や竹竿や繩やが他の土人の手で運ばれて來たと思ふと、前の四五人の中の二人は、苦もなげにするすると椰子の樹に上つて行つて、下から出す竹竿を木へとわたしかけた。それをまた下では泥で拵へた人形のやうな土人の子供が、わいわい言つて騒いでそれを見てゐた。中には惡戯をして叱られて逃げまどつてゐるものなどもあつた。

かうした不思議な混雜を前景にして、その向うには二三町とも隔つてゐない一面の椰子の林に、銅が灼

熱されたやうな大きな光芒のない日輪が、次第に下へ下へと沈みつゝあるのであつた。毒々しい赤い花、インヂアンイエロオの民家の壁、錆色した屋根、凡て私に堪へ難い旅情を誘つた。私は涙ぐましい心持でちつと一刻毎に落ちて行くその大きな夕日を眺めた。

『何をほんやりしてゐるんだい。』振向くとそこにYとTとが來てゐた。

遺傳の眼病

一

烟草の烟と多い乗客とで夥しく不愉快な長い長い汽車の三等室でTは昏睡から眼覺めた。もう朗らかな朝になつてゐる。汽船が無數に烟突から煤煙を漲らして碧い海に碇泊してゐるさまが、線路に沿つた低い家屋の上に燈氣樓のやうにちよつと見えてそしてすぐ消えた。『もう東京だらうな。』かう思つてゐると、通過驛の『ひがしかながは』といふ白い板に書いた字が逸早くかれの眼を掠めて過ぎた。『あ、あれが、あの汽船が横濱だ。愈々東京だ。』

Tは一種の胸騒ぎを覺えた。來たには來たが、長い間あくがれてゐた東京に來は來たが、知己とてもなく、丸で不案内な土地で、自分は何うする積りだらう。かう思つたがTは決して後悔はしなかつた。懷にはもう七八圓内外の金しかない。普通の旅客のやうに旅舎に泊れば、一日二日でその金はなくなつて了ふ。何うにかしなければならぬ。何んなことでもしなければならぬ。それは此方から訪ねて行

けば、國の人はゐる。その人達の二三の宿所も萬一の時と思つて、手帳に書きつけて來た。しかし兎に角自分は叔父であり且つ養父である故郷の家から黙つて脱走して來た身である。滅多に寄り附くことが出來ない。またある成功を見るまでは寄り附くまいと思つてゐる。さうかと言つて、かれは養父の家からは、金一文持ち出した譯ではない。自分が持つて出た金は、旅籠屋の養子ではありながら番頭のやうにして働いて、客から貰つたのを長い間ちびちび心がけて貯へて置いたものである。俯仰天地に恥ぢるやうなことはひとつもしない。かう思ふと、Tは昨日の今頃既に出京の心構へをして、あの旅客の泊つてゐる長い廊下を土藏の方へこつそり入つて行く自分の姿を歴々と眼の前に見た。土藏の中で、かれは一昨日から小さな柳行李にさし當り必要なものだけを選んでつめた。持つて行きたい本などが非常に多かつたけれど、またあとで養父母が送つて呉れるやうな深切はないと思つたから、殊に持つて來たかつたけれど、餘り荷が大きくなつては目に立つと思つて思ひ留つた。養母が、『Tや何してるんだえ。土藏にばかり入つてゐるね。』かう言つて此方にやつて來さうにした時にはTはぎよつとした。しかし幸ひなこには、かれは其朝自轉車であるところに客引に行くことを命ぜられてゐる。Tは小さな行李をソツと店の外のところに持ち出して置いて、そして家の人達には、少しも感附かれずに、その古い空氣の漲つた、思出の多い、父母の墓のある、友達の二三人ゐるなつかしい町を自轉車を飛ばして勇ましくあとに残して來た。

普通なら海を連絡船で渡つて、對岸にある停車場から汽車に乗るべきであるが、自轉車の上手なTはわざと陸路を取つて、大廻りをして、追跡の危険のある路をよけて、五六時間もかゝつて、故郷から十二三里、それ以上もあるA驛に來て、そしてその停車場の待合室でほとと呼吸をついた。しかしここではTは躊躇した。思ひ立つて夢中のやうにして其處まではやつて來たが、廣い東京、不知案内の東京、極樂のやうな且つ墓場のやうな東京、そこにこの弱い體で、金の準備も不十分で出かけて行くことは恐ろしいやうな氣がして、Tは待合室の榻の上で、自轉車をわきに置きながら、汽車の時刻の近づいて來るまで思ひ煩つた。一度はあとへ引返さうかと思つて、自轉車を押して待合室を外に出て見た。しかし、何うしても養父母の冷めたい家庭の空氣の中に歸つて行く氣にはなれなかつた。母は赤兒の時別れた。父は神戸のフランス語のガイドで、道樂もし、女にも關係し、随分遊蕩の生活を送つたさうであつたが、また母親の夭死もそれに連關してゐると言はれてゐるけれども、それでも、國に歸つて來た時には、相應の財産は持つてゐた。現にその弟である養父が、今の旅籠屋をあれだけに大きくしたのも、父がその財産の大部分をそれに注ぎ込んだからである。で、父の生きてゐる中は、叔父もやさしい叔父だつた。父の死ぬ時には、養子として無論Tを粗末にしないから安心して下さいと言つた。しかしさうしたことはずべて氷のやうに溶けて流れた。間もなく、今の養母が先の養母の死んだあとに來た。それから、Tはもう養子でなくなつて忙しい旅籠屋の小番頭として働かなければならなかつた。それに、運漕の方

もいくらかしてゐるので、荷物の取扱にもTは扱き使はれた。小柄な非力なかれの體に似合はないやうな労働にも服させられた。Tはいつも粗くごそごそした手を、または力業に發達した手を、友達の群の中で自から撫で、見たりした。

それに、Tは十五六歳から、眼がわるかつた。晝間は別に差支はないが、又夜でも電氣カランプの下ならば、何うやら彼うやら本位讀むことは出來たが、何うも夕方から闇にかけて物がはつきり見えなかつた。初めは鳥目と言ふものだらうなど、言つて、八つ目鰻などを用ひて見たり、田舎の醫師にかゝつて見たりした。しかし何うしても癒らなかつた。さうかと言つて、またそれがたぎつてわるくなるのでもなかつた。それに、田舎の醫師達は、はつきりその病因と病性とを知ることが出來なかつた。Tは二十一二の時、矢張、自分で貯蓄した金で、京都の大學病院に行つて診察して貰つた。そこでは、腦から來た眼病で、不治ではないが、非常に難病であると言はれた。Tは絶望して眼病に靈驗のあるYの觀音へお詣りして、その平癒を祈つたこともあつた。

苦勞はこれまで澤山にやつて來た。あらゆる勞働にも服した。二十四の青年として世の中のことも知りすぎるほど知つてゐる。だから、東京に行つても、苦勞はいかやうにもする。勞働も何んな勞働にも服する。しかしその念が一度眼病のことに及ぶと、Tは心細くなつて來ずには居られなかつた。京都でも治らなかつたが、東京は名醫の多いところだ。其處に行けば、治るかも知れない。かう思つたのも、

今度東京行を思立つた一つの原因ではあるけれども、しかし急にでもわるくなつたら、他人ばかりの東京で、自分は何うなつて了ふのであらう。かう思ふと、Tは折角思立つて其處までやつて來た勇氣がすつかり挫折して了ふのを感じた。京都の病室で醫師に宣告された時の悲觀が、自分の不幸の身の上と一緒になつて、魂が地の底深く沈んで行くやうなを感じた。

Tが何方にも心が極らずに、躊躇して停車場前でぐづぐづしてゐると、其處に改札がやつて來て、『お前さん、上りに乗らんぢやないのかな。乗るなら乗るで、早うせんといかん。もう汽車は來るぜ。』かう言つて、Tの前を通りすぎた。

Tは遂に決心した。『さうだ自轉車も持つて行かう。これは養父のものだけれど、あとで返せば好い。自轉車を持つてゐれば、萬事につけて便利だ。心丈夫だ……』かう思つて、Tは急いで東京までの通し切符を買つて、自轉車を手荷物係りのところへ持つて行つて預けた。

『東京ぢやな。』

かう言つて、係りの男はその自轉車を受取つた。

その自轉車は、A驛で、白い紙片をつけられて、かれが汽車に乗込む前方を他の旅客の手荷物と一緒に運送車に載せられて行つたが、京都で乗替へる時には、そこらを見廻して見ても、何處にもそれは見えなかつた。しかしあの自轉車もTと一緒にこの東京へはるばるやつて來たに相違なかつた。Tは一日一

晩の混雑した汽車の中を振返つて見るやうにした。急行車でなくつても好いと思つたけれども、生中京都あたりで待つて時間を取ると、旅舎に泊らないまでも、物を食つたり何かして金が費る。急行券を買ふ方が却つて得だ。かう思つてTはそれからずつと辨當を一つ買つたばかりで長い旅をして来たことを思つた。『何と思つたつて、もう來ちやつたんだ。實行したのだ。先に進むより他に爲方がない。』かう思つてゐる間にも、急行車は早く早く駛つて、やがて再び海が見え、漲り上る大都會の煤煙が見え、電車の軽く滑るやうに賑やかな街頭を通つてゐるのが見え、大きなガスタンクが見え、ゴタゴタした人家が見え、遂に汽車は大都會の轟音の漲りわたる真中の大きな停車場へと着いた。

Tは大勢な人達と一緒に、小さな柳行李をかついで、石造の大きな階段を出口から待合室の方へと來た。

あたりの賑かな足音が広い天井に反響して、それがTに一種恐怖に近いある感じを與へた。Tは行李を待合室に置いて來て、それから自轉車を受取りに係りの方へと行つた。

自轉車は安らかに、かれのやうな苦しい思ひもせず、A驛からこの東京の手荷物係のところにもちやんと來てゐた。それを受取つた時にはTはなつかしいやうな力強いやうな氣がした。Tはそれを押して荷物を置いてある待合室に行つて、それを太い柱に立てかけて置いて、これから執るべき最初の第一歩に就いてかなり長い間考へに沈んだ。

二

日の暮れる時分、Tは白山の坂を自轉車を押しながら、困憊したやうな顔の表情をして歩いてゐた。

Tは終日東京の重なるところを自轉車で乗り廻した。京橋、日本橋、神田、本郷、すべて乗廻した。自分の生活のたつきになりさうな家、例へば職業案内とか雇人受宿とか、さういふ處を何軒も何軒も聞いて歩いた。しかし保證人がなくては、何處でもどうにもならなかつた。Tは午飯をある蕎麥屋で腰かけてすました。その上さんにさうした生活の口の話や自分の冒険の話をした時には、上さんは呆氣に取られたやうな顔をしてTを見た。無論取り合つては呉れなかつた。

Tは非常に勞れてゐた。精神的にも、肉體的にも……眼病以來、かれには夜の來るのが恐ろしかつた。兎に角、どうかして安眠するところを得なければならぬと思つた。今日も二度も三度も涙はかれの頬を傳つて流れた。

ふとTはその前に、丈の高い木綿の紋附の舊いのを着た頭髪のもちやくした大きな男ののそのそと歩いて行くのを眼にした。

『もし、もし。』かうTは呼びかけた。

大きな男は自分が呼ばれたとは氣が附かないと見えて、知らん顔をして、同じ態度で平氣で歩いて行

つた。

『もし、もし。』

かう追懸けるやうにしてTは呼んだ。

漸く氣が附いたやうにして、その男は振返つた。『僕ですか。』

『此處等に下宿屋はないでせうか。』

『あるでせう、いくらも……』

『田舎から、今日來たばかりで、丸つきり東京を知らないで、困るんですがね。』

男はじろじろとTの顔やら自轉車に結へつけた小さな行李やらを見たが、少し考へて、『僕も下宿屋にゐるんだ。僕るところへ來給へ。一晩位何うにでもなるよ。』かうぶつ切ら棒に言つた。

Tは救はれたやうな氣がした。かれは幾重にも感謝した。心から感謝した。で、二人は並んで歩いた。男から訊かれるにつれて、Tは昨日からの旅の話をした。今日東京中自轉車で乗り廻した話をした。男は、『誰も知つてゐるものはないのか。それは困つたらう。』かう度々同情するやうに言つた。

男について行つたTは、露地の中にあるやうな汚ない家と、破れて黒くなつた障子と、中年の上さんと、男と同じやうな青年が二三人一間にごろごろしてゐるのを認めた。恐ろしいやうな氣がした。自分の財布には金がないから好いやうなものも、もし多量金でも持つてゐたら、とても安心してゐられさう

にも思はれなかつた。それでも、上さんは、Tが自轉車を持つてゐるので、それに信用を置いたらしく、

『好いともな、お前さん方が一緒なら。』かう言つて承知した。

かれはライオン齒磨だの、筆だの、鉛筆だのの室の隅に澤山に積んであるのを見た。かれ等の群は何か一言二言言つて、金の勘定などをした。何かしてゐる連中に相違なかつた。しかしかれは非常に疲れつた。日が暮れると、飯を食はせて貰つて、蒲團を借りてぐつすと寝込んで了つた。

三

一日二日経つた後には、Tはその男の群のやつてゐる爲事を自分もやつて見ることにして、鉛筆やほみがきや筆などを持つて出かけた。品物の代りに、かれは自轉車を抵當にした。山の手の垣を取り廻した大きな邸、花崗石の立派な門、赤いモスリンの蒲團の干してある二階屋、琴の音の洩れてきこえる瀟洒な家、または坂のだから下りになつてゐるところにある冠木門の家、さういふ家にTの見すほらしい慘めな姿は入つて行つた。

Tは今日で三日ほどその苦學生の行商をやつた。つくづくTは自分の身の情けなさを感じた。何處に行つても、相手になつて呉れるものはなかつた。玄關の硝子障子を細目にあけて、『家ぢや要りませんよ、』と下女に突ッ慥食に言はれたり、『本當に困るよ。無用心で爲方でありやしない。』とわざと聞えるやうに

聲高く言はれたりした。Tは到る處でくわつと腹を立てた。「腹を立てたり何かしちやこの商賣は駄目だよ。何でも下手に出てそしてづうづうしくやらなくちやいけない。」男からさう言はれるけれども、Tは腹を立てずには居られなかつた。

Tは乞食かまたは泥棒にでも成り下つたやうな氣がした。大抵の家では手を振つて斷られた。少しづうづうしくやると、『要らんといふのにわからんか。押賣をすると、警察に渡すぞ。』などと奥から男の聲に嘸鳴られた。たまさかに此方の言ふことを聞いて呉れたと思ふと、庇髮に結つた細君が、『今日は折角ですから買ひますがね。今度はお斷りですよ。』などと言つた。

それで、一日いくら商賣があるかと言へば、賣上額が三十錢にならないことが多かつた。しかも、その下宿の男の群達は何處かにかうした商賣をするにつけての腕を持つてゐるらしく、一圓以上多いのは二圓足らずの賣上げを持つて歸つて來ないものはなかつた。かれ等は一錢の元を五錢位に賣つた。

Tは自分の力も自分の魂も何も彼もすつかり蹂躪されたやうに思つた。またかうしたことを甘んじてやつてゐる自分は——魂をも生活のたつきにしてゐる自分は、自分ながらあきれ果てた奴だと思つた。つゞいて世間の人達に對する反抗が熾に起つた。綺麗な着物を着てかれ等は歩いてゐる。大きな邸宅を構へてかれ等は住んでゐる。旨い物を食つて肥えてゐる。行くに車があり自動車がある。そしてかうした商賣して歩いてゐるあはれなものを乞食か泥棒のやうに言つて追ひ返すのを何とも思つてゐない。社

會主義などの起るのも尤だと思つた。しかしそんなことを思つても、何うにもならなかつた。矢張同じ群の人達のやるやうに、何でも彼でも下手に出て買つて貰はなければ爲方がなかつた。それが悲しかつた。

Tはある日は泣きながら山の手の垣根に添つた路を歩いた。もう何うしても、一軒一軒入つて行つて見る氣にはならなかつた。またさうした人間としての取扱でない取扱を受けるのかと思ふと、恐ろしいやうな氣がして神経が昂つて來た。周圍にゐる人間達は、自分とは全く異つた種類のものゝやうに、敵のやうに、また悪魔のやうに、または自分一人がほつつりとこの大勢の異人種の中にかうした慘めに生きてゐるやうな氣がした。その打撃はTには大きかつた。拭つても拭つても涙が出て來た。

何の彼のと言つても、國にゐる時分はまだ好かつた。『しかし、しかし……』とTは下唇を咬みながら歩いた。しかし國から出て來たのは決してわるいのではない。わるい發意ではない、それは好い。決して後悔して、再びとあの養父母の冷めたい家庭に歸つて行かうとは思はない。思はないほどそれほど冷めたい家庭に自分はあるたのである。それほど惨めな家庭に自分は若い青年の時代をすごしたのである。不幸な自分の運命がまたしても犇々と押し寄せて來た。

それは疊つたイヤに蒸し暑い日であつた。行違ふ人達——お婆さん、行商の男、庇髮の細君、子供を伴れた年増の女、さういふ人達が皆な不思議さうにして、かれの眼の縁を赤くしてゐるのを見い見いす

れ違つて行つた。ふとTは傍を見た。そこには新緑の深く茂つた静かな小さな祠があつた。かれは體がもう支へるのに堪へられないやうにして、急いでその祠の中に入つて、樹の蔭の下にあるロハ臺に身を倒した。

新緑を上に、大空を上に、大きな涙眼を見開いて、仰向に長い間Tは寢てゐた。

そこには誰もやつて來なかつた。をりをりTの歎歎ける音が、静かな曇つた境内の空氣の中に聞えた。

四

夕方になると、その群の人達は一人々歸つて來た。

Pだの、Aだの、Sだのといふ名であつた。かれを此處に伴れて來た大きな男はMと呼ばれてゐたが、今日は土曜日の上に賣上げの結果の好かつた人達も二人や三人はあつて、

「何うだ、今日はじわじわでもやらうぢやないか。」かう誰かが言ふと、

「そんな景氣ぢやねえ。」

かう室の隅にころがつてゐたPが言つた。

「そんなことを言はないで賛成しろよ。」

「したくもそんな錢はねえ。」

「此間、持つてゐたぢやないか。」

「じわじわなんか使ふ金ぢやないんだ……」

「あいつにやる金かえ？」

「きまつてゐらあな。」

「それぢや、金のある奴だけでやらう。」かう發議したAは言つて、「おい、貴様は賛成だな、」とMに言つた。

「錢がないが、賛成する。」

「貴様は？」

Sに向つて訊くと、

「賛成。」

「奥に寢てる人は何うだえ？」

次の間に勞れて臥してゐるTに言ふともなく、またTをつれて來たMに言ふともなくAは言つた。

「駄目だよ、奥は。まだ馴れないから爲事が携けないんだ。」

かう代つてMが言つてやつてゐるのをTは耳にした。

「一本づゝつけるか。」

『それはさうさ、當り前さ。』

『それぢや、錢を出せ。じわじわ五人の頭割で、一人前二十錢、酒は一本で好いか、二本か。』

『一升ぢや足りないや、一升五合買つて来いや。』

『Sが飲みやがるからな。』

『それは公平に出来てるアな。弱者は強者が扶けるやうに、弱者もまた何處かで強者を扶けるアな。』

Aの分を僕が飲めや丁度好いや。』

『こいつ奴、ずるい奴だ。多く飲む奴には多く出させろ。』

かうAの言ふ聲がした。

で、てんでに褻口から金を出す氣勢がした。中には長い財布の紐を首からかけてゐて、懐から大きな財布を出すものもあつた。銅貨や銀貨のチャラチャラする音がTの寢てゐる方まできこえて来た。

昔からTには夕暮が侘しかつた。あたりが眞暗になると共に、頭が冴えて、神経が刺すやうに尖つて来るのをいつもTは感じた。それは國にゐる時からさうであつたが、東京に来てから、艱難のために一層それがひどくなつてゐるのを感じた。侘しい侘しい世界の果てにでも来たやうな気がした。涙ももう出なかつた。

ふとTは思つた。この侘しさの中には、誰かゝゐるのではないか。誰かの怨恨が生きて動いてゐるの

ではないか。かう思ふと、京都でYの観音へお籠りをした時のことなどが思ひ出されて来た。……暗い暗い心持になつた。『僕のやうなものは死んで了ふ方が好い。』かう痛感した。

そこに電氣がぱつと室を明るくした。

隣の間では、酒と肉が既に來たらしく、七輪に火を起したり、あの汚い餉臺を持ち出したりする氣勢がした。それを聞きながらTは疲れてうとうとした。ふと目がさめた時には、隣ではもう皆な酔つて、デカンショを唄つたり、詩吟をしたりしてゐた。牛鍋は既に残りなくあらされて、ジワジワと葱の焦ける匂ひと、炭の燃え立つ火氣と、酒のいやに甘くさい匂ひとが一つになつて、不愉快な空氣をあたりに漂はせてゐた。

『愉快だ、愉快だ……かうした愉快でもなければ生きてゐられない。』

かうAが言つた。

『また、一儲けやるかな……何アに、構ふもんか、金持が貧乏人に拂ふ税だ。さういふこともなくつちや、ひよこひよこ頭なんか下けてゐられるもんか。』

これはSであつた。Tは耳を敬だたせて聞いた。Tはある深い暗示と刺戟とを總身に感じた。かれは大都會の暗黒の底の底に落ちたやうな気がした。

Tは溜息をついた。

喧しい亂雑な唄やら議論やらが嵐のやうにきこえた。Mは社會主義者らしく、頻りに金持を攻撃し、無政府を高唱し、屹度一度はさういふ吾々の黄金時代が来るに相違ないなどと言つた。Pはそのじわじわの群には交はらなかつたが、しらふで頻りに何か言つてゐたが、これはまた肉慾より他に何も無いといふやうな赤く心の爛れた論者らしく、『そんな野暮なことを言ふもんじゃない。一體、社會主義などと言ふ奴は、世間も女も知らない輩だから、そんなことを言ふのだ。もう少し女でも買へや、儲けた錢があるなら。』とMを罵つた、Mもまけてはゐなかつた。『何だ、貴様なんか、女のけつばかり追廻してゐる青瓢箪だ。理想なんかわかるもんか。』かう言つて、酔つたまぎれにほつかりPの頭を見舞つた。

『こいつ、手を舉げたな。』

『舉げたがわるいか。貴様のやうな魂のない奴が日本にゐるから、社會が腐敗するんだ!』

また打たうとした。

『生意氣を言ふな。搔さらひめ!』

『搔さらひとは何だ。貴様こそ搔さらひの女のいもじだ。』

互に腕を振り上げて、めちやめちやに打ち合つた。AもSも最初は、『まアまア。』などと言つて留めてゐたが、後には二人のするまゝに任せた。MとPとは互にとつくり合つて争つた。Pの投つたものがAに當つたと言ふので、今度はAがPに喰つてかゝつた。

そこに上さんがその氣勢を聞いて慌て、留めに來た。

Tは頭の眩惑するのを覺えた。暗い心持が起つて來た。かうして魂を失つてゐる人達の群の中には、もう一日もゐられないやうな恐怖がTを襲つた。

五

Tは父親が佛教信者で、遠縁のものには僧になつてゐるものなどもあるので、幼い頃から佛に手を合せるやうな質であつた。かれは多くの青年のやうに佛像や寺堂や僧侶に就いて無關心ではゐられなかつた。何か其處に不可思議な神祕なものが隠されてゐるのを感じた。そしてその心持は、自分の眼病の殆ど不治であることを宣告されてから一層強くなつた。不治を宣告されたが、その宣告したものは神ではない。絶對ではない。神佛に縋れば、潰れた眼すら明いたためしはいくらもある。かう思つたTは京都の郊外二里のところにあるY觀音堂にお籠りをした。

Tはその時分の張り詰めた敬虔な心持を思ひ浮べた。實際、眞劍であつた。一意唯神佛の加護に由つて不治の眼病の平癒せんことを祈つた。朝早く、本堂の廣い板敷に坐つて、大勢の人達と手を合せて、讀經祈願した時は、それより他に何の求むるところもなかつた。世間の何物も思つてゐなかつた。艱難な生活も思はなかつた。養父母達の冷めたい家庭も思はなかつた。額の上に合せた手には力が入つて、

精神が、魂が観音大士の像に向つて一つになつて行くやうな気がした。

さうして、三四日のお籠りをしてゐる中には、心には不安がなくなり、動搖がなくなり、胸は清く拭はれ、手は自づから合はされ、額は自づからぬかづかれて、自分の病氣に對する苦惱は薄く薄くなつて行つた。Tは大勢の信者達と裏の山際に滾々として湧き出している冷めたい手も切れるやうな清泉に行つては、日に何遍となくそれで眼を洗つた。

Tは病院の病室にゐた時の不斷の懊惱煩悶と、寺にゐた時の動搖のない佛を信じた安らかな心持とを比べて考へた。同じT自身である。また同じT自身の心である。それでゐながら、境によりまたは心の持ちやうに由つては、さうも變つて行くのである。Tは續いて三七日の參籠のさまを頭に繰返した。一心になりさへすればそれで好いのである。その他に神を祈るも、佛を祈るもないのである。それはTにもよくわかつた。自分の經驗ばかりではない、他人を見てもよくわかつた。參籠して神佛に祈つてゐる人達も決して一心を籠めた人ばかりではなかつた。面白半分ではないまでも、神佛を信する心の厚薄があつた。また淺さ深さがあつた。更に自分のその時の心持を考へて見ても、始終張詰めてゐる譯でもなかつた。一心になつてゐる時は、不治の病ももう何もなく、唯T自身の眞劍な心があるばかりであつたけれども、少しそれが何うかして、その眞劍な心が衰へると、不安の影や動搖の陰翳がすぐ萌して來た。

『神佛の靈驗などと言ふが、本當に、この眼病が治るだらうか。』

かうした疑惑がすぐ起つて來た。そして馬鹿な眞似をしてゐるとふ風に客觀した。若さの身で、または文化の今の世に生れて、科學の權威も少しは知つて居りながら、かうした迷信者と一緒に徒らに時を費してゐるのは愚の至りだと思つた。かう思つてはいけないのだと信じて居りながら、時にはさう思はない譯に行かなかつた。Tはやがて京都から故郷に歸つた。そしてまた元の不安な動搖の多い青年となつた。

しかしながら、そこで、一心に手を神佛に合せた經驗は、Tに取つては忘れられないものであつた。

Tはあの喧嘩のあつた翌日、早速その男達の群を脱して、自轉車はその手で質屋に入れたまゝで、再び廣い大都會の放浪者の一人となつたが、かれは不思議にもその深く佛に向つて合せた手が、またはその心が、その心の状態が、その眼前に蘇つて來るやうな気がした。

Tは街頭を歩きながら、絶えずそのY觀音大士を頭に浮べた。

Tは町から町を歩いた。また賑やかな四辻から四辻へと立つた。何處をさがして歩いて、かれは三日も四日もかれに相當したやうな職を發見することが出來なかつた。金はまだ少しは持つてゐるけれども、それをつかひ果して了つてはと思ふので、つとめてそれに觸れないやうにして、飲食も一日二食ですませた。ある夜は公園のロハ臺の上に寝た。夏の夜の露はしたゝかにかれの頭髮を濡した。

しかしTの胸に抱いた観音大士の像も結局は何の役にも立たないので、時には自からそれを弊履のやうに捨て、また再び元の不安な悲しいかれに歸ることが往々にしてあつた。さうした時には、Tは物質の重荷の上に更に精神の重荷を負つて、殆ど倒れるやうにして、夜の暗い塀に凭れかゝつたりした。時には、かれはあの男の群達のやつてゐる竊盜に均しき行爲をも尤もだと思ひ、更に深くMの言つた社會主義的思想のかれの心と共鳴して來るのを感じた。一日かれは焦々した心持で、賑かな街道を歩いた。

ある日は、郊外の黄く熟した麥畑に添つた野を歩いた。かれはもうすつかり絶望してゐた。何うすることも出來ない身の上だと思つた。それに、野にでも行つて、青い晴々した空でも見たなら、少しは氣がまぎれるであらうと思つてやつて來た空も、野も、新緑も、少しの慰藉をもTには與へずに、却つて勞れた心と體とを壓迫した。

かれは凄じい銃聲と一緒にブスブスと丸の中る音のする大きな射的場を後にした林の中に丁度來かゝつてゐるが、そのまゝ疲れたやうにその中に入つて、路を通る人達の眼から見えないあたりまで行つて、そこにどつかと腰を下したが、やがてこらへじやうがなく、仰向にばつたり倒れた。

兩手はかれの後頭部を押へた。

周圍には、新緑の影が日に搖曳して、處々に濃淡の縞を織り、その一部の影は、仰向いたかれの顔や

體の上にチラチラと動いた。涼しい風がサラサラと草藪や野花の上を通つて行つた。

ブス、ブスと射的場に丸の中る音は絶えず聞えた。

『あの丸が自分に中つて呉れたら、それは何んなに好いだらう。自から手を下さずに、また人に手を下して貰はずに、自然にあの丸が來て、ブスと自分の脳天に中つたら、それは何んなに好いだらう。それこそこの苦惱を、煩悶を、放浪を、または不幸な身を永久に救つて呉れるものである。』Tはふとかう思つた。

また國を出てから東京にやつて來たさまが一幅の繪卷物のやうになつてかれの頭を通つた。また海近い故郷の古い町や、遊女達の平氣で街頭を歩いてゐる通りや、父の生きてゐた時分住んでゐた小ざつぱりした家などが見えた。『この身が死んでも、可哀相と思ふものは誰もゐない。故郷の養父母は、一人で勝手な眞似をして自業自得だと言ふであらう。友達はその話を聞いて初めは悲しんで呉れても、やがては忘れて行つて了ふだらう。草が自分の墓の上に生えるであらう。』Tはかう思つて見た。否、かう思ふのは今日ばかりではなかつた。これまでに、さう思つたことは度々あつた。しかしいつも、『だから猶死なれない。さうした犬死は出來ない。』かういふ強い心があつてそれを引戻すやうにしたが、今日はもうその心も反響して來なかつた。かれは身を起した。

ふとかれの前を明るい綺麗な感じのする軽快な電車が大勢客を乗せて通つて行つた。

『さうだ……もうさうするより他爲方がない。途がない。死ぬより他何うすることも出来ない。日の暮れるまで、此處にゐて、そしてあのレエルに身を横たへる。……此處からあその路を行けば、あのレエルまではすぐだ。何の手間ひまも要らない。……轟と電線が唸つて、あの電車がやつて来る。……そして一瞬の後には、自分はこの世にゐないのだ。……この苦惱も、煩悶も、希望も、放浪も、飢餓も、絶望もないのだ。……さうだ、さうするに限る……』

かうTはちつとして思つた。何等かの心の反響を期待してゐたが、それはつひに何もやつて来なかつた。

野花が靜かに風に動いた。

『さうだ。さうしやう……』

再びかれは口に出して言つた。矢張反響はなかつた。

かれの眼の前には、夜が、暗い夜が来るのが想像された。もうかれは恐ろしい夜だとは思はなかつた。またその暗い夜の闇の中を、路をさぐりさぐりレエルの方へ下りて行くかれが想像された。涙も悲哀も何も彼も盡き果てたかれが想像された。つゞいて空を劈くやうにしてきこえて来る電線の唸りの音を耳にしたかれが想像された。

かれは急に身を起した。そしてかれは手を組んだ。そしてその組んだ手の力がぐつと體に喰ひ入るは

どの力を感じた時、大きな心の反響——竟に竟に來なかつた大きな反響が來た。また電車が通つて行つた。

六

草原から身を起したTは、ある暗示を得たやうに思つた。不思議にも大きな力がかれに來た。眞に不思議な心だ。入つて來た時とは丸で違つた心持であつた。かれは林の中を元の路へと出た。

かれは廣い原から、新たに開けたらしい町に行つた。そこにふかした甘藷を並べて賣つてゐる店があつたので、そこで二錢ほどそれを買つて、そして餓ゑた腹を充たしながら歩いた。

不思議にも、今まで思ひ出したことのない、また思ひ出しても行つて見ようとも思はない、また行つたとてとても逢つて呉れようとは思はなかつたBといふ人がこの近所に住んでゐることをTは思ひ出した。

ふと兩側の人家に目を注ぐと、百七十五番地と書いてある。そのBといふ人の住んでゐる番地は百二十五番地である。それは確かに覚えてゐる。と、つゞいてその大きな鬚の深い顔が思ひ出されて來た。そのBといふ人は、かれが田舎にゐた時、または京都の病院にゐた時、常に愛讀してゐた本の作者で、しかも去年の四月頃、その人はふと二三人の伴れと共にかれの養父の旅舎に來て泊つた。Tは長い廊下

で最初その人に遇つた。何うも見たやうな人だと思つた。念のため宿帳を調べて見た。しかしそこに書いてあるのは別の名であつた。變だと思つた。しかし、世間には似た人がいくらかもある。他人のそら似かも知れない。もつとよく見た上でなければと思つて、Tは曾てそのBの顔の出てる雑誌を土藏の中に行つてさがして見た。それは三年も前の雑誌なので、容易に見つからなかつたけれども、遂にかれはそれをさがし出した。そして用事にかこつけて、そのBの室に行つて見た。何うしてもBだ。かれの平生愛讀してゐる本の作者のBだ。かう思ふと胸が躍る。また雑誌を出して比べるやうにして見る。どうしてもBだ。……Bは矢張他の旅客のやうにかれの故郷の古い港町とそれからその附近にある名高い風景を見に來たのであつた。

で、たうとうTはBに逢つた。Bがその宿帳の匿名を取消した時には、Tは、だつて、何うしても先生なんですもの、それでもさうでないと思つて、この雑誌の口繪と合せて見ようと思つて持つて來ました。『かう言つて笑つて、懐にして來た古雑誌を見せたりした。Bは東京に來たら來いなどとTに言つた。扇に歌などを書いて貰つた。』

東京に出るといふ決心をした時にも、または東京に來た時にも、Bを思ひ出さないのでなかつた。しかしTはさうした人に縋りたくないと思つた。飽くまで獨立獨歩で行かなければならぬと思つた。他人の救助を乞ふといふことは何方から言つても精神を失つたことである。また自ら自己の價値を低くし

たことである。それに、あの時はあゝは、つても、果して逢つて呉れるか何うかそれも疑問であつた。で、Tは全くそれを問題外に置いた。

そのBがこの近所に住んでゐると言ふことは、不思議に感じられた。無論、今もそれに縋る氣はTには微塵もなかつた。またさうして苦しんでゐる自分をあらはに話さうとも思つてゐなかつた。しかし逢つて見たかつた。自分の汚ない扮装、すり減らした駒下駄、櫛の齒も入れない頭髮、それも氣になるけれども、兎に角訪ねて見たい心が強く起つた。

かれは番地を順ぐりにくつて見た。大きな門や垣が續いた。メリンスの被布を着た可愛い五つ六つの女の兒が遊んでゐたりした。深い植込の中から靜かに琴の音などが洩れた。

段々繰つて行つた番地は、路から路へ曲つて、漸くその數に近いく所にTは來てゐた。その同じ番地には、他にも二三軒家があつたけれども、TはすぐBの邸を見出すことが出來た。

邸の構もかなり大きく、いくらか壓されるやうな氣がしたが、縋るとか、救けを乞ふとかいふ欲する念がないので、Tは割合に心安く立關に案内を乞ふことが出來た。赤い顔をした肥つた婢が出て來たが、一度引込んでそしてすぐ案内した。

通された一間は、八疊の瀟洒な一間で、表の庭からも裏の庭からも新緑のすがすがしい色が座敷まで映つて入つて來た。『やアめづらしいな。』かう言つて何の隔意も置かないやうにしてBがやがてその姿を

あらはした。

一二時間前に草藪の中で悲觀したとは丸で違つた氣分にTはなつてゐた。縋るとか、救いを乞ふとか以外に、かうした隔てのない快活の言葉を聞くのをかれは嬉しく力強く思つた。元氣な張詰めたBの體や顔もかれにある力を與へた。

『いつ來たんだえ？』

『もう此間來たんですけれども、半月以上になるのですけれども、いろいろ生活の方の都合がありまして。』かう言つて、Tはそれとなく國を脱走して來たことなどを匂はせて、『知つてゐる國のものもゐるんですけれども、成るだけ世話になりたくないと思ひまして……』

『それは、さうだ。人の世話になつちや、一生頭が上がらないからな。何でも自分でやるが一番好い。自分さへしつかりしてゐるれや、世の中は何でもありやしないよ。世の中の方がくつ附いて來るよ。』かう言つてBはのんきさうに巻煙草をふかした。

『もう、職業は見つけたのかえ？』

『まだ本當には見つかりませんけれど……何うかかうか自分で見附けてやつて行くつもりです。』

『それが好いな。』

また巻煙草を性急に吸つて「君位の中は働くに限るよ。それも能動的に働くんだね。君自身から進ん

で働くやうなことをするんだ。……いやいやながらすることは駄目だよ。成るだけ此方から進んでやるやうな仕事をするんだね。それやね、まだ年が若いんだから、さう一概には言へないけれど、成るべく他人に使はれないやうな爲事を選ぶんだね。何うも人に雇はれたり何かすると、了簡のきまらない若いものは兎角卑屈になつて困る。』

『本當ですな。』

かう思つたTは、此間中やつた苦學生の辛い經驗を頭に浮べた。

Bはそれからそれへと快活に話した。年齢の相違とか、地位の相違とかは丸でないやうに……。またはかうした活ない放浪者などといふことは少しも思つてゐないやうに……。で、Tの故郷に行つた時の話や、名高い名所の話や、Tの好んで讀んでゐる本の作者の話や、人生の悲惨な話などが續いて出た。Bは巻煙草を吸つては棄て棄て、は吸つた。紫の煙がすうと長く明放した庭の方へ靡いて行つた。

それとなく聞いてゐるが、Tは段々Bの話に心を惹かれて行つた。Bの言葉の中には、思ひもかけず法華經の中の言葉が雜つた。一心といふことが話題になつた時には、Bは殊に力を籠めて話した。『一心！そこまで人間が達すれば、もう世間なんか何うでも好いんだ。全人格と言ふことは一心をあけて活動してゐることを言ふのだ。さうなれば、もう完全な自己で、世間の名譽とか貧富とか乃至は社會主義的階級とか言ふものは皆な無くなつて了ふんだ。皆なすべて平等だ。賤しきも貴きもありやしない。王侯貴人

の生活も吾々の生活も君達の生活も皆同じだ。少しも違ひやしない。世間では、これがわからないから、そこに達するまでの経験と深い痛感とをしないから、さうした離れた又は欲した心になることが出来ない。君は知つてゐるだらうが、クリストが、「求めよ、さらば與へられん。叩けよ、さらば開かれん。」と言つた言葉があるがね、あの言葉はかなり有名な言葉だ。また真理だ。苦しんだものでなければ言はれぬ言葉だ。ところが、佛教の原理はそれと正反對で、「求むるものは必ず失ひ、欲せざるものは必ず得」だ。何うだ、文句としても、思想としても正反對だらう。ところが君、深く考へると、これは同じなのだ。同じことを言つてゐるのだ。」

Tは急に、

『何ッて仰有いました。佛教の原理と言ふのは？』

『原理と言つては語弊があるかも知れないけれど、要するに、さういふ風なんだ。』求むるものは必ず失ひ、欲せざるものは必ず得』といふんだ。』

『求むるものは必ず失ひ、欲せざるものは必ず得……ですな。わかりました。』

Tは口の中でもう一度繰返して言つて、『面白いですな。本當ですな。』Tは苦學生の苦しい経験をまざまざと頭に浮べた。

Bはつゞけて、『だから、一心！ は肝心だ。僧侶の行をやると言ふことは、皆なそれなんだ。その一

心を得る修業なんだ。ところが、人間は誰でも一心を持つてゐるのだけれども、また時には一心になることが出て来るのだけれども、常にさうした張詰めた一心が出て来ない。折角その境を感じても、ぢきそれを失つて了ふ。そしてものだらけた心持になる。そして世のいろいろなもの、又は自分の中にある世間と同じ分子が、差別相即ち貴賤とか貧富とかそれから起る虚榮とかいふ心を起して、そして煩悶したり懊惱したりするのだ。』

『本當です、本當です。僕にもさういふ経験があります。』

かう言つたTはY觀音で一心になつた形を思ひ出さずにはゐられなかつた。Tはちよつとその話をした。

『さうか、君は眼がわるいのか。それはいかな。』

『別に晝間は不自由にもなりませんから、放つて置きますけれども……』

『それは大學なり何處なりに行つて見て貰ふ方が好い。大學には知つてゐるものがあるから、いつでも紹介してやるよ。』

『難有う御座います。』

Tは思はず涙の惨み出して来るのを覺えた。暫くしてから、

『しかし、京都でその宣告を受けた時にも、科學は萬能ではないと思つたのです。矢張人間が人間を

見てやつたことですから……。神や佛が言つたわけぢやないんですから。それで一時は絶望しましたが、さう思つて自分で自分をやつて行かうと思つてゐたんです。奇蹟といふことは御座いますからな。』

『あるどころぢやない。』

『現に、私などの小さな経験でも、Y観音で一心になつた時には、眼病の苦痛なんてことは忘れて了ひましたから。ところが、先生がさつき仰つたやうに、それが長くつゝかない。その一心が長くつゝかない。それだから駄目でしたんですけども……』

『さうだ、さうだ……。確かにさうだ。そこに宗教の奇蹟と言ふことがあるのだ。神祕があるんだ。人間は人間だけでは、この生を終つて見なければ、この人間のことはわからない。従つて失望することは。唯一心でさへあれば好いんだ。そしてそれがつゝきさへすれば好いんだ。』

『本當ですな、先生のお話はよくわかりました。』

つい話につり込まれて、Tは苦學生の群の話まで持ち出した。

Bは熱心に聽いてゐるが、『それでは、やつぱり搔つさらひなんかをやるんだな。……さういふ奴等だから、あゝして頭を下けてづうづうしくやれるんだ。魂をももう持つてゐないのだ。自分で自分の魂を亡してゐるのだ。いや、世間にはさういふのが澤山あるよ。自然主義をはき違へたデカダンなども、さういふ風に魂を玩弄する人達だよ。しかし、デカダンには玩弄にしながらまだ魂が残つてゐる。エルレイ

ンなどさうだ。』

『實際、あゝいふ群には呆れて了ひました。……』

『さういふ群にはなるたけ入らない方が好い。まごまごすると、此方の持つてゐる魂を持つて行かれました。……だから成るたけさつき言つたやうに、自分の進んで働くやうな、また多く求めないやうなものを作る方が好い。』

『本當ですな、よくわかりました。』

かう言つてTは頭を下けた。

Tは遂に遂に自分の窮境は訴へなかつたけれど、Bを訪問したといふことは、かれに取つては大きな事實であつた。かれは一時間、それ以上もゐてそして暇を告げて歸つて來たが、今日林の中にある時とは違つて、心には活氣が満ち、胸には生々した生の力が漲り渡つた。林の中での最後の大きな反響、それからつゞいてBの訪問、それに何か不思議な力が働いてゐるやうなのをTは感じた。

七

その翌日の午後、Tはだらだら坂になつてゐるある小さな通りを歩いてゐた。
ふとある店が眼に附いた。

それは大勢屑を選つてゐるやうな家であつた。中年先の女だの、小僧だのが二人も三人も並んで、一杯積んだ紙屑の中に埋つて、好い紙は好い方へ、わるい紙はわるい方へと何か話しながら選つてゐた。かれはある尊い大きな力が、不幸な自分のために特にある暗示を與へて呉れたやうな気がした。『さうだ。……この商業は買つて貰ふのではない。受身ではない。此方から錢をやつて向うから買つて來るのだ。此間中、やつたのとは、商賣の形が正反對である。同じ賤しい生活のたつきだとは言ひながら、買ふのである。錢を出してそして買ふのである。それに、求める心が多くない。無理に賣つて貰はなくつても好いのである。さうだ。これをやつて見よう。』

かうTは思つた。しかしこれには猶一二の動機があつた。かれは國にゐる時分から、身を勞働者と同じやうな境遇に置いた。筒袖で働くことを何とも思はなかつた。それに、性質としても、社會の階級と言ふものに區別を置かなかつた。もう一つは田舎のかれの友達に屑屋がゐた。屑籠をかつぎながら、手帳を懐に入れて、のんきに俳句などを詠んで歩いた。その友達から、屑屋の面白い商賣なのを聞いたことがあつた。

かれはづかづか入つて行つた。

店で紙を選つてゐた中年の女や子供は手をとめて、じろじろとかれを見た。五十先の主人は店の帳場で、頻りに何か算盤を弾いてゐたが、怪訝さうな顔をしてTを迎へた。

『少しお願ひがあるんですが。』

『何ですか?』

眼鏡越しに主人はTを見た。

『此方で、屑屋はさせては下さらないでせうか。』

『屑屋ツて、何う?』

『僕が屑屋をして、買つて廻つて歩きたいと思ふんですがね。』

主人はまたぢつとかれを見た。暫くは返事もしなかつたが、

『貴方がやらうツて言ふんですか?』

『さうです。』

かう言つて、其處に腰を懸けたTは、自分の國を出てからの話を手短かにした。屑屋の主人は始めは面倒臭さうに、胡散臭さうにして聞いてゐたが、段々それに惹き込まれたやうにして、後は一々點頭いて見せた。『買つて貰つて此方で金を貰ふんでなくて、此方で金を出して買ふんだから面白い商賣だと思ひまして。』とTが言つた時分には、中々面白いことをいふ書生だといふ顔をして笑顔をTに見せた。

『まア、さういふ風に取りれば面白い稼業かも知れないが、あまり好い稼業でもないからな。』かう言つて主人は笑つて、『それはしかし、國を出て、知人もなくつて困つたらう。やるには鑑札を受けたり何か

してちよつと億劫だが、やるなら、世話して上げて好う御座います。』

『何うか願ひします。』

主人はその稼業について種々な話をして呉れた。TはまたTで、國で屑屋の友達を持つてゐたので、その話がかかり細かいところまで飲み込めた。此方に信用さへ出来て来れば、店で皆な元手を出して呉れるので、買ふ金には不自由をしない話などもそれとわかつた。『なアに、屑屋だから、成るだけ安く買ふやうにするんだね。先方だつて、元が不用なものだから、安く言つたつて別に何とも思ひやしないから……唯、かうした稼業でも、仲間の競争があつてな。中には成だけ分割よく買つて、好いお得意を拵へるものがあるからな。そこは注意しなければならんけれど……なアに少しやつて見ればわかるよ。』主人は猶ほそれからそれへと種々な注意を與へた。

『食つて行けるどころぢやない。巧者にやれば、五人も六人も食はせてゐるものがあるんだから。』奥にゐるた上さんに向つて『なア、喜作なんか大したもんだな。毎月五六十兩も稼ぐな。』

『え?』突然に聲をかけられた上さんは奥から顔を出した。

『何だ、お前、聞いてゐなかつたか、この書生さんが屑屋をやりたいつて言ふからな……喜作なんか毎月五六十兩も稼ぐつて言つたのよ。』

『この書生さんが、屑屋をするんだつて……』始めてその話を耳にしたやうにして上さんはめづらし

さうにしてTの顔を見た。

『書生さんの屑屋さんはめづらしいわな。』

『本當ですね。……出来るかしら? 出来てもぢきに飽きるでせうね。』

『飽きたら、また、もつと好い仕事をやるさ。一生屑屋をやつてゐなくつたつて好いんだから。』

かう主人は笑つた。『二月、自分が獨立して食ふ位のこととはわけありませんか。』とTが續いてきくと、『それもお前さんの了簡一つだが、働けば、月十二三兩位かせぐのはわけはないさ。』

Tはいろいろと頼んで、始めて生き返つたやうな氣がして其處から出て來た。始めて自分の立脚地をさがし出したやうにかねは思つて勇氣が出た。それにしても不思議だとTは思つた。そこに來て、ふとした考の起つたのも、入つて行つた家の主人夫妻が深切で見知らずの自分にいろいろ世話をして呉れやうと言ふのも、場合によつては一臂の力を假して呉れるとまで言つて呉れたのも、皆なそこに心の不思議の連絡があるやうに、林の中の最後の大きな反響や、ゆくりなく訪ねて聞いて來たBの言葉などといてゐるやうに思はれて、Tは再びY觀音で參籠した時のことを頭に浮べずには居られなかつた。

Tは深く考へながら歩いた。その體には生々した心が滿ち溢れてゐた。世界が一瞬間の中にすつかり變つて了つたやうに感じられた。今まで絶えずかれを威嚇し壓迫した電車も、自動車も、暢氣さうに満ち足つて生活してゐる人達も、美しい着物を着た女達も、何も彼も皆なかれに向つて好意を持つて笑つ

て迎へた。

八

Tは其處で借りて來た屑籠に秤を入れて、それをかついで、尻を端折つて出かけた。

『旨く似合ひますよ。』などと屑屋の上さんはそれを見て笑つた。

山の手の垣の多い静かな通りに來て、その屑屋のやつてゐるやうな懸聲を始めてかれのやつた時には、流石に年若い身の顔の赧らむ様な心持がして氣がひけた。悲しいやうな氣がした。辛いやうな氣もした。かれは十分にその懸聲の出來ないのを感じた。

然し誰も知つてゐるものがあるのではない。また知つてゐるものがあつたとて、少して愧る處はない。自分の獨立のためである。また自分の生命のためである。死にまで到達してそして辛うじて贏ち得た心の境である。かう思ふと、悲しいとか辛いとか思つたことがすぐ打消されて、年の若い身でかういふ稼業をして歩いてゐることは、或は富貴の子弟が車や馬車で學校に通つてゐるよりもつと貴いことであるかと思はれた。『屑い、屑い——』かうかれは聲を張上げて流した。

最初、かれを呼込んだのは、中流階級の柴垣を取廻した家であつた。そこでは若い庇髪の細君が、屑の他に、新聞を束にしたやつを持ち出して、『新聞は今いくらなの？』かう白い顔に笑をたへて訊いた。

かれは今朝屑屋の主人から聞いた相場を言つて、そして不馴な手附きで、そしてそれを秤にかけた。大抵な屑屋は、さうした家に秤などを準備してゐないのを好い事にして、秤の紐を持ちながら掌を秤に押しつけて、目方をごまかすものが多いさうだけれども、またさうすると百目位はちき違ふさうであるけれども、現に、今朝屑屋の主人がその秤のはかり方に種々あるのを教へて呉れたけれども、かれはさういふことをする氣にならないので、正直に秤をかけて、目方だけの金をそこに並べた。

『思つたよりあつたのね。』

かう言つて細君は莞爾した。

次に呼び込んだ家は、屑が少しあつたばかりであつた。混雜した家で、かれに應對してゐたのは四十先きの女であつたが、若い娘だの子供だの騒ぐ氣勢が賑かに奥でした。品のよいお婆さんの後姿なども見えた。

『あまり見かけない屑屋さんだね、お前さんは——』

かうその女は言つた。

『まだ新米ですから。』

『大抵、屑屋さんは、年寄が多いがね。お前さんのやうな若い人はめづらしいがね。さうかえ、まだ始めたばかりなの？』

かう言つてじろくとかれを見て、

『また寄つてお呉れよ。家は大勢だから、ぢき屑がたまるから、一週間か十日目位にはあるよ。』

『難有う御座います。……他にも何か空欄か新聞のやうなものが御座いましたら……新聞は成るだけお高く頂きますから……』

『また、その中さがして置くよ。』

それからそれへとかれは歩いた。かれは此前やつた苦學生のはみがき賣の時に比べて、何んなに樂な愉快な本當な稼業と言ふことを感じたかわからなかつた。この前の時には、かれは到る處で迷惑さうな顔と怒つた顔と不愉快な顔とに逢つた。そしてつまらなく歎願したり口説いたりした。それから比べたら、この自由は！ この快さは！ 何處に行つても見るこの笑顔は！

かれは今にして始めて本當の生活に觸れたやうな氣がした。

自分の持つた不平、不満、乃至は苦惱、煩悶、さういふものに對しても、かれは考へ方の一變したのを覺えた。今迄は少くとも自分は無理をしてゐた。此方で盲目な欲望に捉はれながら、その欲望の達せられないのみに懊惱した。非常に不自然であつたのである。また非常に思ひすがりすぎてゐたのである。あの苦學生の群がその好い例だ。口には立派なことを言ひながら、所業としては竊盜にも均しいことをしてゐるのである。さうしてあゝした魂を亡くしたやうなことをしてゐるのである。かれは平生愛

識してゐるあの作者の青年の悲惨な心に對する共鳴も、矢張さうした淺薄な心で共鳴してゐたことを感じた。

『屑イ、屑イ。』

かうかれは流して歩いた。

まだ半日も歩かない中に、かれはその携へて來た大きな籠の既に一杯になるのを見た。歩いたところと言つても、苦學生のはみがき賣の時に歩いた五分の一もまだ歩かなかつた。しかし今日は先づこれだけにしやうと思つた。かれは最初の日の成功に勇みながら歸つて來た。

屑屋の主人は莞爾してTを迎へた。

『これは、新米にしちや出來が好い。』かう言つて、古新聞は古新聞、屑は屑と目方にかけて、そして銀貨をチャラ／＼とかれに渡した。

『これぢや、小さな車を借りなければならぬかも知れませぬね。』

かうTが莞爾しながら言ふと、

『まア、さう乘氣になつて慾を出さずに、これで、少しの間やつて見る方が好い。これだけ毎日持いても、君一人位食ふには食へるんだから。』

『それはさうですな。』

『慾をあんまり出さん方が好い。君だつて、屑屋を一生するつて言ふ了簡もないだらうからな。』
『本當です、本當です。』とTは言つた。

『なアに……車でも、金でも、儲るものがあつた時は、いつでも貸してやるから……落附いてやるが好い。』

『難有う……』Tは其處にも本當の人の深切な心のかくれてゐるのを見た。上さんも出て来て、『持けたかね、さうかね。これだけ買つて來たのね。お前さん、見かけによらない持ぎ人だな、中々。』かう笑ひながら言つた。Tはこれに勇氣づけられて、それからその近所に下宿する手頃な貸間を捜すべく出かけた。

九

Tはそこから餘り遠くないところに、電気つきの二階六疊の間を捜して借りたが、一月二月経つた後には、今までの借蒲團も自分のものにし、火鉢なども買ひ、安いではあるが茶器や藥罐やセト引の洗面器なども買つた。かれはもう決して困ることはなかつた。また、家の人達もかれが屑籠をかついで外を流して歩くものとは知らなかつた。Tは毎朝、腰をかける近所の飲食店に行つて、汁につけ物の安い朝食をすまして、それから屑屋に行つて大きい籠と秤とをかりてそして出かけた。

そしてその商賣道具も、段々自分のものにするやうに、利得のあつた時にいくらかづゝ主人に納めた。

かれに對する主人夫妻の信用も段々深くなつて行つた。外ではまた得意の家が殖えて行つた。

かれは其時分になつてから、始めて國の方へ消息を書いた。自轉車はまだ質屋に入つたまゝになつてゐるけれども、かれはそれをもその中何うにかして出して、送りかへす積りである。かれは不思議にも、此頃は國の養父母についても、もう以前のやうな反抗と憎惡とを持たなくなつた。養父にしる、養母にしる、先きには先き相應の理由があつてそれでさういふ冷めたい空氣になつて行つたのである。自分が不幸であつたのは、不幸なるべく自分が生れつて來たのである。養父は叔父ではあるが、本當の親ではない。ことに、養母はあかの他人である。それに本當の父としてまたは母としての恩愛を望むのは、望んだ自分が間違つてゐるのである。決して怨んだり嘆いたりすることはない。かうTは思ふやうになつた。Tは稼業の思ひの外に早く濟んだ時だの、または雨が降つて出られない時などには、家に籠つて本を讀んだり、または雨を衝いて、歩いて池を廻つて、Uの圖書館に行つたりした。ある時は讀書に興味を惹かれて、夕飯をバン半斤ですまして、館の閉ぢるまでゐて、歸りの闇がよく見えないので、山から灯の通りに出るのに非常に困難を感じたことなどもあつた。

この頃の和らいだかれの心でも、一度思ひがその眼病のことに及ぶと、身體の燃えるやうな激情を覺えずにはゐられなかつた。心の苦しみは苦しみを經るにつれて、却つて心が鍛鍊されて來るが、それはこれまでの自分の經驗でもわかつてゐるが、體の病ばかりは何うすることも出來ないのをかれは痛感し

た。その問題に打突ると、Tは世界のドン底から来るやうな重苦しい深い大きな悲哀に身を蔽はれた。

その時には屹度京都の病院で宣告を受けた時の絶望と焦燥とが繰返して眼の前に浮んで来た。體中がくわつとして来た。父親が、時には戀ひ焦れてその面影を忘れかねる温情の父親が憎く憎くなつて来るのを覺えた。かれの眼病の原因は父親にあるのであつた。父親の遊蕩の結果であるらしい宣告を病院の博士は宣告した。その時には平生大事にして、香花を供へるのは自分ばかりだと思つて、朝夕禮拜を怠らなかつた父親の位牌も、投げつけて了ふか、燃して焼いて了はうかと思ふほどの激情をかれは感じた。

Tはをり／＼黙つて雨の降り頻る屋根に向つて、手を拱いて、深く深くその問題に沈み込んだ。しかしいくら考へて見たところで、それを何うすることも出来なかつた。餘りに深くそれに執着すると、毎日の稼業——自分の本當の生活のためにやつてゐる、またやらなければならぬ稼業すら厭になつて行くのを覺えた。かれはつとめてそれを押しのけて、『屑イ屑イ。』と垣に添つて流して歩いた。

郊外にあるのBの家には、其後一月に一度位づゝ出かけて行つた。最初に暗示された經驗以來、かれはBの思想や感情について深い共鳴を感じた。Bは不可解の解、不可思議の思議について常に話した。Bは宗教の話をよくした。

屑屋になつた話は、Tは容易に打明けなかつたが、ある日、ついその話に心を引寄せられて、それからそれへとその話をBにした。Tは何も彼も隠すことが出来なかつた。眼病の原因の話もした。父親

の遊蕩の話もした。

Bは非常に動かされたやうに見えた。

『見上げた、實に見上げた。……君は豪い。さういふ志が即ち宗教だ。悲惨だけれども、それは悲惨だと思つてはいけない。また、その君の不治の病氣を不治だと思つてはいけない。況んや父親の位牌を投りつけるに於てをやである。君、君は維摩經を讀んだことはないか、ないだらうな。讀んで見給へ。それにはちやんとそのことが書いてある。一體、維摩經と言ふ經文は、維摩居士の病に臥してゐるのを文殊菩薩が訪問に行く結構で書いてあるものだが、私の考では、あの經文は解脱が中心だが、その解脱は一番むづかしい病に對する解脱を説くことをその主なる内容にしてゐる。であるから維摩は言つてゐる。癒ゆることの出来る病は身に着するより起る。不治の病は、これ病にして既に病にあらざるなりと言つてゐる。實際、君、さうぢやないか。我々は五十年の命を持つてゐる。しかしそれだけ経てば、誰でも一度は死ななければならぬのである。さうすれば我々人間のすべては、矢張は死ななければならぬ不治の病にかゝつてゐると同じではないか。ちつとも違はないではないか。病氣にかゝらないと言つても、人間は明日死ぬか何うかわからないではないか。今日僕が生きてゐても明日は死んでも僕は此世にゐないかも知れないのだ。そこだ。そこを考へなければならぬ。我々はさういふことに頓着してはならない。孔子も言つた通り、朝に道をきき夕に死するも可なりで、唯、人間として生れて来た道を本

當にやりさへすれば、それで明日死んでも好いんだ。明日死んでも遺憾はないのだ……』

『さうですな。』

かう言つたTは深く考へるやうな顔の表情をして手を組んだ。

『そこが、その微妙な處が世間にはよく解らないんだ。空想だと思ふんだ。……しかし、それは實際心の事實なんだから……』BはTの方を見て言つた。

Tにもさうした心のさまから考へて見ると、Bのいふことは事實として肯げがはれるやうな氣がした。心の千變萬化は實に複雑してゐる。自分でもわからないやうな氣がする。そしてそのわからないところに不可思議とか、神祕とか言ふ深い境があるやうに思はれる。Tは手を更に深く組んで考へに沈んだ。

『その心理の不可思議に入つて行くから、だから、佛教などでは、因縁とか、三世とか言ふものを説いてゐる。唯、徒らに、荒誕にそれを説いてゐるのではない。ちやんと不可思議の、異常の心理を基礎として説いてゐるのである。だから、君のさうした病氣も佛教で言はせると、前世まで入つて行かなければ説けない。實際、世の中の現象には、今の世だけは説けないやうなことが非常にあるからね。そしてまたその矛盾を科學思想で言つたやうに單純に解釋してすましてゐられないやうなところがあるからね。』

『本當です。本當です。』

Tはかう早口に言つた。

『だから、さうした境から成るだけ出るやうにするのが肝心だ。君にしても、その病氣などは措いて問はないことにする。さうして眞劍に自分の道を行く。勞れず、疑はずに、且つ一心に……さうすれば、君がY觀音で參籠した時と同じ心に絶えずなつてゐることが出来る。従つて、病氣など、いふ憂悶から解脱することが出来る。』

『わかりました。よくわかりました。』

かうTは頭を下けた。

Tはさうした思想を書いた書籍、古人が古から矢張自分のやうにして苦しんだことを書いた書籍、さういふ書籍の名を手帳に記した。そして暇を告げて歸る道すがら、深い神祕の中に、または自分の經驗した異常の心理の中に、ちやんと自分の行く道がしるしづけられてあるのを思つた。觀音大士の尊像がまた眼に浮んだ。Tは思はず合掌した。幼ない時、父母に伴れられて行つた大きな御堂の香烟に包まれた崇嚴なさまが眼の前にチラついて動いた。

それから二月三月経つて、かれは自轉車を出して、漸くそれを國の方に送り届けた。國からも、段々感情が和らいだやうな手紙が來た。無論、それはかれの持つてゐたものばかりではあつたけれども、それでも本やら雜誌やら着物やら夜具蒲團やらを送つてよこした。野はもう秋で、常によく散歩する大

きな祠の境内の紅葉は、染めたやうに美しく夕日に染えた。

かれはその時分、もう一度と思つて、またそれも東京に出て来る動機の一つであつたと思つて、もう醫師なんか診て貰はなくつても好いやうな心の状態ではあつたにも拘らず、或日の朝早く出かけて、大學に行つて、K博士の診察を乞うた。

博士の要求で、それから猶二三度大學病院の長い廊下にかれの姿は見えたけれど、しかしその診断は矢張京都で見つたものと同じであつた。頭の方から來てゐる眼病であるので、これがこの位ですんでれば好いが、いつ何うなるかわからないといふやうな口吻であつた。しかしかれは最早京都の病院で感じたやうな烈しい絶望と焦燥とには襲はれなかつた。

かれは圖書館に行く度に、さうした思想を書いた古い本をさがして、わからずなりにもその難かしい昔の文字を辿るやうにして讀んだ。

しかしTは稼業を怠らなかつた。雨の降る日の他には、かれはいかなる日でも出かけた。屑屋の主人夫妻の信用は益々厚くなつて、今では金でも車でも何でも貸して呉れた。今年の秋は、雨が降つて、稼業も思ふやうに出来なかつたけれど、ゆくりなき利得があつて、生活は、人生はさう絶望したものではないといふことを感じた。

金のある時には、それをかれは路傍の乞食などにわけてやつたりした。

ある日、買つて來た屑や饅や新聞を屑屋の店に持つて行つて休んでゐると、其處に、黒い僧衣の色の褪せたのを着た五十先の鬚面の托鉢僧が『オウオウ』と言つて其前に立つた。

Tは立つて行つて、小錢をその鉢の中に入れてやつた。

僧は、『オウ、オウ』と鈴を鳴らして讀經して行つた。

それを見てゐた上さんは笑ひながら、

『Tさん、大變後生願ひになりましたね。』

『いゝえ、さういふ譯ぢやないんですけども、何うしてか、私は昔から、あゝいふ坊さんを見ると、やりたくなるんですよ。』

『あれは坊さんでも何でもありませんよ。乞食ですよ、僧衣を損料で借りて來て、商賣にして歩いてゐるんですよ。』

しかしTには、その笠の中に、または都會の塵埃の中に、聖者がさうして尊い教を衆生のために垂れてゐるやうに思はれた。今日に限らず、Tはさうした光景を見ると、湯仰の念に促されて寄つて行つて鉢の中に錢を投げ入れた。秋の晴れた日の空氣の中に、小さな佛像を無數に背負つて、周圍に大勢の子供を集めて鉦を鳴らして歩いてゐる僧の光景などは、ことにかれにかれの前世を思はせずには置かなかつた。Tは心の中で合掌した。

N の水死

—

博士Kが重い病を得て床に就いたのはもう五六ヶ月も前であつた。一時いくらかよくなつて庭などを散歩するやうになつたが、それもほんの僅かの間で、今では何うすることも出来なくなつた。あらゆる大醫も皆々匙を投じた。食ふものも少しも咽喉に通らなかつた。大きな立派な邸宅も、數寄を盡した瀟洒な庭も、仲間の博士達に羨まれる富貴も、世間で誰も知らないものもないかれの功業も名譽も、死に面しては何の役にも立たなかつた。一尋常人と同じやうにかれも死んで行かなければならなかつた。

博士の妻の治子は、もう四十を越してゐたが、それでもまだ其の美しい面影は何處かに残つて、總領の娘の今年十九になるのと一緒に町などを歩くと、姉妹ではないかと疑はれる位であつた。それに平生派手づくりで、髪などを亂したことはない上に、小柄で、瘦削であるのが年よりも一層若く美しく見せた。博士の家庭は、つひぞこれまで世間の口の端に上るやうなことはなかつた。總領の娘、あとは男の兒

が二人、平和で、圓滿で、嬉々とした聲は常にあたりに満ちた。母親と娘と睦しさに琴を合せてゐる氣勢なども、ひろい邸の庭の垣を通して路行く人達の足をとゞめた。

夫婦の仲の好いのも、友人間に評判であつた。『惚れ合つた中と言ふものも、後には餘り役に立たなくなるものだが、K夫婦ばかりは不思議に仲が好いよ。あんなのはめづらしい。』などと誰も彼も言つた。かれ等の家庭には、決して他から女が人知れず入つて來るといふやうなことはなかつた。博士は堅かつた。博士は一意その學問と研究とに熱中した。

しかし、博士は何方かと言へば、沈黙勝にしてゐる方であつた。友人と話をする時にも、極めて口數の少い方で、見やうによつては、何か隠された煩悶が胸の中に深くたゞまれてあるのではないかと思はれた。五十を越した頃から、急に頭髮も白くなり、顔の皺も段々深く刻まれて行くのが眼に附いた。

二

急に悪夢に襲はれたやうにして病床の博士は聲を擧げた。

『N君、N君！』

暫くうとうととしたと思ふと、『僕がわるかつたのだ。僕がわるかつたのだ！』かう手で拂ひ退けるやうにして、

N の水死

『N君、N君!』

傍に侍してゐた治子は、

『もし、もし、何うかなさいましたか?』

かう言つて呼覚ますと、

『ウム……』

と言つて、博士はほつかり眼を明いた。そして無氣味さうに四邊を見渡した。瘦せて骨立つた體には眼が鋭く光つた。

『あ、お前がそこにゐたのか?』 間を置いて、『何か言つたか?』

『何だか、大變に苦しさうでしたから。……何か夢でも御覽になつたんですか?』

『ウム。』

『Nさんの名を呼んでゐらした。Nさんの夢でも御覽になつたんですか?』

『Nが来た!』

かう言つて、其處に治子が坐つてゐるのを見るに堪へないやうにして、そのまゝ向うを向いて了つた。

ある時は長い間博士は治子を捉へて昔の話をした。勿論、それは今よりは少し前で、『俺も今度は駄目かも知れない。』などと言ふ頃であつたが、これまでつひぞそんな話をしたことがないにも拘らず、また

さういふ話が出る時には、いつも中途から別の話にしてふのが常であつたにも拘らず、その時は種々と詳しく其時分の話をした。『あの時分は、まだ若かつたなア。』などとも言つた。いろいろ思ひ出して來ると悲しくなつて來るといふやうに、後には博士の眼には涙が光つた。

『俺も樂な一生ではなかつた!』

悵然として、

『それは世間的には、俺もいろいろな事をして來た。國のためにもこれでも盡したつもりだ。俺の一生は徒爾ではなかつた。Nのやる爲事も俺が代つてしてやつた。』

『さうですとも……』

『お前も泣いたつけな……あの時——』

かう博士は言つて、その遠い昔の悲しいシインを思ひ出すやうにした。

一時間ほどして岸に漂着したNの死屍、蒼白い肌、尖つた鼻、緋の浴衣がひたと體にからみ着いてゐたさまを、今でもかれ等は歴々と眼に浮べることが出來た。若い美しい治子は身も世もないやうにその死屍に取り縋つて泣いた。かれはその傍に立つて暗い顔をしてじつとその死屍を見詰めた。

弓弦を引いたやうなあの美しい海岸、靜かに打寄せて來る波、靡くやうに緑を拖いてゐる松林、そこには眞紅のなで子が到るところに咲いてゐて、それを治子は探つてよく髪に挿した。少しくほんだとこ

ろには、綺麗な清水が湧き出してゐて、そこには村の娘達が桶を天秤で擔つて、夕暮などに大勢やつて来てそれを汲んだ。博士とNと治子とはよくそのあたりに立つて、もえあがるやうな夏の夕暮の雲を仰いだ。

その雲の美しかつたことは、今でも博士の眼に歷々と見えた。治子の父親は、矢張昔の學者であつたが、そこに小さな別荘を持つてゐて、夏は娘を伴れてよくそこに出かけて行つた。

治子と結婚した後も、その別荘は矢張舅が持つてゐたけれども、博士はつひぞそこに行かうとはしなかつた。治子が行かうと言つても、『いやな記憶のあるところだから、』と言つてかれは竟にその勧めに應じなかつた。二十年ほど前にその別荘は遂に賣られた。

『Nは好い男だつた。』

『さうですね。若くつて、氣の毒でしたね。……今、ゐれば、もう餘程いろんなことをなすつてゐらしたでせうに……』

『氣の毒だつた！』

博士は顔を暗くした。

餘りNの話をすることが多くなつたので、治子は、

『此頃は何うしてかNさんのことばかりおつしやいますね。』

『でも、親友だつたんだから。』

『それはさうですけども、餘り亡くなつた人のことなんかお思ひにならない方が好う御座んすよ。』

『でも、思ひ出されて來るんだから、何うも爲方がない。』

かう言つたが、すぐ言葉をついで、『昨夕もいろいろとNのことを思つた。』

『氣味がわるいから、もうおよしになる方が好う御座いますよ。』

『治。』

急に改つたので、

『え？』

『お前は俺とかうして一生を送つて仕合せだつたかな？』

『え、仕合せでした……』

『僕等の一生は幸福だつたかな？』

『幸福でした。』

『さうかな、お前は幸福だつたかな？』

じつと考へて、口を歪めて、

『俺は辛かつた。』

『さやうでせうとも……男にはいろいろ女の知らないことが御座いませうから。』

『……………』

何か言はうとしたが、よして、

『Nと一緒に一生を送つた方がお前には合せであつたに相違ない。』

『そんなことはありません。』

『いや、さうだ……さうに違ひない。』

『何うしてそんなことを仰有るんですの？』

『あの時、お前の泣いた顔は、未だにはつきりと眼について見える。』

『だつて、そんなことを仰有つたつて、しやうがありやしません。Nさんはお亡くなりになつたんですもの。……もう、そんなことを考へるのはおよしなさいまし。餘り考へると、體に觸りますから。』

かう治子はやさしくとめた。それにも拘らず博士は猶深くその時のことを思ふやうに見えた。

三

此頃は治子にも不思議にその遠い昔のことが頻りに思ひ出された。つひで今までこんなことはなかつた。それはNが溺死した時には、身も世もないやうにかの女は泣

いた。殆どこの世も何もないやうに泣いた。つとめて押へても押へても何うしても涙が出て来た。それも道理であつた。結婚の約束こそしてなかつたけれども、かの女とNとの間には、戀愛状態に近い空気がいくらか出来てゐて、そこにその夏三人して行つたのも、Nと二人だけでは親達も許さないし、世間もうるさいので、それで、Nの親友のKと一緒に行くことになつたのである。かれ等は暑中休暇の一月を静かにのんきにそこで暮すつもりであつた。

その頃の治子は美しかつた。青春十九歳、女子教育の未だ今日のやうに盛んな頃ではなかつたけれども、父親が學者であつただけに、かの女は早くからお茶の水に入つて、當時の娘達に比べては、學問もあり、氣分も開け、色彩も濃やかであつた。Tさんの嬢さんと言へば、若い角帽の群の中にもかなり評判に立てられてゐた。

治子は今でも思ひ出すことが出来る。その世離れた靜かな海岸を、撫子の咲いてゐる松林を、清水のあるところからだらだらと濱へ下りて行く路を、碧い湧きかへるやうな海を、少し離れたところに島があつて、そこに住んでゐる漁師のジツクザツクした屋根から夕暮毎にかすかに海に這つて行く暮煙を、半島を隔てた岬の鼻にかすかに光る燈臺の火光を、または夕暮の濱の散歩から歸つて來ると、松林の中の別荘にほつとり灯がついてゐるさまを。

かれ等は三人してよく磯を散歩した。或は朝に、或は日中に、或は夕暮に。……日中にはかの女も大き

な麥稈帽をかぶつて出かけた。磯にはいろいろなものが打寄せられてあつた。夫婦貝、小豆貝、時には遠い海からはるばる流れて來たらしい椰子の實などもあれば、難船した舟の遺物らしい器具などもあつた。Nは學科の工科であつたに拘はらず、Kとは違つて、文學が好きで、レグラムなどを懐に入れて、ロマンチックの小説の話などをよくかの女にしてきかせた。ボウルと芥ルジニイの話などは中でも殊にかの女の心を沸立たせた。かの女は今でもその端麗な、色のいくらか青白い顔と、隆い鼻と、靜かなしかし何處かに貴族的なところのある姿をはつきりと思ひ出すことが出來た。

時には餘り暑いからと言つて、男達はサル股一つになつて、岩蔭に靜かに湛へてゐる海にザンプと飛び込み、白い肌を碧い波間に巧みに動かして向うの岩まで泳いで行くのをかの女は笑つてじつと見てゐたりした。遊泳にかけては、Nも下手ではなかつたけれども、しかもKの縦横自由た何處までも泳いで行くのには及ばなかつた。あんなところまで人に思はせるやうなところまでKは平氣で泳いで行つた。

Kはあがつて來て、

『あなたもお入いんなさいな。』
などと言つた。

Nと二人きりならば、泳いで見ても好いやうな氣がしたことであつたことを今でもかの女は思ひ出すことが出來た。その世離れた岩蔭の海、漁師すらも滅多にやつて來ない海、そこで二人で泳いだなら何ん

なにロマンチックだらうなどとかの女は思つた。

しかし、かの女はKを決して邪魔とは思つてゐなかつた。かの女はKを無邪氣な好い人だと思つた。それに學問が出來て、深切で、篤實で、厭味がなくつて、Nにも畏友視されてゐる形が頼もしかつた。

Kはいつも黙つてゐるか、でなければにこにこしてゐた。

それでも何うかすると、NとKとは議論をした。その時には、あの沈黙勝の人の口から何してあゝした數理的な確乎とした議論が出るかと思はれるやうに、センチメンタルなロマンチックなNの議論を壓倒した。『だつて、さうばかりは言へない。一に一を加へる即ち二ばかりでは、餘りに殺風景すぎるぢやないか。Nは終にはこんなことを言つて笑つて議論をよした。』

それでも治子がNと二人だけで、松林の中や、磯や、または裏の小山に登つたこともないではなかつた。勿論、さうした時にも、二人はまだ戀そのものについては話したこともなければ、觸れて見たこともなかつた。『Kさん淋しがつてゐるでせうから、もう歸りませう。』かう言つては歸つて來た。さういふ時にはKはいつもほつねんとして別荘の縁側にねころんで書などを讀んでゐた。

別荘にはその頃雇つた村の中年の女がゐた。村の女と言つても、純然たる漁師の鼻ではなく、若い時は近い町の工場に行つたり、男を知るやうになつてからは、町の小さな店の主婦となつたやうな女であつたので、何處か世馴れて、客の世話、炊事の世話なども上手で、何一つ不自由なこともなかつた。そ

れに話好きがよく笑ふ女であつた。『おい、また、西瓜でも買はうか。』かうNが言つて小さな財布から金を出すと、『また西瓜けえ！ あきれたもんだぜ！ お前さん方に逢つちや西瓜もかなはねえ。』こんなことを言つて、その女はそこから松林を越して、近くにある畠に行つて、大きな西瓜を買つて、それをついで持つて來た。

『大きな西瓜ねえ、いくら？ これで。』

かうかの女が言ふと、

『あて、御覽なさい、お嬢さん。』

『わからないわ。』

十錢持たせてやつた金のつりを女はそこに四錢置いた。

『六錢、安いわねえ。』

『ウム、六錢は安いな。今日のは安い……』

こんなことを言つて、Nはそれを叩いて見て、

『その代り、赤くないぞ。』

『大丈夫だともな……赤いともな……この位になりや、もう……』
女も一緒になつて叩いて見た。

それを、その大きな西瓜を、松林の凹みの冷めたい清水の中に一時間ほど冷やして置いて、好い時分になつてからいつも出して來た。そして男達は面白がつて、縁側に俎板と庖丁とを持出して、それを真中から二つに割つて、

『ヤア、赤い。これは旨いぞ。』

などと言つて、半月形に切つた奴を啜るやうにして食つた。

『旨い、旨い。何うです、治子さん。』かうKは勧めた。

治子もこの別荘に來てから、西瓜の旨い味を始めて覺えた。かの女も二片も三片も食つた。

Nは言つた。

『支那の文章には旨いことが言つてある。美人が赤い桃の實を食ふのを形容して、何れか桃、いづれか唇たるかを辨ぜざるなりなどと書いてあるが、治子さんの西瓜を食ふところを見ると、丁度さういふ風だね。』

『まア、あんなことを。』

かう言つてかの女は笑つた。Kも笑つた。

新しい魚類なども、女はよく生きたまゝで買つて來た。鱈などの殊に旨かつたのをもかの女は今でも思ひ出すことが出來た。

かうした忘れ難い平和なのんきな生活の前に、突然思ひもかけない災厄がひそんでるようとは——。しかもその日も別に變つたことはなかつたのである。天氣は好かつたし、風はなかつたし、美しい朝であつたし、また美しい午前であつたし、さうした災厄の前兆は少しも面影を見せなかつたのである。午後になつてから、三人は揃つて出かけた。Nの態度にもKの態度にも何等變つたところは少しもなく、いつものやうに語り、いつものやうに戯れ、いつものやうに磯を歩いて、そしてその岩蔭の海に行つて水泳した。

治子は始めは面白がつて、二人のいつものやうに泳ぐのを見てゐたが、つい足元にめづらしく綺麗な貝を發見したので、その方に氣を取られて、捜すともなくあたりを熱心にさがして歩いた。で、少くとも二三分は経つた。不圖、氣がつくと、Nは非常に遠くに泳いで行つてゐる。平生行きもしないまた行くことも敢てしない白い波の立つてゐる方へと泳いで行つてゐる。Kはそれから見ると、全く別の方で離れて泳いでゐる。『まア、遠くまで行つた！』と思つて見てゐると、ほつかりNの首が水の中に沈んだ。おやと思つたけれども、別に氣にもとめずゐると、また首が出てまた沈んだ。その時、何か言つた聲がきこえたが、それは救を呼ぶ必死の聲であつたのである。

暫くして、それと氣がついたらしく、Kがそつちに急いで泳いで行くのを治子は目にした。しかし治子の目には、Kの泳いで行くのが非常に遅く、且まどろこしいやうに感じられた。

三度目に深く沈んだNの首は、もう再び水面にあらはれなかつた。治子は俄かに起つた災厄、それにつゞいて起つたさまざまの光景、盡きない涙、村の漁師を頼んで来て漸く引上げた時の青白い屍、さういふものが歴々と見えた。何年にも思ひ出したことのない、または思ひ出しても、普通の水死以上に感じを惹かなくなつたシーンが、再び新らしく眼の前に蘇つて來たかのやうに——。

四

治子はその別荘に滞在してゐた間の三人の状態を今一度細かく眼の前に展けて見た。また、Nが死んだ後のKの状態をもそれと思ひ浮べて見た。長い時を経過してゐるので、とてもそれとはつきりと思ひ浮べることが出来なかつたけれども、Kがかの女をその時分ひそかに愛してゐたといふことだけは肯定することが出来るやうな氣がした。それからもう一つ不思議なことは、その後Kとの結婚問題が起つた時に、Kがそれを避けようとしたことであつた。その時分、『私のやうなものとてもお嬢さんを貰ふ資格がない。私とはとても一生幸福な生活を行へさうにもないから。』と、Kは度々その仲介者に言つたといふ。しかも、その頃になつては、Kよりも治子の方が却つてKを思ふやうな形になつてゐた。

それに、思ひ出して見れば、もう一つ忘れられないことがあつた。それは結婚當座であつたが、何故かNのことがいろいろに思ひ出された。Kと夫婦になつたといふことも、Nがあつたがためだとも思ひ、

Nが生きてゐたら、それこそ何んなに幸福であつたらうとも思ひ、何故あんな風にしてあそこで水死したのだらうと思ひ、當分はNのことが氣にかゝつて爲方がなかつた。KにもNの話をするのが辛いらしく、その話が出ると、不愉快さうな顔をして、話を別の方へと持つて行つた。その頃、Kは新婚當座のやうな人ではなく、いつも書齋に入つて熱心に研究ばかりをつゞけてゐた。

しかし博士が死の床に臥して、をりをりNの名を呼んだり、Nに逢つた夢から驚かれて覺めなかつたならば、治子は決して今のやうにその昔を思ひ出さなかつたに相違なかつた。かれ等の生活は、世間的から言つても、決して不幸福でもなければ、不満足でもなく、富貴、名譽、年を経て加はり、可愛い丈夫な子供は生ひ立ち、家庭は圓滿に、博士は他の女に心を移すやうなこともなく、唯、博士の沈黙と陰鬱とが辛いと言へば辛いものゝ一つであつたけれど、それとて治子の好きな派手な生活を遮るやうなものではなかつた。それに、治子は現にそのNの死んだ状態を自分で見て知つてゐるので、夫に對するさうした疑惑は起したくも起す材料を持つてゐなかつたのであつた。

博士の級友で、矢張Nなどをも知つてゐるO博士が、赴任地の大きな製鐵所から上京した次手に、かれの病氣を見舞つて來た時には、いつもよりは元氣で、いろいろな話をしたが、ふと、

『Nの親や兄弟は何うしたね。』
かう突如としてK博士は訊いた。

O博士は、

『さア、詳しいことは、僕も知らんが、マザアやファザアはもう死んだらうと思ふね。あのNの弟が何うも出來がわるくつてね、學校にゐただけけれど、失敗して、今ぢや滿洲へ行つてゐるつて言ふ話ばかりだが……』

『困つてゐるんだらうな。』

『なんでも、大分落魄れてゐるやうな話だつた……』

『妹は？』

『さうさう妹がゐるたね。そんなに容色の好くない。……あれは中學の教師か何かに嫁いだ筈だが、何うしたかな。』

博士は溜息をついて、

『つらい世の中だな。何處を見ても、彼處を見ても……もう、僕も今度は治りさうもない。』

『そんなことはないよ。君なんか、まだ若いんぢやないか。』

『年は若くつても、あまりに人生は辛すぎた。……とても、もう、この先き生きやうとは思はれない。』

『何うしてそんなことを言ふんだ。君のすぎて來たレイベンが辛くつちや、辛くない人は一人もゐないぜ。僕なんかでさへ、君のレイベンよりは辛いと思つてゐるぜ。』

『さうでない、さうでない。』

博士は手で振るやうにして見せた。

暫くしてから、

『何と言つても、學校にゐる時分が一番好かつたな。無邪氣で、何も知らないで……』

『それは、さうだがね。』

『まア、しかし、君なんか盛んで、丈夫で好い。長生をするんだな。』

『いやに心細いことばかり言ふな。』

『でも、今度は、俺はとでも治らない。治らない理由があるんだ。死ななければならぬ理由があるんだ。……しかし死ぬ以前に一つ是非しなければならぬことがある。』と言つて考へて、『ところが、これが中々大問題なんだ。今の僕には非常に重荷なのだ。しかし、これは是非やらなければならぬと思つてゐる。』

『治るよ、そんなにやきもき思はないでも……治つて、一つゆつくりやるのだ。實際、君なんかにはやつて貰はなければならぬ爲事はいくらもあるんだから。』

其處に、治子はちよつと綺麗な美しい姿をして、莞爾して上つて來た。あとから若い小間使がビールに果物を運んで來た。

『奥さん、いつもお若いですね。』

『いゝえ、もう。』

いくらかきまりがわるいといふ風で艶に笑つて見せた。

病人はちよつと治子の方を見たが、そのまゝ眼を落して了つた。さびしさうな表情がその顔を掠めた。

『でも、今日は好いやうですね。僕は新聞で見て、もつとわるいのかと思つて、心配して來た。これぢや、もう少し氣永に養生すれば、全快近きにありだ……』

『何うも氣が弱くばかりなつて、爲方がないんですよ。昔のことなんぞばかり考へるんですもの。』

『何うしても、病氣をするとさうなりますな。』

二階の晴々した窓には、梅雨あがりの日影が麗かにさして、新しい簾には緑の青い影が靜かに揺いた。

五

博士の病氣は次第に重くなつて行つた。滋養分を十分に攝取することが出來ないので、體は瘦せるばかり、鼻はいやに尖り、頬はわるく骨立ち、脛などは阜螭のやうに瘦せこけて了つた。もう一日二日持つか持たないかといふやうな醫者の口吻は、治子や周圍の人達や子供達を悲しませた。

それに、時々苦痛が起つた。さうした時には、看護婦や治子達にも手に餘るほどであつた。力がなく

なつて體も自由に動かすことが出来ないほどであるにも拘らず、その時ばかりは、身もだえして、枕を何遍となく外した。

醫者が来て、注射をして、いくらか樂になつた時には、苦痛の名残のやうに呼吸をはずませて、「しかし……しかし……この苦しみよりは……これよりは、俺の送つて來た一生の方がもつと苦しかった。」かう小聲で獨言のやうに言つた。

『あゝ、もう死ねさうなもんだ。……この位、苦しめば、俺の罪障も滅しさうなもんだ……しかし……しかし、何か言はうとしてそしてまた急に口を噤んだ。』

治子が見てゐると、仰向けに寢てゐる瘦せた土色の頬の上ををりをり涙が靜かに傳はつて流れた。

看護婦がゐない時に、

『何か仰有ることがお有りになるなら……』かう小聲で治子は訊いた。

『ウム、ウム。』

と言つたばかりで博士は何も言はなかつた。涙はまた流れた。

治子にもいろいろのことが一杯に胸に押し寄せて來た。

この頃でも、をりをりNの夢は見るらしかつた。さうした時には、手で拂ひ退けるやうな形をしたり、何かに壓迫されるやうな状態を見せたり、微かに唸つたり、顔を苦しげに歪ませたりした。ある日、あ

たりを見廻してゐたが、決心したやうに、

『治。』

丁度、其處には、看護婦と總領の娘としかついてゐなかつた。

『治。』

『母さんですか。』

かう娘が覗くやうにして訊いた。

博士は點頭いて見せた。

治子はやがて呼ばれて病床に來た。『何うかなさいまして?』

博士は眼を明いたが、あたりを見廻して、手で、皆な下に下りて行つてゐよといふしるしをして見せた。

『私に、何か話すことでもおあんなさるのですか?』

博士は點頭いて見せた。

で、看護婦も、娘も下に下りて行つた。

治子は近寄つて、

『何か——』

『もう、誰もゐないか、お前一人か。』

『え、誰も……』

博士はそれでも今一度そこらを見わたして、

『治。』

『はい……』

『俺は……俺は……是非、一つお前に言はなければならぬことがある……』これだけ言ふのも、苦しうで、胸から肩へかけて呼吸が大きく刻むのを治子は見た。『俺は、俺はこの苦しみを一人墓に背負つて行かうと思つた。……お前のために、またあとに残して行く子供達のために。……しかし、それは俺には出来ない。……俺はそれを言はない中は、死ぬことが出来ない……』

『……』

暫く博士の言葉は途絶えた。

『治。』

『はい。』

『俺は辛かつた。そのために、俺の一生は虐まれて来た。治。Nが水死したのは、俺が殺したやうなものだ。』

『何うして？』

驚愕が治子の胸を轟かした。

『俺はあの時、救へば救ふことが出来たのだ。……いや、それよりも、もつとわりい。Nをあゝした遠い海までおびき出したのは、俺がしたことだ。……俺はあの時、何んなにNに對して嫉妬を抱いたであらう。……人知れない嫉妬、秘密と言ふことは、何んなに恐ろしいものだったたらう。……しかし、治。許して呉れ、俺はその重荷を抱いて一生苦しんだ。』

博士の顔には言ふに言はれない苦痛の色が漲りわたつた。

『でも……』

かう治子が言ひかけるのを遮つて、

『お前は、あの時ちゃんと見てゐた。だからそんなことはないと言ふんだらう。それは俺は手を下したといふわけではない。しかし、救ふつもりなら、無論、俺が救つてやることが出来たのだ。……しかも俺の心は、あの時、Nの死を喜んでゐたのだ。さうすれば、お前は俺のものになると思つてゐたのだ。あゝした楽しかつた海岸の一夏にも、さうした恐ろしい毒の影が周囲を取巻いてゐたのだ。……だから、あの災厄が突然に來たやうに誰も思つたが、決してさうぢやなかつたのだ。……さうした暗い人間の心からあゝしたことが出来たのだ。』

『でも、そんなことは……』

『いや、さう言つて呉れるのは、かうして夫となり妻となつたお前の情だ。手を下したのではないからと言ふんだらう。しかしそれは同じことだ。……俺はお前のために、親友を深い危い海につれ出して、そして救ふことの出来るのを見殺しにしたのだ。……お前はNと一生を暮すべきだつたのだ。その方が幸福だつたのだ。』

治子も驚愕の後の悲哀に堪へないといふやうに深く低頭した。この間から、博士が内心に苦しんでゐたさまが一々わかつて來た。治子は女の罪の深さを思はずにゐられなかつた。

『だから、あの時、お前のNに對して濺いだ涙は、俺は見てるに忍びなかつた。……實際忍びなかつた。だから、あそこから歸つてからは、俺は成るだけお前を見ることを避けた。お前を俺の物にしやうと思つたそのわるい心も、Nがゐらなくなつてから、またお前の涙を見てから、すつかりさめた。俺はお前を妻にしなければ好かつたのだ。けれど、俺は既に一度さうした毒に觸れた。お前を妻にしなければならなかつた。そして一生心の中で苦しまなければならぬ報酬は既にその時に醸されてあつただのだ。考へて見ると、俺の一生は、その罪過のためのみ暗くされて來た。Nが始終俺の心の中に生きてゐた。またお前の中にもNが生きてゐた。お前を見ると、何んな時でも、Nが俺にまつて來た。夜の床の中までも入つて來た。俺は辛かつた。その辛いのをまぎらせるために、俺は書齋に没頭した。そしてそ

れが俺の名譽と富貴とになつたと思ふと、悲しまずにはゐられなかつた。』長い言葉に勞れたやうに、またはこれだけのことを言ふにも一方ならぬ努力であるやうに、最後の努力のやうに、博士は呼吸を深く切つて、『治、許して呉れ、これは言はずに死なうと思つたが、それを言はない中は、俺は何うしても死なれない。許して呉れ、治。』

かう言つた博士の頬には涙が靜かに流れた。

萎れた草

『何處か散歩して見ないか。』

『散歩——僕は湯にでも入つて寝ようと思つてゐるんだよ。』かう親友の原は眉を寄せた。

『好いぢやないか。芝居にでも行つて見ようぢやないか。』

『行く氣はないね。今朝から頭痛がして困つてゐるんだもの。』

爲方がないので、宗彦は、『朝子さん、何してゐるの?』

『昨夜から、ライオンを描くなんて大騒ぎをしてゐたつ。まだ、一生懸命で描いてゐるだらう。見てやつて呉れ給へ。』

宗彦は起つて、立關に接した朝子の居間に入つて行つた。机の周圍には、紙や、繪具や、書籍が一杯散らかされてあつたが、宗彦の入つて來るのを見ると、朝子はいきなり机の上を袂で隠して了つた。白いエプロンは子供のやうに赤や青や黄の繪具で汚されてゐる。そのかくされた袖の下を強ひて窺ふやうな

氣勢を宗彦が示すと、朝子は更に袖の上に顔を埋めて了つた。宗彦は凝とその突伏した姿を眺めた。

驚くほど長い間じつとしてゐてから、朝子は、

『あつちへ行つて下さい。』

と言つて顔を擡げて笑つた。

明礬を引いた紙の上に、ライオンはかなり大きく手際よく描かれてあつた。繪の具は既にところどころ塗られてあつた。朝子はもう見られて了つたから爲方がないといふやうにして、繪具筆を取上げて、ライオンの踏んでゐる地面のところをちよいちよいと無造作に塗り始めた。

『今日は、宗彦さん、屹度入らつしやると思つてゐてよ。』

『何うして?』

『今日はお天氣が好いでせう。かう言ふお天氣に、貴方は家にじつとしてゐられない性分ですもの!』
實際、かれは天氣の好いのにじつとしてゐられずに出て來たのであつた。朝、床の中で眼が覺めた時、いつもと違つて非常に氣分が好いので、それで今日は天氣の好いといふことが知れた。起きて縁側に出て見た。果して空は青かつた。朝日は庭樹を斜に紅く照らして、鳥が頻りに心持好ささうに鳴き交はしてゐた。かれは何處に行かうと思つた。淺草の雜沓する群集の中に行つていかにも人生を樂んでゐるやうな人達の顔でも眺めて來ようか。それとも自分の唯一の女の友達を訪れて、久し振であの莞爾したや

さしい顔を見て来ようか。しかしそれも大變だ。出て歩くと、いくら気分が好いと言っても、矢張、疲れるにきまつてゐる。それよりも、靜かに落附いて家に寢てゐる方が好いかしら？ など、思つた。その女の友達と言ふのは、他でもない、親友の原の妹朝子で、その快活な、血色の好い顔や、小さな紅い唇や、無造作に取繕はない髪や、生々とした眼色や、さうしたものが常に宗彦の眼の前にチラ／＼した。砂糖のやうな甘い聲で、人を嘲弄するやうに少し唇を突出したりするその表情もかれは決して憎いとは思はなかつた。病める宗彦に取つては、殊に、此頃、さうした若い女の聲を聞くことが必要であつた。さうした若い女の聲や笑ひや表情は、熱した顔を冷めたい水で冷されるやうな快感をかれに與へた。で、今日も遂に、朝子を見るために出かけて来たのであつた。

宗彦は室内をあちこちと眺め廻したが、小聲で私語くやうに朝子に言つた。

『芝居へ行つて見ませんか。』

『さうね——』

始めは行つても好いといふ風に首を傾けて見たが、突然、

『よませう。』

『……………』

宗彦はグツと小さな怒を胸に覺えた。かれはかうした嘗ない拒絶を豫想してはゐなかつたのであつた。

『行かない？』

『え。』朝子はかう言つたまゝで、無頓着に頻りに繪具を紙に塗つた。

秋晴の町を此まゝ家へ歸らうか。それとも何處かへ行つて見ようか。こんなことを思ひながら、宗彦はひとり靜かに歩いた。

自分の誘ひには誰も應じて呉れない。もう自分は誰にも相手にされない。かう思ふと、天地の間に見捨てられたといふやうな誇張した淋しさが犇々とかれの魂を取巻くやうに襲つて来た。女の鋭い天性で、朝子は黙した自分の戀を知つてゐるのに違ひない。知つてゐて、そしてあゝした嘗ない態度に出たに違ひない。それと言ふのも皆なこの身が病んでゐるためである。不治の病に罹つてゐるためである。それはかの女を見る自分の眼、または自分を見るかの女の眼ではつきりわかつてゐる。

かれはしかしすぐさうした思ひを捨て、了つた。あんな女がなんだ。あんな女は自分の戀に値ひしな位と思つた。かれは病氣になつて愈り易くなつたことを思つた。そしてその愈が病人によく見る執拗な毒々しいものであることを思つた。かれの考はまた朝子の方へ戻つて行つた。『俺は話は下手だ！ 殊に朝子の前では一層さうである。よく吃る。よく顔をあからめる。しかし、吃つたり、體裁の好い口がきけなかつたりするのは、それだけこの唇が汚れたことを言はず、この眼が世間の汚れたいろ／＼なもの

を見ないからであつて、自分に取つてはそれが却つて、淨い口、無垢な眼であるといふ誇になる。旨く言へば、朝子だつて、内所で一緒に芝居に行く位は何でもないんだ。であるのに、躊躇した。何故だ？』その何故？ に宗彦は又突當つた。屈辱と言つて好いか、女の冷淡を罵る心と言つて好いかわからないやうなもの、ために焦々した。裏切られたやうにも、また人の心の頼み難ないやうにも思はれた。

宗彦は胸部に少し疼痛を覚えて、軽く咳をした。それが二三遍続いた。汗が額に滲んで来た。

紙に受けた痰には細い眞赤な線が入つてゐた。しかしそんなことには馴れ切つてゐるものゝやうに、無感覺な眼をして、暮秋の明るい光線の中にかれはそれを眺めた。

やがてかれは玉川の景色を見に行くことにきめた。で、電車に乗つた。また女のことを思ひ出されて来た。もう朝子の家には行くまい。自分の戀した朝子は死んだことにしよう。そして戀に破れた自分の果敢なさを味つて見ることにしようと思つた。ふと見ると、車内には女が二人乗つてゐた。かれはちよいちよいその方に眼をやつた。神の創造物の中では、何と言つても、女が一番美しく完全なものだと思ひながら、楽しむやうにして、かれはそれを眺めた。不幸にして、その女の美貌はその聲の音楽を持つてゐなかつた。『これで、もう少し、好い聲の持主であつたなら、何んなに好いだらう。』など、かれは思つた。朝子がまた思ひ出されて来た。で、いよくかれは失戀したことにきめたが、それにしても、その失戀をこの二人の女の前にはさらけ出して話したなら、二人は何と言ふであらうかと思つて見た。笑ふだ

らうか、それとも憐むだらうか。こんなことを考へてゐる中に、かれの眼には、衰へたかれ自身が映つて見えた。何の情熱もなくなつた眼と、溝のやうに皺の立つた額と、血の氣のすつかり失せ果てた唇と、ほんやりして一ところをじつと見詰めてゐる姿とを持つたかれが――

切符に乗換の鉄を入れに來た車掌に、かれは年寄のやうに低い喪心した聲で、『澁谷！』と答へた。氣が附くと、二人の女は何處かで下りたと見えて、そのあとには、請負師のやうな男と土工らしい股引をはいた男とが乗つてゐた。

かれは依然として大きな悲しみの下にあつた。大勢の人達の中にも、かれは全く孤獨であつた。電車の終點から玉川電車まで行く間をすら、かれはとほとほと足を引摺るやうにした。

玉川電車の方では、風が少し出た。何處からともなく冷めたい風が車内に吹込んで來た。それを宗彦は非常に嫌つて、いつそ家に戻らうかしらと何遍もく思つた。それに、電車の動搖も市内の電車と比べて夥しかつた。今にも座席から揺り落されはしないかと思はれるほどである。坂の上に来ると、行手に白い富士が見えた。

宗彦には、玉川は初めて、あつた。電車だけの狭いレイル路が坂になつて勾配が急になると、前にはひろくした眺めがあらはれ出して來た。天高く、地潤しいといふ感じが簇々と胸に上つた。やがて、電車を下りて、路でないやうな小さな飲食店の前を眞直に向うに行くと、もう其處は河原で、石のごろ

ごろした間に、綺麗な水が透き通るやうに日の光線を織り込んで流れてゐた。飲食店の前の畑には霜にしほれた黄菊が叢を成して澤山にかたまつて咲いてゐる。宗彦はひろびろした川原を少し歩いて見たが、すぐ疲れて、そのまゝ水の流れる端に、風を避けるやうにして休んだ。

川原では、砂利を選つてゐる人足達が大聲で饒舌つたり嘸鳴つたりしてゐるのがさびしくあたりに響きわたつてきこえた。宗彦はじつと水を眺めた。秋の碧い清い水は日を帯びてキラ／＼と美しく光つて流れた。

暫しはのんきにそれを眺めてゐるが、あまり暖かなので、かれは羽織を脱いだ。顔がのほせて頬があつく、胸がわるくなつて来た。熱が出て来たのであつた。かれは歸らうと思つて靜かに起き上つた。

再びもとの處に来て、電車に乗つた。空には灰色に濁つた雲が出て、あたりはなんとなく陰氣になつた。かれは飽満したやうな不快を絶えず胸に覺えて、堪らないほど手足を靜かに延ばしたくなつたが、しかもかれを乗せた電車は相變らず激しく動揺した。否、そればかりではなかつた。單線のために、ある停留場では、長い間もどかしく電車を待ち合はせなければならなかつた。あまりに焦れつたさに、かれは下駄で床を踏み鳴らしたりした。

ふとある光景がかれの眼に映つた。

山茶花の白く赤く咲いてゐる垣があつた。そこから尾の長い一疋の可愛い小犬が出て来た。始めはほ

んやりして遠い地平線の上を見てゐるが、ふと、その鼻の先に、黄い羽蟲があらはれ出した。小犬は匂ひをかきながら、激しくその羽蟲を追ひ廻した。羽蟲は低く／＼飛んで行つたが、やがて急に、高い／＼空の方へ舞ひ上つて行つた。小犬は急に吠えた。さながら羽蟲の急に見えなくなつたのに腹を立てたといふやうに――。それが宗彦には、言ふに言はれない無邪氣さを感じさせた。小犬は猶二三度吠えたが、それで満足したかのやうに、やがて尾を下けて、再びもとの垣の中に入つて行つた。此處ですれ違ふ筈の電車の遠い唸りがやがてきこえて来た。

家に歸つて来たかれは、十里の道でも歩いたやうに疲れてゐた。腹が空いてゐないやうな氣も一方ではしたが、しかも夕飯はかなりに旨く食べた。唯冷めた焼魚がいくらか胸に觸つたやうな氣がした。暫し経つてから、かれは湯に出かけた。

湯屋の浴槽からは、高い硝子窓を透して、碧い空の一部が見られた。かれは湯に浸りながらいつもそれを眺めた。しかし、その日は生憎曇つてゐた。

郡部に近い湯屋の午後は、日曜でも客は少く、大きな水槽に滴り落ちる水の音は、がらんとした浴場に高くさびしく規則立つて響いた。宗彦は病氣にも拘らず、熱い湯に自分の肉が溶けて行くかと思はれるほどそれほど長く入つてゐることが好きだつた。かれは長い間靜かにじつとして浸つてゐた。

湯から上ると、汗が止度もなく流れた。かれはそのまゝ、ぴたりと洗場に坐つて了つた。脈搏が自分にもきこえるやうに高くく躍つた。ダラリと膝の上に置いた手には、青い血管が際立つて太く蚯蚓のやうに走つてゐるのが眼についた。ふと痰が咽喉に支へたやうな気がしたので、洗場の細い溝のところへとかれはやつて来て、つゞけて二つ三つ咳をした。いつもの痰とは違つて、水のやうなものが咽喉の奥から舌の上へと流れて来るのを感じた。吐き出すと、それは赤い血であつた。

かれはギョツとした。

しかし何うすることも出来なかつた。かれはそのまゝ、板の間に腰を据ゑ、胸を押へて、出来るだけ落附かうと試みた。成るたけあたりの浴客に見せまいとした。しかし血はあとからあとへと出て来た。口から出さぬやうにしても、鼻孔の方へ廻つて、そこからタラ／＼とかれの胸の上に滴つて落ちた。かれは暫しそこに蹲踞んだ。

かれの心はしかし冷静であつた。外科醫のやうに冷静であつた。かれは口や胸の血を綺麗に拭ひ、それが終ると、靜かに着物の脱いであるところへやつて来た。體からは、汗がまだ流れてやまなかつたけれども、それを拭ふだけの動作でも咯血を誘ひはせぬかと危まれたので、そのまま濡れた身體に着物を着せて、湯屋から出て来た。

『たうとう出たな。』

かう思つたが、それと同時に、さびしい笑ひがかれの口の邊に漂つた。かれは冷めたい鐵か何かにでも觸つたやうな気がした。やがて口の中に腥いものが一杯にたまつて来た。それをかれは辛うじて家まで押へて戻つて来た。

格子戸を明けて上り端に来るや否、そこにあつた新聞紙の中にそれを吐いた。激しく咳が出て来た。

『もう家だ。氣兼ねいらぬ。』かう思ふと、毒々しい血が咳と共に一杯に出て、あとには黒い血の塊のやうなものが續いた。窒息するばかりの苦しさが總身を震はせた。

かれは上り端の三疊に仰向けになつた。

『枕！ 枕！』

かうかれは叫んだ。

奥から母親が慌て、出て来た。冷めた焼魚のために胸をわるくしてもどしでもしたのかと母親は思つた。その前に、かれはすべて鮮かな生々しい血を新聞紙にかくした。

『胸をわるくしたのかえ？』

母親はかう訊ねた。

宗彦は何かそれに答へようとしたが、腥い液體がまた舌の上に流れて来たので、唯黙つて點頭いて見せた。枕を頭の下にあてがつて貰つてから、そつと血を口から新聞紙に移して、

『氣持がわるくなつた、急に！』

『もどしでもしたのかね？』

かう母親は心配さうに訊ねた。

『少し。』

『焼魚がわるかつたんだらうね。先生に来て貰はうかね？』

『もう大丈夫です。足が冷えるから、足袋を穿かせて下さい。』

母親の觸つたかれの足は、死人のやうに冷めたかつた。それに、曇つた日の光線の悪い室内に、顔も蒼白く、額の長い髪の毛の生え際に汗を光らせて、寝てゐる姿は、唯事でないやうに母親に思はせるに十分であつた。

『先生を呼んで来よう！』

かう言つて母親は起上つた。

『まア、そつとして置いて下さい。先生を呼ぶよりも何よりも、そつとして、容態なんかきかないで置いて下さい。』

かう宗彦は言つて、新聞紙も、塵箱に捨てず、前の溝川に流して下さいと頼んだ。母に咯血を見せたところで偽方がないと思つて、『中は見ない方が好う御座いますね。』と附加へて言つた。

母親は新聞紙の丸めた包を持つて立つて向うに行つた。宗彦に取つては、咯血の量が夥しかつたことが、しかもそれが黒い塊であつたことが、妙ならず意外に感じられたが、しかも、すぐ醫師に来て診て貰はうとは思はなかつた。醫師も、これを何うすることも出来ないのをかれは豫めよく知つてゐた。

幸ひに家の内はしんとしてゐた。かれは靜かに仰臥した。

かれは一時目をつぶつたが、再び明いた時には、曇つた日の軟かな光線が臺所についた女中部屋に流れるやうにさし込んで来てゐて、その柱にかけてある肴屋の通帳がさながら浮き出すやうに際立つてはつきりと見られた。と、毎日やつて来る肴屋の姿がはつきりそこに浮んで来た。それは二十五六のいなせな男で、眉毛の薄いのを氣にして、いつも墨で黒く塗つてゐるが、時には地まで眞黒にしてゐるのを見ることも妙くなかつた。腹掛の井の中には、いつも小さな鏡が入つてゐて、人のゐない所でそれを映して、顔を映して見たりした。宗彦は肴屋の通帳に目を留めてから、心の中に、『Death stares me in the face』など、繰返した。と、死の冷めたい呼吸がそのまゝ、顔にかゝつて来るやうな氣がした。自分是最早此世にゐなくなつても、肴屋は矢張やつて来るだらう。今日は！と呶鳴つてやつて来るだらう。そして奥から人の來ない間、鏡を出して引眉毛の自分の顔を映して見るだらう。その柱にかけられてある通帳もいつものやうに母親と肴屋の手を往つたり來たりするであらう。かう思ふと、肴屋のほての中の荷をあれかこれかと見廻しながら、安くつて旨い總菜の肴を母親が選んでゐるさまが歴々と眼の

前に浮んで見えた。と、自分の身体はたはいもなくふわふわと空中に浮動して行くやうな気がした。心もそれと共に軽くなつて行つた。睡眠がひとり手にかれにやつて来た。

再びかれが眼を開いた時には、肴屋の通帳は、夕暮近い灰色の光線の中に半ば埋められたやうになつてゐた。かれは非常に長い間寝たやうな気がした。再びこの肴屋の通帳を見たといふことが、何だか二度と見られぬものでも見たやうな喜びをかれに誘つた。自分はまだ生きてゐるのである。的確に生きてゐるのである。かれは靜かに自分の脈を數へて見た。六十一しかない——そんなわけはないと思つて、もう一度やつて見たが、矢張同じであつた。それに、さつきとはちがつて、頭もはつきりして、健康の折と少しも違はないやうな気がした。

體にもまだ十分力が残つてゐて、眠る前のさつきのあの咯血は、遠く過ぎ去つた悪夢か何ぞのやうに思はれた。何をさし置いても、頭が晴々としてゐるのが心丈夫であつた。

『何うだえ？ 心持は——。』かれの起き出して行つたのを見て、母親はかう訊ねた。

『大變好い……。』

『さつきのあの足の冷めたかつたこと——私は吃驚した。餘り熱い湯に入つてのほせたんぢやないか。』

『さうでせう、屹度……。もうよくなつた。思つたより早く治つた……。』

『今日は先生に診て貰ふ日だね。』

『さうです。ちよつと診て貰つて來ませう。』

歩いて見ると、流石に酔つたものゝやうに體がよろ／＼した。咳は成るだけ腹に響かないやうに、やうにと心がけたが、痰が矢張眞赤で、氣分の好いのも當てにならないやうな気がした。

醫師はすぐ近所であつた。『如何ですか？』かう莞爾してかれの顔を見た。

成るだけ内輪に、咯血の話をかればした。醫師は、『フム、フム』と言つて聞いてゐるたか、しかも別段それに重きを置いてゐるやうな様子も見えなかつた。

脈を見ながら、『食事はいけませんか？』

『食慾はありません。』

『フム。』

醫師はかれの咽喉を調べてから、肌をぬがせて、胸と脊とに聽診器を當て、見て、さて指の尖でコツと叩き始めた。空虚から發して來るやうな音、餘韻の短かい音、雜駁の濁つた音などが、一しきりしんとした靜かな診察室に際立つてきこえた。醫師は脊中の下の方を叩き終ると、思ひ當つたことでもあるやうに『フム』と言つて自から點頭いて見せた。宗彦は然し別に何事をも聞かうとはしなかつた。醫師はかうやつてすつかり飲み込めたやうな顔をして見せるけれど、果して何れだけ本當にわかつてゐる

るのであらうか。かれは今までに既に餘りに多く醫師の治療に信頼し、且つ失望して來た。

『成るだけ靜かにしてゐなければいけません。』

『矢張、咯血したのは、餘り動いた故でせうか。』

『さうですな。』

『今日玉川の方へ遊びに行つたりなんかしたものですから。』

『歩くのは、餘り好くはありませんよ。ちつとしてゐなければいけません。澤山血の出るやうなことがあつては大變です。それでは、今日は藥を替へて差上げませう。』

長く藥を飲んでゐると、藥の替るのは嬉しいやうでもあり、また厭なやうなものでもあつた。苦い藥でも、親しみを持つて馴れて來ると、段々好いところが出來て來た。かれは藥局の窓から出された藥瓶を不安さうに眺めた。それは少し紅味を帯びてゐた。

その夜はかれは穩かに眠ることが出來た。晝間もあゝして寢たに拘らず、床に就くと、すぐぐつぐつと熟睡した。朝起きた時も、昨夜寢たまゝの仰臥の姿勢であつた。氣分も好かつた。唯、腰から下が非常に冷えた。

眼がさめると共に、今日は會社へ出たものか、何うかといふ考が逸早くかれの胸に上つて來た。かれは自分の生命のもう數へられてあるのを思つた。そして、その數へられてあるといふことに悲傷せず、靜かに、男らしく、その日の近づいて來るのを待たなければならぬと決心した。最後の力まで、働いて、そして靜然として死に面するほどそれほど悲壯なことはあるまい。かれはかう考へて會社に出勤することにした。

朝風はもう寒かつた。かれは震へながら電車を待つた。電車は來るには來ても、どれもこれも満員で、大抵は停車せず素通りをした。丈夫な時なら、飛び乗りでも何でも出來るのだが、今はそんな勇氣はなかつた。漸くちよつと留つた電車に乗るには乗つたが、あとからあとからドシドシ人が乗込んで來て、押倒されないうちには、かれは死力を盡して入口の扉の上部につかまらなければならなかつた。かれの眼は擴大し、かれの鼻孔はをのゝいた。しかし、かうした忙しい朝毎の雜鬧も、ぢき自分には見られなくなるのかと思つた。

平生無口なかれは、會社に行つても、碌々同僚と口をきかなかつた。かれは唯黙つて仕事をした。仕事は馴れ切つてゐるので、別に面倒なこともなく、體を疲らせるやうな憂ひもなかつた。しかし、昨夜の咯血以來何となく胸に大きな空洞が出來たやうな氣がして、何ぞと言ふと、そこからまたあの恐ろしく黒い血の塊が出來て來はしないかと危まれた。咳をするにも氣が置けた。

晝飯がすむと、いつもの如く、人々はてんでに煙草盆を引寄せて、煙草をふかしながら雜談を始めた。

話はいつも變らず、人間の運不運や幸不幸や榮枯盛衰で持切られた。中でも、來年の高等文官の試験の準備をしてゐる大野といふ男の話した『無教育で、無一物で、ぶらりと東京に出て来て、一三年で巨萬の富をつくつた好運の男』の話が人々の心を惹いた。

『何うしてさう旨く行くんでせう。』かう大野は言つた。

『矢張、あゝいふ人は豪いからですよ。』宗彦はかう傍から口を出した。

『豪い、何が豪いもんですか、倅の戀人を自分の妾にしたり何かして、丸で獸のやうな奴ですもの。』

『しかし、金を拵へたところは豪いぢやありませんか。』

『併し、金を拵へただけでは、人間として、豪いといふ理由にはなりませんまい。』大野は煙草の烟を吐いた。

『いや、理由になりますとも……。金をためて、そして長命するといふことは、人間として一番偉いことです。』

『そんなことはないでせう。長命も人間としては豪い條件になりますまい。』

『なりますとも——。』宗彦は思はずかう聲を立てた。『東京のやうな生活の激しい處では、單に食ふ、單に生きるといふだけで、それで大變な問題です。君や僕のやうに、自分の肉を削るやうにして、それに由つて生活する者に取つては、長命は甚だ覺束ないことゝは思ひませんか。偉くなければ出來ないこ

とゝは思ひませんか。私はいつも思ふ。天壽を全うするといふことは、生物として最も偉大なることで、東京見たいなところで、五十年以上生きた人は何んな人間でも本當に偉い人間だと私は思ふ。』

これだけ饒舌るにも宗彦は咽喉のイラ／＼するのを覺えた。

大野は面倒臭いと思つたらしく、『それもさうだね。』など、言つて、すぐ話を他へ外して了つた。

宗彦は平生餘り餘計な口をきかないだけに、議論などをやると、いつも自分から先づ激した。今もあれだけのことで、何か大事件にでも打突りでもしたかのやうに夥しく胸が躍つた。しかし、一方には、自分ながら旨いことを言つたものだと思つた。

午後になると、頻りに寒氣がして、熱が出て來た。しかし、氣分は別にわるくはなかつたので、時間までゐて、そしていつものやうに歸途に就いた。

われながら體の衰へたのを感じずには宗彦はゐられなかつた。會社から電車の停留場まで僅に一二町、それにすらかれは疲勞を覺えて、電車の階段を上るにも、老人のやうに膝に手を置いて、そして辛うじて上つた。閉つてゐる入口の扉を明けるのも容易でないほどかれは弱かつた。かれは疾病のいかに迅速に體力を消耗させるかに喫驚して、自分で自分を見るやうにした。二三の停留場を過ぎると、電車はやがて満員となつた。車體の動搖、車輪の轟き、停留場毎に起る乗客の混雜、それが疲れ切つたかれの神經に名狀することの出來ない苦痛を與へた。辛うじて家に歸つた時には、丸で難破した船の水夫でもある

かのやうな気がして、膝の接合點は離れるやうにだるく、體は綿のやうに疲れて、そのまゝ疊の上にごろりとならずにはゐられなかつた。かれは母親に熱い湯を一杯貰つて飲んだ。

夕飯だけは食ふには食つたが、何うしても起きてゐる元氣がないので、そのまゝかれは床の上に横はつた。この體のだるさも、この熱も、このなやみも、明朝にさへなれば、何うにかなるだらうとかれは思つた。若い者に取つては、睡眠はこの上なき療養である。春の夜なのに、枕を濡すほどの悲しい戀の涙を流しても、一夜すぎて朝になれば、遠い夢か何ぞのやうになつて了ふことがよくあるものである。こんなことを思ひながら、かれは間もなく眠りに落ちた。

しかしその夜はいつものやうに安眠することが出来なかつた。眼を覺す度に、體は氷のやうに冷えてゐるのを感じた。初めは、氣候の寒い故かとも思つて見たが、それは矢張多量の血液の損失から來た結果であることがやがて獨りでに理解された。で、うとくと半眠半醒のさまで曉に及んだ。

會社は休むことにした。

その日は朝から雨が降つて、濡れた山茶花の紅白が美しく硝子障子を透して見えた。宗彦は終日床の上にとくとくして暮した。心は限りなく鎮靜して、時には眠り、時には覺めてゐるが、その現ともなく夢ともない状態は、さながら鐵路を走る汽車の次第に速力を緩めて行くさまに似てゐた。それはいつか停止せずには置かないのにきまつてゐるが、しかもその停止はまだいつともわからないやうな靜かな靜

かな氣分であつた。障子を透して來た雨の日の光線すら、かれの衰へた眼には強すぎるやうに思はれた。

雨は靜かに音もなく降り頻つた。

宗彦には喜びも悔みもなかつた。かれは唯靜かに横になつた。二三日の間、かれの頭は丸で白紙のやうであつた。澄んだ靜かな心には何の影も掠めて通つて行かなかつた。何か思ひ出すことがあつても、それを思ひ廻らすのが面倒である位に、かれは弱く弱くなつた。このまゝ死んで行くなら、死も好いもんだなどゝも思つた。

何遍となく霜が白く降つた。庭の楓はいつか眞赤になつて、病床の障子を明るくした。晝間眠るのは心持が好かつたが、夜眠られないので成るだけ起きてゐるやうに心がけた。夜が更けて——夜が明けて行くのに眠られずにゐるのは辛いものであつた。かれは曉近く戸外に吹き出した風の音などを幾夜か聞いた。

眠ると、盗汗がびつしよりと寢卷を濡した。この盗汗、この不愉快な盗汗、今夜もまたそれが出るのかと思ふと、夜の近寄つて來るのが恐ろしいやうな気がした。けれど、明方僅かなる眠を貪つてからの午前の心持は、何とも言はれず好い氣分であつた。生れたばかりの赤坊のやうな氣分であつた。あたりのしんとした朝の室の内に、線を成してさし込んで來た初冬の午前の日の光線を浴びながら、靜かに床の

上に仰臥した心持は、何とも言はれなかつた。

かれは障子を隔てた外の忙しさなどをりく／＼頭に浮べて見た。

ある日の午前には、初冬の日の麗らかに暖かい四疊半の方に床を移した。

『大丈夫ですよ。まだその位の力はありますよ。』

かうは言つたものゝ、矢張、母親の力を借りなければならなかつた。

かれは青空を寝て眺めながら、若い女——美しい女を思ひ浮べた。母親の慈愛に比較して考へては罪深い事であるが、もし、かれの世話をして呉れるものが、母親でなしに、若い美しい女であつたならば？ 生きた戀に包まれてゐる身であつたならば？ しかし、そんな幸福は、この世では、かれには遂に遂にやつて來ないものであつた。悲しくとも、または他から見て可哀相に思はれようとも、何うもそれは止むを得なかつた。

しかし、かれは思ひ返した。さうした楽しさうな結婚生活、その生活とて、決してさう大した幸福なものではないに相違ないと思つた。妻を持ち、子を持ち、年老いて、矢張、同じく死んで行く人間の一生を考へて見ると、自分の若い死もそれと比べて五十歩百歩に過ぎないやうな氣がした。

ふとかれは枕元に置いてある一冊の書物を取つた。それはメレジコウスキイの『先驅者』であつた。字が細かいので、眼が疲れて澤山は讀めなかつたが、それでも、昨日あたりから、あの多能多才なレオ

ナルドの痛々しい衰頹のところにかゝつた。いろ／＼なことがかれの心を惹いたが、中でも、あゝした天才さへ死に面してはじつとしてゐられなかつた苦悶のさまが、かれに言ふに言はれない驚きを誘つた。

宗彦はをりく／＼本を傍に伏せては、長い間、黙つてじつと空間を見詰めた。

それに比べると、かれの死などは、唯徒らに腐つて行くやうなものであつた。今までにもかれは何物をもこの生命の流の中につかむことが出來なかつた。否、將來生きてゐたからとて、矢張同じやうに何も捉むことは出來ないに相違なかつた。しかも、その平凡が、却つてかれに平靜な心を齎らして來てゐるのであるのに氣がついた時には、かれは不思議な心の衝動を覺えた。天才なればこそ、その死に對する苦悶——あのやうな慘ましい苦悶があつたのであつた。レオナルドなればこそ、あれほどさまざまの生効のある事業に一生を打込みながら、死に面して自分の生涯の徒勞であることを痛感したのであつた。宗彦は何もないかれの一生、さびしい平凡なかれの一生が何の理由、何の因縁があつて、この永久の生命の流の中にひよつこり浮んでそしてまたひよつこり消えて行つて了ふかを考へて見た。

暫くしてかれは再び『先驅者』を取上げた。

土藏のかげ

お春の耳には劇場の騒音がまだ微酔のやうに残つてゐた。身は夏空の夜更の廣い田圃を見渡してゐながら、賑やかなごたごたした色彩はチラチラと眼の前に搖いでゐるやうな氣がする。赤い白いまたは紫の色彩が——と、かの女の前を同じやうに車に揺られて行つてゐるお銀の若い頃の役者狂ひなどが思ひ出されて來た。

かの女の娘盛りはそれに比べては淋しく過ぎた。女學校を出た時には月に一度位手紙の遣り取りをしなければならぬ友達もあつたけれども、それも次第に疎遠になつて、今では全く一人ほつちになつた。お春は車に揺られながら、夜露のしつとりした空氣に誘はれたやうにこんなことを思つた。平生は世間や他人に對して誇りに思つてゐる自分の家の財産などは何うにもならないやうな氣がした。

星の光の煌々と映る村の境界の川の橋を渡ると、兩側には低い農家があらはれ出して、夜目にもそれ

とはつきり見える白堊の土藏、裁る込みの繁み、半鐘を吊した梯子、さうしたものが段々續いて、やがて格子戸の大きな構への七八間前に來ると、前に立つたお銀は、「そこで好う御座んすよ、」と言つて車を停めて下りた。

やがてチャラチャラと錢の音がして、「御苦勞様、五錢づゝ増しましたよ、」といふお銀の聲がしたが、そのまゝあとを振り返つても見ずに、小刻みな日和下駄の音を小石に立てながら大きな格子の前に行つて、

「姉さん、唯今歸りました。」

かう小聲でお銀は言つた。

しかし中は眠つて了つたのか、ひつそりして、暫しはそれに答へるものもなかつた。

「姉さん、唯今。」

二度、三度と段々聲が高く、お銀の焦れてゐるのがお春にもわかつた。

しかし、やがてはわかつたらしく、戸内に駒下駄を引摺る氣勢がして、大きな鍵に手がかゝつたと思ふと、ガラガラと軽くくゞり戸が明いた。裸蠟燭の光がチラチラと内から二人の立つてゐる敷石を照した。

「今お歸りかね。」

かう五十近い體の丈夫さうな、しかし顔の蒼白い女が腰を延ばしながら迎へた。

あたりに満ちてゐる酒の香りと、びつしやり閉め切つた家の中のいきれとが、入つて行つた女達を息苦しく感じさせた。入口は土間で、そこには大きな酒樽が並び、ビール罎の一杯に置かれた棚が、奇怪な繪でもあるかのやうにチラチラと蠟燭の灯に映つて見えた。その土間は眞直に家の中を貫いて、酒樽の列んでゐる後の壁一重が勝手、右は店、それに接して主人の居間があるといふ風につくられてあつた。そしてそこに、主人の金藏と妻のお静とが寐た。

子供達——總領の俊介と弟の光二とはその奥の二間の座敷の方に寐た。お春とお銀とはその次の一間へ。

お銀はお春の叔母に當つてゐた。

『芝居は何うでしたね。』

お静は片膝を立てたまゝ、太い指の蒼い掌に茶の分量を計つて、それを急須に入れながら、笑ひつゝ訊ねた。

『大入りでね。』

かうお銀はいくらか顔を燈め加減にして、『それに、役者も餘り好くはなかつた。』

『でも、狂言は好かつた。』

かう傍からお春が言つた。

其處は主人の居間で、少し片寄つて小さな爐が切つてあり、その隅に、茶籠、佛壇、神棚、本箱、机、その他澤山な帳簿が置いてあつた。電話室もあつた。

茶を飲んだり、少しばかり芝居の話の相手をしたりしてお静はるたが、もう遅いのと、さつきとろとろしたところを起されて一時目がさめたのがまた眠りを催して來たので、

『もうおやすみな。私は寝るよ、もう!』

かう言つて寢間の方に行つた。

あとで、お銀は戸棚をあけて、唐辛子の入つた小さな鹽煎餅を取出してそれをほり／＼食つた。お春はお春で、勢ひよく白い脛をあらはして立上つて、吊してある籠から水蜜桃を取つた。二人は暫く爐のそばで食つたり飲んだりして、役者や芝居の品評をした。

二

その居間には朝から日が射した。

小僧が力一杯にガラガラとその表の戸を繰ると、朝日は家の内に流るゝやうにまともにさし込んで來て、いかな寢坊でも眩しくつて寝てゐることは出來ないほどであつた。いつも父親の金藏が最先に飛び起きて、ぞんざいに大急ぎに蒲團をたゝんで、それから、楊子を叩へて井戸流しに顔を洗ひに行つた。

臺所は下駄穿きで何でも出来るやうにつくられてあつて、井戸は勝手の屋根の下にあつた。金藏の顔を洗ひに行く時分にはお静は下女のお清を相手に、いつも裾を蹙けて、效々しく働いてゐた。

『婆さん、顔の色がわりいな。』

金藏は口のまはりを齒磨粉で白くしながら、丸々と肥つた體を猫背にして、眼尻に皺を寄せたあか黒い顔をお静の方に向けた。

『何うもませんがね。』

『葡萄酒飲んでゐるかえ？』

『え。』

『もうなくなつたらう、なくなつたら、電話で二三本言つてやりな。』

『まだありますよ。』

『困るなア。碌々飲まないんだな。餘所ぢや飲まうたつて、ロオド葡萄酒なんか飲めない家があるんだ。それなのに家なんぞは、何うか飲んで呉れつて、俺が謝るやうに、頼むやうにしてゐるんだが、それでも飲まうともしないんだからな。いけないぜ、此頃は玉子も飲まないな。黄味だけなら、一つや二つ何でもなからうがな。』

『まづくつてね、玉子は——。でも、葡萄酒は飲んでゐますよ。まだ、しかしありますから。……何う

もすみませんね。さうお氣を揉ませては——』

かう言つてお静はさびしく笑つた。お静は去年心臓を病んで二月ほど病院に入つてゐたのであつた。今ではもうすつかり治つたと自分では言つてゐるけれども、それでも皮膚には血の氣がなく、何をするにも呼吸がきれた。

竈の下はもう火を引いた。味噌汁の支度も出来て、下女は汁の實を切つてゐると、やがて口や咽喉をガラガラ言はせる主人の騒しい音がかなり長くと鳴り渡つた。そしてそれがすむと、今度は拍手を打つ音が静かな朝の空氣に冴えてきこえた。座敷の方では、お春が威勢よくはたはたと拂塵をかけてゐる氣勢がした。

顔を洗つて了ふと、金藏はいつも酒庫の方へと見廻りに出かけた。白壁の土藏が氣持よく朝日に照されてゐるのが先づ第一にそれを愉快にした。つゞいて土藏の前に、薪にする杉丸太や松材が堆高く積んであるが、それからずうと勝手の方へ大谷石で長く高塀を築いてゐる工事がかれを樂しました。かれは昨日の工事の出来榮えなどを眺めて暫し立盡した。

やがてかれは居間の方へと引返して來た。

その時には、お春はせつせと縁側に雑巾をかけてゐたし、お銀は見事な孔雀の羽の縫ひのしてある襟などをかけて、いやに艶めかしく若返つた恰好をして、襷をかけたたり裾を蹙けたりして、盥を中庭に持

出して、逸早くも洗濯を始めてゐた。

金藏は居間にあがつて、お静の汲んで出した茶を黙つて啜つて、菓子皿の羊羹を一つ摘んだが、口をもぐもぐさせながら、机の上から大きな算盤を取上げて、節立つた指先で、敏捷にバチ／＼と弾いて見た。朝日はそこら一面に明るく美しくか／＼やいてゐる。やがて金藏は、満足した顔色で算盤を下に置いた。

「お春！」

とかれは呼んだ。

「何アに——」聲をきいてお春が此方にやつて来た。

「酒を一本つけな。」

お春は黙つて引込んで行つたが、やがて底の開いたガラス罎が一本爐の傍の猫板の上に持つて来られた。金藏は小さな盃で、チビリチビリそれをやりながら、頻りに帳面をとどころ明けて見て、算盤を弾いて見たり何かした。何だか氣持が好さ／＼うだつた。そこへ、自轉車ですぐ近い町へ新聞を取りに行つた光二が歸つて来た。新聞は東京のも大阪のもあつた。

朝飯は倉の若衆や小僧達がドヤ／＼と竈の後の板敷に上り込んで、飯を食ふのが早いので、晩いのと大騒ぎをして食ひ出すのが始めであつた。しかしかれ等の食事はすぐすんで了つた。かれ等は瞬間にドヤドヤ

と出て行つた。

家のもものでは、光二がW市の商業學校に行くので、大抵一番最初に食つた。それから暫くして、長男の俊介が膳に向つた。その膳は箱膳で、茶碗や箸や、また食ひ残したものなどが皆なその中にちやんと仕舞はれるやうになつてゐる。俊介は今年二十九になるが、箸を子供のやうに握つて、味噌汁などは減多に啜つたことはなく、常に絶えず東京から海苔や、佃煮や、雀焼などを取寄せてご飯の菜にした。

「この頃は、東京の佃煮はまづくなつたな。」など、言つて箸を置いた。

金藏は勝手に食つたり居間で食つたりした。

女達はいつもお終ひだ。

飯がすむと、金藏の姿は俊介と一緒に酒庫の入口に屈んで、酒を樽に詰かへてをるのがよく見られた。

小僧達が、脊中に四つ割、六つ割の樽を背負つて、自轉車で出て行かうとすると、

「お錢を貰つて来るんだぞ。向うのいふことばかりをきいてゐては駄目だぞ。」

など、後から聲を懸けた。

太い井戸繩を手繰つて、大きな洗桶に一杯水を湛へて、下女が茶碗や何かを洗つてゐると、その傍にお春も来て手傳つた。其處へ水差を提けてお静が来た。お春は言つた。

「銀ちやんは、まだ國雄のを洗つてゐるんだよ。」

お静はしかもその言ひつけ口には成るだけ取合はないやうに、

『さうかえ……。誰も子は可愛いからねえ。』

『可愛けれや、出て来なければ好いんだ。子供が三人もある癖に——。今度の阿母さんにだつてわるいやね。もう自分は他人になつたんだもの。』

『そんなことお言ひでないよ。聞えたら怒るよ。』

かう母親がとめると、お春は倍々好い氣になつて、『構はない。怒つたつて構はない。本當なもの。また、あの國雄の餓鬼も餓鬼だ。この間なんかも、俺は大きくなれば、母さんの世話をするとさ。始終小遣や着物なんか貰つてゐるもんだから、そんなことを言つてゐるやがる。』

鶏の一群が店の方から餌を啄きながらやつて来て、母子の立つてゐる足元に近寄つて、そのあたりを暫し突つてこつこと言つてゐるが、やがてまた奥の方へとぞろぞろかたまつて歩いて行つた。

三

お銀はそんな蔭口を姉や姪にきかれてゐるとは少しも知らずに、満天星の木の傍に盥を据ゑて、中腰になつて、頻りに白いものを洗濯板に擦りつけてゐた。此方から行つた鶏の群は、お銀の後の日當の好いところに行つてあちこちに散らばつた。

お銀はやがて洗濯物を白い腕にかけて、酒庫の傍の方へと歩いて行つた。

そこには、僅かな野菜畑と、材木の物置と、得體のわからない小さな祠とがあるばかりであつた。その畠と土藏との僅かな空地にかの女は竿を二本通して、メリヤスのシャツだの、襦袢だの、單衣などをそこに干し並べた。此處は人目に遠い處であつた。

向うの新築の石塀のあたりでは、頻りに石を研る音がきこえ、土藏の前では、木挽が松板を挽いてゐた。お銀の姿を見ると、

『今日は。』

と丁寧にあ挨拶して、『結構な好い天氣で御座いますな。』

『本當に好い天氣ですね。』

かうお銀もにこやかに挨拶して通り過ぎた。

井戸端のところに来て見ると、お静もお春ももうそこにいるなかつた。下女のお清が、ひとり低頭して赤い太い腕をむき出しにして、せつせと釜を洗つてゐた。

お銀は自分の家から一町と離れてゐない農家に嫁びいたのであつたが、姑が難かしいとか何とか言つて、今から八年前に、三人の子をあとに残して出戻つて来た。すつかり、もう縁は斷れて了つて、あとにも別な後妻が入つたり何かして、その家の内情もすつかり變つて了つたけれども、それでも近くにいる

るために、三人の子供達——殊に長男の國雄は、何ぞと言つては、人目をかねながら母親の許にやつて来た。

それにしても、八年の間、お銀のゐるためにこの家庭は何んなに動搖したであらうか。お銀は姉のお静の穏かな性質と違つて激しい氣性の持主であつた。それに神経が強かつた。今ではもう大分よくなつたけれども、以前は時計のセコンドの音にも、一疋の蚤にも安眠することの出来ないといふほどであつた。従つて家の者とは誰とも皆なよく喧嘩した。そしてそれは金藏が町へ用事を足しに出たあととか、旅に行つて留守の時とかによく起つた。勿論、穏かな姉のお静は、何んな場合にも黙つてゐた。困つた妹だとは思ひながら黙つてゐた。

中でも、總領の俊介とは、一番ひどい喧嘩をした。女の癖に、後には組討をした。髪の壞れた物凄顔でお銀が、『妾はこゝで生れたんだ。手前の叔母だぞ。畜生よく殴りやがつたな。』かう武者振りついで行くと、俊介は俊介で、『何だ、生意氣な。俺は此處の跡取りだ。貴様のやうな餘計者は、さつさと何處へでも行きやがれ！』と言つて嗚鳴つた。爲方がないので、お静はいつもその留め役をつとめた。喧嘩のあとは、お銀は二日も三日も黙つて口をきかなかつた。相手がお春だと、いつも負かされて、陰の方でシクシク泣いてゐるのが例であつた。

お銀は濡れた手を拭いで拭いて、居間に入りうとしたが、ふと表の方をちらりと見て、急いで帳場を

抜けて、梶子戸の一隅の方へと行つた。そこには新を着た十五六の少年が立つてゐた。それは國雄であつた。幸ひにも店にも往來にも人の姿は見えなかつた。お銀は帯の間から鼻紙に包んだものを渡して、あたりを見廻しながら此方に來た。

四

座敷では、一面に新聞が散らされてある中に、だらしなくお春は寐そべつて、頻りに婦人畫報の寫真を見てゐた。

其處へやつて來たお銀は、

『芝居へ行つた翌日は、何うしてもくたびれるね。あ、あ。』

かう溜息をついて、そこに半ば蹲踞るやうにしたが、二三種の新聞の中から、特に都新聞を選び出して、一面の長い續き物を読み始めた。

暫く沈黙がついた。

やがてそれをも讀んで了つたらしく、

『お梅の爺は、もう來さうなもんだな、肩がたまらなく張る。』

かうお銀は言つて、自分の肩を二つ三つ叩いて見た。

『呼んで来て上げようか。』

かうお春が言つた。

『なアに、その中に來るでせう。』

『でも、待つてゐては、いつだかわからない。呼んで來よう。』

『さうかえ、氣の毒だね。』

『なアに——』

お春は立上つた。

しかしお春には他に目的があつたのであつた。お春は間もなく歸つて來たが、やがてそこに投げ出した竹の皮包を見ると、中から串にさした團子が出て來た。『また、お團子かえ。』かう言つてお銀は笑つた。そしてすぐ一本取つて口に持つて行つた。

『よく食ふね。』

『だつて、もう十時よ。』

それから始まつて、盡きずに食物の話が出て來た。かれ等は何ぞと言ふと、商用で東京へ行くものに頼んでいろ／＼旨いものやらめづらしいものやらを買つて來て貰つた。俊介は上野の廣小路の雀焼、お銀は淺草の仲見世の鹽煎餅、お春は上野停車場前の岡野の餅菓子といふ風に――。従つて戸棚には、い

つも東京の甘いものが絶えないといふ形であつたが、しかも田舎のザラ／＼する團子も食つて見てまづいといふでもなかつた。『東京の餡物は高くばかりなつて、しやうがない。』など／＼二人は話した。

暫くして、店に、『今日は。』といふ聲がした。

『あ、お梅の爺が來た。』

かう言つてお銀は半ば起ちかけた。

と六十ばかりの、鬚の半ば白く疎らな、顔の蒼白い年寄が、縞目もわからないやうな着物で入つて來た。汗くさい匂ひが何處からともなくした。

『相變らず、いつも御馳走がありますね。』

『さア、お上りよ。』

『御馳走さま。』

さう言つただけで、爺は手を出さなかつた。

『大變、肩が張つて、しやうがない。あとで、一本つけて上げるから、精出して揉んでお呉れな。』

『へえ、へえ。』

早速爺は仕事に取かゝつた。

お春は新聞を讀みつゝけてゐるたが、お銀は口を利かず、母親はゐてもゐないやう、店では金藏も俊介も

皆な出拂つたらしく、夏の午後はひつそりとして、唯石切る音が夢見るやうに響いて来るばかりであつた。戸外は残暑の暑い日がヂリヂリと照つた。お春は新聞の上に突伏したまゝ、好い氣持になつて、ついウトウトした。

家の前を真直ぐに十二三町もゆくと町に出た。午後には町の市場に野菜物をつけて行つた百姓が、馬を店前に待たせて、『一杯コップに……』などと言つて入つて來た。何うかすると、お春は櫛を取つて煮豆の残つたのと漬物の餘りなどを小皿に載せて出して、自分は遠くその百姓から離れて店に坐つてゐたりした。餘り近しくすると、さういふ百姓達は、お春のハイカラに結つた頭や異國模様の出た帯などをめづらしさうに眺めて、ぐづぐづと一二杯のコップ酒を前に長く話し込んだ。お春はそれを恐れた。

店賣は、夕方が混雜した。近所の百姓の上さん、泥だらけの子供などがてんでに籠を下けて、二合呉れとか、十錢がた呉れとか言つてやつて來た。其時分は、西日が一杯に店に當るので白い日除をしてそれを遮つたが、その外される頃には、倉の若衆が、逞しい體を素裸で、風呂から出て來て、敷石の上を倉敷の方へ歩いて行くいなせな姿が店賣の飲口を拵つてゐるお春の眼に映つた。夕日はあかあかと庫の向うの竹藪を染めた。

その時分には、小僧は鷄を膝に骨折つて追ひ廻して入れやうとしてゐるし、俊介は土間や店先を掃除して、そこに心地よく打水をしてゐたりしてゐた。

時にはお春は小僧の着物を縫つたり、古い着物を解いて母親の手助けになるやうなこともしないでもなかつたけれども、しかし多くは懶惰にその日その日を送つて行つた。何も爲すこともなくて暮らして行くやうなことが多かつた。その癖、座敷の長押にかゝつてゐる東照宮の遺訓を、横になりなり見覺えて、電話室へ急ぐ縁側で、『人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し、急ぐべからず。』などと小聲で誦しながらばたと歩いて行つた。

一日きこえてゐた石屋の音も既に止んで、仕事着の塵を拂つてゐるかれ等の姿が、樹と樹との間にチラと隠見した。やがて職人達がぞろぞろと帳場に聲をかけて歸つて行くと、親方だけ二人は、疲れたといふ風にして縁側に腰を下して休んだ。そこに、お春は酒と肴とを持つて行つて置いた。

金藏は金藏で、その頃、風呂に入つて、湯を水のやうにうめてゐた。

五

金藏には、風呂から上つての晩酌が、この世の中での一番の楽しみでもあるかのやうに、暫くの間、湯上の素裸で爐の前に胡坐をかき、臂を膝の上に立て、あたりを心地よけに見廻してから、一人靜かに盃を口に當てた。と、お銀は莞爾しながら、勝手から土間の通ひの板を渡つて、『兄さん、こんなものは何う？』などと言つて、胡瓜揉の小皿を運んで來て下に置いて、序でに二三杯お酌をして行つた。來るものも來る

ものも皆盃をつきつけられるので、お春も、お銀も、俊介も皆なそこで酔つた。アセチリン瓦斯の灯は一間のすべてを涼しく美しく見せた。

金藏は盃を口に當てながら、心持好ささうに、若い時分のことなどを思つた。この店を養父の手から譲渡された時には、僅か百圓の金の融通にも困つたが、それから思ふと、自分はよくこれまで大きくしたものだなどと思つた。庭の一つの方の土藏だつて、店前の米藏だつて、皆な自分の代になつてから出來たものだ。養父の手から受取つた時の家だつて、位置こそ同じであるが、あとも形も残つてゐない位にかれが修繕した。新築する以上に金をかけた。酒庫の六尺桶も、何本植ゑたか知れやしない。それにかれは村長にも推された。郡會議員にもなつた。酒造組合長にも選ばれた。縣下でもかれの名を知つてゐるものは澤山にある……。これで、俺も學問さへ出來れば、人一倍すぐれた、誇るに足る人間だが、惜しいことに、それはやることは出來なかつた。仕方がないからと思つて、せめて子供達には、本でも讀ませようと思つて、莫大の金のかゝるのには頓着せずに、『大日本地名辭書』だの、『大日本百科辭典』だのといふやうな浩瀚な書籍も買へば、歴史、地理、科學の本も随分買つた。現に、駐在所の巡查や小學校の訓導などが、圖書館か何かのやうにして、調べ物があると、いつも來ては用を足して行く。しかし、折角、さう揃へてやつても、子供達は碌にそれを讀まうともしない。(矢張、親に似て、學問は不得手かしのれんな。)盃を口に當てながらこんなことを金藏は腹の中で言つた。

(これからは、子供の身だ。女は女、男は男と、それぞれきめてやらなければならぬ。俺だつて、來年はもう五十六だ。いつまでも樽の呑口をギイギイ拵ねりたくもない。)——急に、かれは大きな聲で、

『婆さん、婆さん。』

と呼んだ。

腰に手拭を挿んだお靜は、勝手から此方へとやつて來た。

『何か御用?』

『まア、好いから、少し此處にゐなよ。』

『はい。』

と言つてお靜は素直に其處に坐つた。

金藏はもうかなり酔が廻つてゐた。

『あの石堀が出來ると、火事ももう怖くはなくなるな。何處も彼處も新らしくなる。』

『あの普請はまだ餘程日がかゝるんですか?』

相槌は打たずに、かう反問して來たが、別に機嫌もわるくもせず、

『もう、たんとのことはない。』

『お金ばかりかゝつてしやうがありませんね。』